

# メーチ・ケーウの物語

翻訳 : Paññādhika Sayalay



## 目次

---

|                        |     |
|------------------------|-----|
| まえがき .....             | 3   |
| 第一章 在家——浮世の歲月 .....    | 8   |
| 戦士のような無畏なる精神 .....     | 14  |
| 生涯の祝福 .....            | 19  |
| 桑畑 .....               | 25  |
| 農家暇なし .....            | 30  |
| ちびっこケーウ .....          | 33  |
| 第二章 出家——メーチの生きざま ..... | 38  |
| 万縁の放棄 .....            | 38  |
| 再びの宝 .....             | 40  |
| ハチの巣をつつく .....         | 45  |
| 水を汲む .....             | 48  |
| 別世界への出入口 .....         | 51  |
| いのしし .....             | 56  |
| 山中の亡霊 .....            | 59  |
| ノックラパ洞 .....           | 63  |
| 還俗 .....               | 67  |
| 観身の法門 .....            | 71  |
| メーチの模範 .....           | 74  |
| 参学の旅 .....             | 78  |
| 第三章 聖道への歩み .....       | 84  |
| 修道因縁の変化 .....          | 84  |
| 法の予兆 .....             | 90  |
| 内にある死体 .....           | 98  |
| 自在なる覚知 .....           | 103 |
| 光明の核心 .....            | 107 |
| 満開の花 .....             | 110 |
| 第四章 清浄——円満果証 .....     | 115 |
| 河の流れと大海 .....          | 116 |
| 謝恩 .....               | 120 |
| 終生不変の信頼 .....          | 123 |
| 心清浄 .....              | 125 |
| <メーチ・ケーウ法話集> .....     | 130 |

|                                  |     |
|----------------------------------|-----|
| <メーチ・ケーウ法話集> .....               | 130 |
| <メーチ・ケーウ法話集> .....               | 132 |
| <メーチ・ケーウ法話集> .....               | 133 |
| <メーチ・ケーウ法話集> .....               | 133 |
| <メーチ・ケーウ法話集> .....               | 134 |
| <メーチ・ケーウ法話集> .....               | 134 |
| <アチャン・カンパンがメーチ・ケーウに語った戒と律> ..... | 135 |



メーチ・ケーウ（1901-1991）は、田舎に生まれた女性で、タイ東北地方の平凡な農村において、素朴な生活を送っていた。彼女は、多くの困難を克服し、家を離れ、仏陀の聖道を追い求めた。メーチ・ケーウは、若い頃から非常に良い因と縁があり、何人かの、当代の著名な禅師に出会うことができた。彼女は、彼らから真剣に学び、一粒の、清明で運用自在な心でもって、精進し、修行した。彼女の頑張り、彼女の勇気、直観的智慧が彼女をして、一切の世俗の限界——社会生活の多くの気がかり、内心の心霊の手枷足枷——を超越して、生老病死の束縛から解脱せしめた。メーチ・ケーウは、現代人が知り得る、何人かの阿羅漢尼の中の一人であり、彼女は生き生きとした実在の模範であり、一個の衆生——男女を問わず、種族、階級の別なく——みな、仏教の最も究極なる果位を、証悟することが出来る事を、証明した。

訳者注：メーチとは、タイ語で、出家した女性の呼称。正式にはくメー・シーラ・シン>と言い、メーは‘女性’、シーラは‘戒’、シンは‘守る’という意。中国語では、‘持戒修道女’と訳される事が多く、大乘の比丘尼に相当。

“私が子供の頃、寺院に行く時は、必ず父母が同伴しなければならなかったし、比丘と混じって座ったりする事は、決してなかった。比丘たちが仏法について討論している時、私はその後ろの、なんとか聞き取れる場所にて、座って聞いた。禅の修行を教えてくださいと教える教師は、我々に対して、仏への礼拝の仕方、仏陀の功德への讃嘆、読経の仕方を、教えてくれた。彼は、我々に、慈心をすべての衆生に、回向するよう勧めた。また、日常において、人として、率直で正直であれ、気概を持って、と励ましてくれた。また彼は、在家者として、我々が、どれほど惜しみなく布施をしても、その功德は、出家してメーチになり、誠心に修行して、一切の苦を滅する事には及ばない、とも話した。私はこれらの話を、しっかりと心に刻み付けた。” ——メーチ・ケーウ

## まえがき

---

本書の内容は、この人生で、菩提道において、最も高い果位を証得した一人の女性——メーチ・ケーウ——の修行とその生涯について、書かれたものである。メーチ・ケーウは子供の時から修道の生活を指向し、少女の頃から、非常によい因と縁に恵まれ、何人かの、当代最も著名な禅師に出会うことができた。彼女は、彼らの指導を尊び、従い、赤子の心のような真心と誠意をもって、修行した。根器が鋭利であった為、彼女は非常に速くサマーディの道に精通し、禅の修行における年若い奇才となった。彼女の心は、深い定に何時間も、軽々と入ることが出来、多くの不思議で美しく妙なる境地を観察することができた。そうではあっても、家人の干渉によって、メーチ・ケーウは、最初は、

出家して修道する希望を叶えることができなかった。彼女はただ忍耐して、チャンスが訪れるのを待ち続けるしかなかった。

20年を数える、決して円満ではなかった結婚生活を経て、彼女は出家する因と縁が熟し、剃髪得度して、メーチとなった。出家の後、彼女は長年、多くの著名な禅師と共に生活し、修行した。これらの禅師は、彼女の入神の禅修行の様子に讃嘆した。特に、彼女の神通に対する熟練した様は、禅修行の指導者であってさえも、彼女と同じレベルである人は、何人もいなかった。しかしながら、更に得難いのは、彼女は、この無常なる世間への執着を断ちきる事に成功し、最終的には、徹底的に解脱した所の、無為の境地を証得し得たことである。現代社会において、人に知られた阿羅漢尼の一人として、彼女は生き生きとした生身の模範であり、一個の衆生——男女を問わず、種族、階級の別なく——みな、仏教の最も究極の果位を証悟することができることを証明した。

仏陀の時代、非常に多くの女性修行者がいたが、大部分の人々は、聖道において果位を証得し、多くの女性が、仏陀の称賛を浴びた。仏教の早期の経典の中で、仏陀の女性弟子たちが、褒め称えられているのを見ることができる：彼女たちの精進、智慧と衆生を指導する能力は、賛美された。当時、多くの女性が、世俗の家族を捨てて出家して、出離の生活を過ごした事に、疑問をはさむ余地はない。実際、仏陀が女性の出家を許した後、大量の婦女が女性サンガに加入した。当時の社会の女性に対する各種の束縛を考えると、これは一つの非常に大きな成就・成果であった。その当時、男性が父母の元から離れ、妻と子どもを置いて出家することは、彼の求道の願いが堅固であること、道業のために家庭を捨てることは功德だと考えられた。

しかし、この方面において、女性の出家は困難を極めた。女性は、男性とは全く異なっていて、それほど自由ではなく、出家するには、夫の無理難題に耐え、許可を得なければならなかったし、通常、女性は、年老いた父母や、子供の面倒を見なければならなかったからである。仏陀が尼僧サンガを創設して、女性にとって、方便として利用できる扉を開いたため、そのことによって、女性たちは、出家生活を送ることができる機会を得、社会の習俗と文化の限界を、突破することができた。仏陀は、女性が仏法を理解する能力は、男性と同等であると認めたが、このことは、当時（+のインドの人々）にとって、一個の革命的な考えであったのである。

仏陀が成立させた比丘尼サンガは、1000年の長きにわたって栄えたが、しかし、最終的には、戦乱と飢餓などが原因で、伝統が断たれてしまった。仏陀が改めて比丘尼サンガを再建する方策を残していなかったために、現代の上座部仏教の地域では、女性の出家者は、すべて 8戒を守るか、または 10戒を守る者である。タイでは、女性の

出家者は、通常皆、8戒尼であり、メーチと呼ばれる。比丘と同じく、メーチも剃髪し、一般の在家者よりも厳しい、厳格な戒を守り、在家と区別をつけるために、純白の衣を着用する。メーチの行い、着衣と生計に関して、みな厳格な規範がある。彼女たちは、雇われ人にならないし、給金が出る仕事につかないし、売買の仕事に従事しない。彼女たちは教育を受けて、厳粛な姿と威儀を保ち、そのことによって、衆生が真実、誠心誠意仏法を修習することを発心するよう、激励するのである。

ほとんどのメーチは、比丘が住職をしている寺院に住んでいて、少数のメーチは庵に住んでいる。ただ、この庵も、通常は、その地域の寺院に所属していることが多い。修行を主な目的とする道場、特にタイの森林仏教の伝統では、女性たちに自由な時間と、基本的な必需品を与えて、彼女たちが全身全霊で、出家生活に打ち込めるよう、配慮している。故に、多くの女性は、この種の寺院に付属するメーチの団体に加入して、修行することを選択することが多い。幸いなことに、仏教徒は、社会は、異なる職権と地位によって、運営されている事を知っているため、一人の女性の社会的地位と、彼女の人格・人品とは無関係であることをよく知っているが、このような理解は、問題の影響を削減するのに役立っている。

大部分の伝統的な文化の中では、男女の差別は根深いもので、この現象は、宗教圏の中にも同様に見られる。ただ、そのようであっても、性別は、過去の業から齎されたもので、一種の運命であり、故に暫定的なものであり、来てはまた去るものであり、そして、生命の本質は無名無相であり、男でもなければ、女でもないのである。

仏法の基本的な原則は：いかなる人の属性も、みな、実質がない——一切の形成された個人独特の個性の要素は、みな変化して無常であり、最終的には、滅し去る。一人一人個性は変化し続けており、それが永遠に存在したことは一度もない。ということは、あらゆる”自我”を構成する所の因と縁は、みな無常であり、変動して定まらないものであり、色身の一切、内心の思想と感覚、そのすべてに実質はなく、最後にはみな消えてなくなるものである。それゆえ、心身に執着する事は、憂い悲しみ、苦悩の主要な原因である。

もし、心の外にあるすべての属性を剥ぎ落とした時、その本質は性別もなく、階級もなく、地位もないことが覚悟・覚醒できたならば、我々は、我々の進歩を阻害する所のもの、我々の自由を制限している世俗的な区別、身分などの観念を、滅し去ることができる。もし、我々を輪廻生死させる所の、束縛から解脱したいのであれば、必ずや、これらの世俗的区別を滅し去らなければならない。この角度から見て、一人一人の心内にある、克服されなければならない根本的無明は、本質的にはみな同じであり、故に、人

はみな平等なのである。心よりさらに不思議なものは、ない。一粒の、訓練を受けた心の、その能力は非常に不思議なものである。

メーチ・ケーウの心は、生まれつき勇猛で、活力が充満しており、禅の修行において、予知夢と天眼を運用して観察することは、彼女にとっては非常に簡単なことであった。神通は、彼女にとっては、もとよりエネルギーの元であったが、同時に欠陥でもあった。彼女はその中に何年も道を見失って、神通に沈み迷うこと（+の弊害は）、己自ら克服しなければならないほどであった。だいが後になって、己の心を統制することを覚え、そのときになってようやく、彼女は、この非凡な才能を、善くて巧みに利用することができるようになった。

とはいえ、人間の心の根性、生まれ持った性質は、一人一人、非常に異なっており、ある種の人々は、メーチ・ケーウのように非常に活発で、大胆であるが、ある種の人々の心は、慎重で保守的である；禅の修行においては、その両方ともに、利点がある。非常に多くの人々が、修行がなかなか進歩しない、困難が重々多いと思っているが、メーチ・ケーウの心は活力に満ち、修行の速度は非常に速く、彼女のように、エネルギーが充満していて、また同時に、善くて巧みな方便を擁している心は、めったにあるものではない。一般の人々は、彼女の、あの特殊な神通力と比較し、競うことなどできない。故に大部分の禅者はみな、彼女の歩いた修行の道を、追隨して歩む事はできないのである。

更に奥深いレベルから見れば、メーチ・ケーウの修行は、無常生死を超越して、解脱の本質にまで到達している。その覚悟・覚醒の心は、二つの、はっきりとした異なる面を持ち合わせている：それは、心の能知（＝知る事のできる能力）の本質と、その中において、生滅変化する心境である。この区別を理解できないならば、我々は、変化する心境を真実だと見做して、これが心自身だと思いなしてしまう。実際は、心境は瞬時に万変し、一刹那も安定することがない；ただ、心の能知の本質のみが真実、恒常不変なのである。我々は通常、すべての事柄を雑駁に混ぜ込んで、それを心だと称している。実際は、能知と心境が、同時に存在しているのである。

以上の洞察を得たならば、能知の心を覚悟・覚醒することができ、それは、所知（＝知られる所のもの）の苦楽とは異なる（+別々の）事実だということが分かる。心の本性は、一切の境界及び状況を知っているものの、しかし、それらに全く、一筋ほども、執着しない事である。故に、心性は、苦楽の無常の境界を超越する（+ことができる。）もし、我々がこの点について、見る能力（＝直接知覚する能力）を持っているならば、

世俗の真実を捨て、それらを放下（＝手放す）ことができる。このことを理解し、受けがうことができるならば、自然に執着から離れ、解脱することができる。

メーチ・ケーウは、田舎の女性である。彼女は、タイの東北部の普通の農村で、簡素で素朴な生活を送っていたが、苦悩を滅し去るために、幾重にも重なる、多くの困難を克服して、家を離れて、仏陀の聖道を追い求めた。彼女の頑張り、彼女の勇気、さらに彼女の直観的智慧が、彼女の一切の世俗的限界——外部的な社会生活の諸々の気がかり、内部的な心霊の手かせ足かせ——を超越させ、彼女をして、生死の束縛から解脱せしめる事となった。彼女の生活と修道は、その他の女性修行者と同じような困難があった。

しかし、彼女は平然と、これら一切の挑戦を受け入れ、伝統的な出家制度の中に、巧みに溶け込み、心をば、悠久なる源流を持つ伝統に預け、逆境を、増上縁に転換する事に、成功した。彼女は、現実社会の不平等を恨むこともなく、一粒の、清明な心に、工夫をこらして修行する事と、自在に心を運用する事を通して、最終的には、自我と文明が同調する所の、固く打ち破れることのない無明を、滅し除いたのである。振り返って、出世間の智慧でもって観察すると、彼女が一生涯を過ごした所の、あの強固な階級と不公平は、すでに雲消霧散していたのである。

仏教界において、禪定に精通する比丘の僧侶たちは、文化の偏向の影響を受けない。彼らは、真正に修行する八戒修行女は、深い境地を証得することができる、と肯っている。実際、女性たちは仏法に対して、非常に高い悟性を持っており、また同時に、深い定に証入し、殊勝な知見と智慧を、育成する能力を有している。タイでは、多くのメーチと女性居士の成就是、男性出家衆を超えている。故に、通常、禪師は女性修行者を非常に尊重し、根器の上において、女性と男性は、同等であると考えている。当代、タイの森林仏教の伝承では、多くの、人格が優れ、度量が大きい禪師は皆、女性たちは、最高の果証を修得することができる信じ、かつ常に、女性出家者たちを、模範的教師だ讃嘆する。

非常に多くの森林禪師の膝下には、公認されて教師となった女性弟子がいるが、これらの出家または在家の女性弟子は、積極的に仏教活動に参加し、己自身の出色の能力によって禪師、治療者または善知識の役割を果たし、深く、地域社会の尊敬を受けている。メーチ・ケーウはちょうどこのような女性であり、彼女のような女性禪師が残した模範は、人は、男女を問わず、仏法を実践する事ができることを証明し、後に続く修行者の道心を、激発することとなった。

（中略）



この伝記は、相対的に言えば、学術的なものよりも、叙事的なものの方が多い。それは、修行者による、真実誠心なる道心を激発したいがためである。このことから、本書の内容は、読者と共に探索を重ね、仏道の上において解脱した一粒の心が、どのように奥深くまた微妙であるかを、知って頂きたいと思うのである。

## 第一章 在家——浮世の歲月

---

生在這個世界、  
（この世界に生まれて  
我們很重視消逝的  
我々は去りゆく  
每一天、每一月、每一年、  
月日を惜しみ  
珍惜自己和別人的生命、  
己と他人の命を惜しむ。  
因此心總是卷入憂苦和悲痛中。  
その故に、心はいつも、憂いと悲痛の中にある）  
月光珠

9世紀、中国西南部のタイ族は、徐々に、南方に移動し始めた。その勢いの先頭は、雨季の洪水のように、水は滔々と、天の色と共に変化し、水流の方向は、地形に沿って行く道を変え、鬱蒼と茂る森林に染み入り、肥沃な平野を覆い、多くの、同種で文化を同じくする、異なる部落のタイ族もまた、地勢をたどりながら、遠くへ遠くへと前進していき、中国西南部から古代シャムの土地、その高山と盆地に降り立った。多くのタイ族の中、その一つの支族が、普泰族と呼ばれるが、彼らは非常に独立自主的な農民と獵師であった。

普泰族の源は、古代中国紅河流域で、連綿と続く戦乱のために、隣接する南部のラオス領に逃げ、幾世代の移動を重ねて、徐々にメコン河湖畔に至り、この内陸において、何百年かを落ち着いて暮らした。その後、再度河を渡って、西岸の比較的土地が肥沃な地域に至り、最終的、その地に住みついたのである。数世紀にわたる苦勞の經營——干ばつ、水害などの自然災害、及び社会的な災難を経て——叡智ある普泰人は、徐々に統一され、一人の世襲の部落指導者、一群の屈強な武士と官吏によって、莫拉限王国が打

ち立てられた——国名は普泰人が川床から発見し、莫拉の月光珠と呼んでいた宝の名から取られた——ここが普泰族によるこの地域の文化的中心となった。

弁晒村 (Baan Huay Sai) は、旧シャム莫拉限府坎差伊県 (Kham Cha-ee district) の小さな普泰の農村で、メコン河沖積平原の端、盤山山脈の南部が伸びた先の、起伏のある高地にあり、その両脇には、弁邦晒河 (Huay Bang Sai river) と弁邦伊河 (Huay Bang Ee river) が流れている。初期のころ、弁晒村は開墾地域で、密集した原始の密林の中にあり、簡素な高床式家屋が、天を突く巨木がつくる緑陰の下に、ぽつぽつと建っていたに過ぎない。ここの民衆の様子は、精悍不羈で、生活は簡単で素朴、自給的農耕と狩猟によって生計を立てた。各自一戸ごとに、村落の周縁にある肥沃な土地を整地して、きれいになった土地に稲を植えた。耕作地を過ぎると、虎や野生の象が出没する濃密な森林で、住民は、この深くて広い森林が、危険と恐怖を隠し持っているとは深く信じていた。そのため、ほとんどの活動は村落の内側で行い、越境することはなかった。

メコン河河畔の、非常に肥沃な土地に落ち着いたばかりの時、莫拉限は小さな国家であったが、後にシャム・チャクリ王朝の属国となり、部分的な自治権を擁した。伝説によると、昔、三人の王室の姉妹——ケーウ王女、ケロン王女、ケー王女——がいて、弁晒村で生活していた。彼女たちの性格は、母系の血縁によって受け継がれ、普泰人の民族的性格の中に深く刻印されることとなった。この一族の身体には、彼女たちの血が流れており、彼女たちの鮮明な個性が浮かび上がる、すなわち：鋭敏な才智、堅固な意志及び公正な品格である。誇りに値するこの規範を受け継ぎ、独立的な性格を有する普泰人は、伝統、風俗と言語を通して、族人を纏め、その結果、神聖なる伝承は、世代に受け継がれ、綿々と絶える事がなかった。

19世紀の末、莫拉限府の首長は、達頌・祥藍という名の普泰人を、弁晒村の地方長官として任命した。その職務は、紛争の調停、風紀の矯正、また、当地の公共の秩序を守り、社会の安寧を齎すため、普泰族に法律を順守する事を勧め、指導するものであった。達頌法官は、執務に当っては、公正で情理に通達し、一心に人民に奉仕した。当地の治安を維持すると同時に、彼は普泰族の伝統と習俗の継承、保護にも、尽力した。彼の妻は端といい、温和で慈しみ深い女性であった。彼女も法官であったが、それは名目だけで、実際に執行すべき任務はなかった。彼女は、普段は家事をして、子供を育てた。

彼らには、合計 5 人の子供がいた。上の三人は男の子で、下には二人の、年の近い女の子がいた。一番小さい女の子は、1901 年 1 月 8 日の早朝に生まれ、端はこの子に、

達白という名を与えた。その意味は ” 人の注目を引く ” である。達白は、小さい時から一種の神秘的雰囲気を擁して、ある種の事柄を知ってはいるが、言い出せないでいる、という風情であった。彼女が話ができるようになってから、彼女は母親の耳元で、小さな声で、夜中に自分がした己の冒険：一塊の光と一緒に、美しく、妙なる場所に漫遊したという事を、打ち明けるのであった。彼女はその話をしながら、嬉しそうにフフフと笑うのだが、しかし、それがどこなのかを説明することができなくて、ただ身振り手振りで知らせようとした。

後年、達白はメーチになった。彼女は自分が小さい頃に、多くの、天界から来た遊び友達がいた事を、思い出した。これらの天人が発光する身体の色は、彼女だけにしか見えなかった。彼らは、彼女の過去世において、何度も生まれ変わりながら、共に修行した修行仲間で、彼女の心が肉身に耽溺し、人間界に沈むのを心配して、特別に、彼女の心識が体から離脱できるようにした上に、彼らと共に、天界に遊びに行けるようにしたのである。

達白の父母は、敬虔でかつ開明的な仏教徒で、普泰人の中において盛大に執り行われていた、鬼神を拝む祭事は、これを敬して遠ざけた。彼らの家は、村の寺院のすぐ後ろにあり、その間に竹の垣根があった。毎年乾季になると、寺院にある大きなマンゴーの木の実が熟す度に、マンゴーが、彼らの家の庭に落ちた。このような環境の下で成長した達白は、小さい時から、寺院において、朝な夕なに響く、静かで落ち着いた読経の声、出家者の修行や作業や休憩の風景を、当たり前のようにみている。

彼女は小さい頃から、すでに出家者の、軽やかでソフトなメロディーのついたお経を読む声は、己の内心に共鳴するまで、専心して聞くべきであることを知っていた。仏教のお祭りのある日、彼女は最高に興奮した。というのも、村人全員が、彼女の家の裏の寺院の空き地に集まって、祝い事を催すのだから。

達白は常々、自分の父親が、如何ほどに、出家者を尊敬しているか、を見た。それは、心の中から発せられたもので、真心からの尊敬、敬虔で熱心な態度は、高官と会う時に表す緊張の態度、警戒心を伴う尊敬とは、異なっていた。毎朝、達白と母親は、バナナの葉で包んだもち米のご飯とカレーを、出家者の鉢の中に入れてやり、父親は、托鉢する僧侶の後に附いて歩き、僧侶が供養の品を受け取るたびに、彼は如法に傍らに侍して、随時お世話をし、最後に村の端まで随伴した後、供養の品で一杯になった鉢を運ぶのを手伝って、寺院まで戻った。

毎月の満月、上半月、新月と下半月の四回の齋戒の日には、達頌は、得難い機会とばかりに、一日中寺院にいて、謹厳に持戒し、僧たちと世話をし、雑用をした。小さな子供としての、達白の生命のエネルギーは、物質の世界と精神の世界の間を、自由に行き来した。しかし、天には予測出来ない風雲があり、彼女が五歳の時、この二つの世界は、両方とも崩れ落ちてしまった。

完全に予兆もないまま——彼女はこのような出来事が生起することを夢にも思った事はなかった——母親が卒然として、病を得たのち、亡くなったのである。彼女はひどく驚き、困惑したが、以前には当然と思っていたことが、今では、すべてが瓦解してしまったのである。簡単な葬礼の時、達白は、母親の硬く冷たくなって、白い布に包まれ、荒削りの焚き木の上に置かれた身体を見つめた。焚き木に火をつけると、大きく炎が上がり、白い布と皮膚を焼き、肉が露出し、亡骸全体が歪んだ。達白は、それ以上は見続けることができなくて、辛くて生きていけないがの如くに、後ずさりした。

最後に、火は滅され、灰と骨だけが残った時になっても、彼女はその光景をみる事ができなかった。母親の逝去は、年端もいかない達白に、無常と離別は、人生の一部分であり、生命は痛苦と死から逃げられないということを教えた。家族——特に二人の兄、翁と英——の支えによって、達白は徐々に悲痛の中から歩み出すことができた。

二人の兄は、深く深く、この清らかな目をした、意志堅固な妹を愛しており、彼らもまた母親の逝去によって打ちひしがれているにせよ、それでもなんとか方策を講じて、妹を慰撫しつづけた。しかしながら、最終的には、彼女と父親の間に打ち立てられた斬新な、更に親密な、相互の関係性が彼女の心を解かして、ようやく、悲しみの陰、憂いの陰から出てくることができた。愛妻が去った後、達頌は、齋戒の日には、達白を連れて、寺院に行くようになった。彼女は父親と一緒に、そこに何時間も座り、周りを見渡し、白昼夢を見、そして最も重要なこと——癒しをした。彼女はますますもって、寺院の雰囲気にと溺れ、暇さえあれば寺院に入り込み、マンゴーの木の下に座って、何もしないで静かに、安寧の心境を享受するのであった。

達白が最も好きなのは、五月のウェーサカ祭りであった。この日は、仏陀の生誕、証悟、入滅の日である。弁晒村の五月は、一年の内の最も美しい月で、雨季の始まり、最初の慈雨を受けて、各様各色の花が、怒涛のように咲き乱れる。仏殿の中の、供養に使われる、幾つもの机の上には、心を込めた花が飾られ、仏に供えられた花々は、妖艶な色彩を放っていた。夜、僧侶たちと村民は、蠟燭をもって布薩堂を巡り、その後で、出家者が皆を先導して、古老の偈頌を念じ詠い、世尊と仏法を讃嘆する。

これに参加した信徒は、荘厳な法会の中において、濁った心は清らかになり、安らぐ。達白と父親の、心霊上の関係はますます親密になり、最初達白は躊躇したもの、後になって、父親にもう一つの世界、己の神秘的で奇妙な内心の世界について告白した。達頌は、忍耐力があり、疑惑の気持ちを抱えながら、遊びが好きな天人の話や、夢の中の冒険談を聞いてあげた。これらの奇怪で幻想的な漫遊の物語について、彼は娘の話を、聞いてはあげたものの、その真実性については、保留した。

達白が七歳の時、彼女は、まるで映像を見ているかのように自然に浮かび上がる、はっきりとした、己の過去世を思い出した。彼女は過去において、ある時は人であり、ある時は別のもので、医師であったり、王女であったり、普通の市民であったり、一羽の鶏になったこともあった。彼女は非常に天真爛漫に、急いでこの事を、父親に告げた。達頌は、娘の天眼による経験を知り、非常に不機嫌になり、同意できないと思い、彼の顔色は黒く変わり、声も変化して、威圧的な語気で達白を警告した——話し始めた時は温和であったが、すぐに厳しくなった——このことを、誰にも話してはならない！

彼は村の人が、彼女が発狂したと思うだろう事に心を痛め、また、もっとよくない事件が起きる事を心配した。このような小さな村で、このような事がひとたび喧伝されたならば、彼女は一生、汚名を背負って、生きていかねばならないに違いない。徐々に、達白は、家に母親がいない状況に慣れ、伝統的な婦人の責任を請け負い、彼女の姉と共に、家事を分担した。彼女は姉より丈夫で力があり、意志も堅固であった。達白は彼女の母親のように、色々な些末な事柄を、ちょうどよく差配し、解決していった。

一軒の家には、誰か一人、早起きして火を起し、ご飯を炊く人が必要で、誰かが、三度の食事を準備しなければならないし、茶碗を洗い、掃除・洗濯をしなければならない。そのほかに、綿花は糸にしなければならないし、布は織らねばならないし、衣服は縫われなければならない；また箒を作り、籠や食器：ご飯を盛る竹の器、茸や野菜を入れる籐の籠などなど……。少しばかりの訓練を経て、達白はこれら体力を要する労働に慣れていった。それぞれの仕事の細部では、非常に長い時間をかけて、その秘訣を知るものだが、彼女は小さい頃から、色々な仕事に熟達した。家庭内の雑務を整える以外に、彼女は、田または森の近くまで行って仕事をしたが、これらの肉体労働も、また別の技術と知識がなければ、上手にこなす事はできなかった。

達白の母親は、生前、よく彼女を連れて、野山に出かけ、山菜や木の実をなどの、食べられる植物を採り、時には、遠くの池まで行って、魚を捕まえたりした。今では、彼

女は伯母と、彼女たちの子供と出かけて、毒キノコと食用キノコの違い、甘い山菜と苦い山菜の違いを、学んだりした。種を蒔く事、収穫する事、採集する事、食糧問題は、日常の生活の中においては、一番の関心の焦点であった。軟らかくて香りよいもち米は、普泰人の主食であり、故に、お米は、村民の生活とは切り離せないもので、当地の人々の生活様式に、深く影響を与えた。雨季の前、農民は、先に小さな苗代で、苗を育てる。

雨季がやって来ると、大量の雨が土地に滲みこむので、その時、農民は水牛を使って、田を耕す。一度耕した田を、今度は足で踏みつけ、どろどろの泥土にしてしまう。このように処理した稲田は、軟らかい土となり、苗を植えるのに相応しくなる。この時、群れを成した女性たちが、一抱えの苗を持って、腰を曲げて、後ろに下がりながら、小さな束の苗を、田の中に差し込んで行くが、それは、一列毎に、美しく整っていなければならなかった。田植えは、体力を消耗する作業ではあるが、それが却って、村民を団結させることになった。

達白の母親が逝去した後、田植えの時期には、家の女性たちは、彼女の父親の田で苗を植えた。初めの時、達白は、小さすぎて、これらの肉体労働に参加する事ができなかったが、彼女はあぜ道に立って、女性たちがまだうす暗い早朝から、泥沼の中を行ったり来たりして、仕事をしているのを眺め、自分が速く大きくなって、彼女たちと一緒に、仕事をしたいと思ったりした。達白の母親が逝去した後、達白は決まりに従って節を守り、その後に再婚した。継室は一人の年若い寡婦で、小さな女の子を連れてきた。彼女の夫はペストでなくなったのだが、この時代、田舎ではペストが爆発的に流行することがあり、それは巨大な破壊をもたらしたが、もともとすでに艱難である生活に、更に多くの苦難が降りかかった。達白は、この継母が好きで、二人はすぐに仲良くなり、継母の連れてきた女の子とも、友達になった。これらの変化は、新しい日々の始まりのようであり、達白に笑顔が戻り、何を見ても嬉しかった。彼女の歓びと楽しみは、田舎での苦難の生活をすべて、溶かし去ってしまうが如くであった。

しかし、世間は無常であり、達白の異母弟は、生まれてすぐに天に召され、彼女は再び、別離と悲しみに打ちひしがれた。無常というこの苦渋の真相を体験する——これはまるで、彼女が、この変遷し離別しなければならない世界の中で、必ず学ばなければならないと決まっている宿題のようなもので、彼女は周囲の一切の物事が、日毎、季節毎、不断に崩壊しては更新されていくのを見た。無常は生命の中において、真実明確に存在しており、愛別離は、生活の一部であった。普泰の村の生活は、異常なほど艱難で、女性たちの雑務が終わることはない。歳々年は変われど、炊事、洗濯、縫い物、機織り、編み物、田植え、刈り取り……。仕事は達白と継母の距離を縮め、二人は助け合って、

途切れる事のない作業に取り組み、きつい仕事を分担し、二人で一緒に、ほっと一息ついたりした。

達白は、仕事の中から多くの事柄を学んだ。当地には学校がなく、彼女は正規の教育を受けることができなかった。家が、田が、森が、彼女の学校となり、彼女がこれらの場所で学んだ事は、人生にとって不可欠の学びであり、それは——愛、出離、無常、忍耐、失望と決意、苦悩と捨であるが、それらは彼女の一生の支えとなった。彼女は、少女の時代に、このような教育を受けて、ゆっくりと成長していった。

了解你自己、接受自己的錯誤、

(己自身を理解して、己の間違いを受け入れて)

然後努力改過。

(その後に努めて間違いを改める)

對自己不要有所隱瞞、

(己自身に隠すところなく)

最重要的是、不要欺騙自己。

(最も重要なのは、己自身を騙さないこと)

如果你要的話、可以欺騙整個世界、

(あなたがそうしたければ、あなたは世界全体を騙してもよいが)。

但是、絕對不要欺騙你自己。

(しかし、決して己自身を騙してはならない)

## 戦士のような無畏なる精神

---

毎年訪れる灼熱の乾季、しばしば、雲遊の頭陀僧が奔晒村を通り、辺鄙な場所を見つけて、禅の修行をした。その付近の、村を囲む森と高山を、人々は恐れていた。そこは、野生動物が横行し、険悪な野蛮地帯であり、この区域全体は、悪魔によって管理されている、と言われていた。人々が恐れて、中に入らない為に、この大きな森林は、辺鄙で静かであり、遊行僧にとって、ここで苦行し、禅の修行をすることは、非常に適切であった。出離、克己と遁世の頭陀僧は、通常、人のいない山道を遊行し、荒野をさまよい、修行して煩惱を滅し去るのに適する場所を——山の峰、洞穴または懸崖など——を探し出して、心身を落ち着かせることが多い。頭陀僧は戸外で生活し、自然の環境と、変幻して予測することの出来ない天候の下で、日を過ごす。

彼らは、大自然の中に溶け込み、日々、豊かな自然環境の中で生活する：岩石と樹木；河川と溪水；虎、蛇、象や熊（+のいる所で）。通常彼らは、森の縁辺にある小さな村々を托鉢して、命を繋ぐ。普泰族と頭陀僧は、固く結ばれた縁がある。それは、彼らの、あの戦士のような、勇敢で無畏の精神において、好漢は好漢を知るの感があるが故に、頭陀僧の生活方式は、普泰族の人々にとって、非常に容易に受け入れられるものであった。達白の父親は、特に森林僧が好きで、彼は讚嘆の微笑を見せて、彼らの事を ” 本物の仏弟子 ” と称した。森林僧が見えると、彼は大変に意気込んで、子供のような情熱で、彼らを接待した。

1914年、人格高潔にして名声高い頭陀僧アチャン（＝アーチャンとも言う）サオの到来は、弁晒村の信仰を、根本から変えることになった。アチャン・サオと一群の弟子は、ある日突然、弁晒村にやってきたが、彼らは非常に遠くの地方から、何か月も遊行して、ようやくここに到着したのであった。彼らは、ラオスからメコン川を渡り、シャムのアコンパノンに来て、その後色軍府東部の山々を踏み越えて、最後に磐山の荒野を渡って、ここ莫拉限に到達したのであった。

すでに55歳になってはいたものの、アチャン・サオは炎天の下で、終日行脚し、安定した、軽い足取りで、最も危険な地域を踏破した。彼ら一群の人々が、弁晒村の近くに到着したのは、雨期が始まったばかりの時点で、一陣また一陣と荒れ狂う暴風雨の後には、まぶしいばかりの太陽が目を射し、湿気の高い暑気が、土地全体に覆いかぶさった。仏陀の取り決めによると、雨季の期間、僧は必ず行脚を止めて、遮蔽物のある場所で、3か月を過ごさなければならない。アチャン・サオは知っていた。肌をべたつく湿り気は、雨季の到来を告げており、適当な場所を見つけて安居を過ごし、禪の修行に専念しなければならない事を。濃霧が漂う朝日の光の中で、アチャン・サオは弟子を連れて歩いたが、一行は裸足で、褐色の袈裟を着て、鉢を肩にかけて、安らいで静かな村に入った。

彼らは、気概のある村人たちの、どのような布施をも、喜んで受け取った——ご飯、塩漬けの魚、バナナ、また微笑と尊敬の礼拝をも。この、一群の、威儀荘厳の僧たちが出現するや否や、たちまち騒ぎとなり、村全体に、ああでもない、こうでもないという呼び合う声が響き、老若男女はバタバタと、急ぎ食べ物を用意して ” 修行僧 ” に供養をした。アチャン・サオが達白の家の戸口の前を通ったとき、家人全員がすでに、泥の道に整列して、いくらかの食べ物でも、僧の方々の鉢に入れてさしあげ、是非とも、殊勝な功德を積みたいものだとばかりに、供養するチャンスが訪れるのを、今か今かと待っていた。達白は、この一群の出家者は一体誰であるのかを知りたいと焦り、何人かの友人と共に、彼らに付いて行って、彼らが一時的に足を停めている山辺まで行った。



アチャン・サオは、地域全体で言えば、深く尊敬されている高僧ではあったが、しかし、彼らは今まで、お互いに会ったことはなく、故に、この出家者がまさに、アチャン・サオ当人だと知った時、達頌は、望外の喜びを感じずにはいられなかった。

達頌は、たとえ今年の雨季の間だけでも、アチャン・サオに、この村で安居を過ごしてもらいたい、と心に決めた。彼は、この村の隅々——急流のある溪水、湾曲している河川の流れ、山中にある洞窟、切り立った岩、広い草原、または緑濃い森林まで、十分に熟知していた。達頌はアチャン・サオを連れて、自分が安居を過ごすのに適当だと思われる場所を、案内した。アチャン・サオは、邦克朗（＝バン克蘭）の洞穴を、雨季を過ごす場所として選び、達頌は緊張していた気持ちを緩ませて、喜んだ。この洞穴は森林の中にあり、周囲は平坦な砂岩で、村からは、徒歩で一時間ほどの、距離であった。

達頌は嬉しくなって、即刻、作業を始めた。アチャン・サオがここで雨季を過ごすには、いくつかの建物が必要であった：一人の出家者に、一軒づつの茅葺小屋、食堂と経典を読誦する大殿。それ以外に、歩く瞑想の修行に使う小道、及び厠も必要であった。村民は、樹木を切り倒して柱とし、竹を切り出して床や壁とし、長い萱草は、まとめて束にして、屋根とした。彼らはまた、地面を平らにして掃き清め、歩く瞑想に使う小道とし、糞壺を掘って、周りを萱草で囲った。達頌と友人たちが、すべての作業を終えたとき、一つの小さな、きれいに整った森林道場が、荒野の中に、姿を現した。仏教を受け入れる前のその昔、普泰族はすでに、先祖崇拜と神霊を拝む信仰を持っていた。彼らは、動物を犠牲にして、森林を守る神と先祖の亡霊を祭った。

普泰人の先祖崇拜の信仰は根深く、先人を祭る神龕は、生活の中での最も重要な部分となり、大昔に死んだ歴代の祖先に、日ごと祭祀し、慰撫するのであった。彼らは、先祖を祭ることによって、子孫、家屋、村の災禍、子孫の犯した間違いなどから、守って貰えると考えた。もし、何事も順調であるならば、それは神霊が、その家の心がけに満足したということであり；もし順調でないのであれば、自分たちが、まつりごとを怠けて、神霊を怒らせたのだと考えた。故に、何をするにしても、まずは吉日を選び、お供えをして、当地の神霊の機嫌をとらねばならなかった。これらの神には、天神、水神、稲の神が含まれ、彼らの生活自体が、水と稲とに、密接な関係があった為に、普泰族には、以下のような古い言い伝えがあった：「食事のときは、稲の神を忘れず、魚をくれる水神も、忘れてはならない。」

そのような事から、それぞれの田舎の村の真ん中に、仏教寺院があるにはあっても、神霊信仰が、村民の日常生活の、重要な位置を占めていた。アチャン・サオは、長年、

村々を行脚して、村民に持戒の功德を説き、彼らの行為と信仰が齎す結果について、解説した。

彼は、神霊の存在を否定しなかった。これら神霊はどこにでもいた——森林、木の上、高山、洞穴、河川、稲田、土地と空に——彼はこの種のアニミズム信仰を許したが、彼が反対したのは、神霊が人類の煩惱の根源であるとか、または、神霊が苦難を齎すのだという考え方だったが、故にまた、彼は、犠牲の動物を用いて、神霊に賄賂を与え、そのことによって、災難や悪運から逃れようとするということにも反対した。

鬼神は太陽、雨、朝霧と同じように、普泰人の田舎での生活の一部であり、出生や生活、死亡と同じように、分割できないものであった。アチャン・サオは、鬼神を排斥することはなかったが、しかし、彼は村民に対して、鬼神もまた、我々と同様に、その一人一人が、己自身の行為の果報を受けがわねばならず、それらは皆、過去の業によって、鬼にもなりえ、神にもなりえるのだと教えた。これらの、鬼神を祭祀することの問題は、彼らに、大きすぎる力を、与えてしまう事である。アチャン・サオが指導する所の重点は、因果の自己責任であった：喜悦とを悲しみ；楽しみと苦痛；足るものと足らざるもの；これら一切は個人が過去において造りし業と、今現在の行為の結果であった。

普泰村の村民は、徐々に心の転換を感受し始め、一戸また一戸と、信仰を変えた——仏陀と、己自身の、持戒の功德による守護力を信じ、多くの村民は、祖先を供養する為の神龕と神像を、すべて燃やしてしまった。ただ、何人かの村人は、このようなやり方に対して、神霊はどのように反応するのか？報復をしないものだろうか？と、仏教に対して、懐疑的な態度をとった。

アチャン・サオは、朴訥で口下手だった為に、村民に対して、どのようにして、恐怖を乗り越えるのかという事を、分かり易い言葉で、簡潔に教え、信心(=仏法への確信)と戒について、何度も教え、指導した。信心を激発する為に、彼は村民に対して、動物を犠牲にして行う祭祀を、仏・法・僧の三宝への帰依に変えていく事を、奨励した。戒に関しては、彼は、皆が五戒を受けるよう、勧めた。すなわち、不殺生、不偷盗、不妄語、不邪淫、不飲酒であった。己自身の心と行為を守り、己と他人を傷つけさえしなければよいという、かくも簡単ながら、強くて力のある修行を実践したならば、庇護を得られることを、村民は、学んだ。村民の恐怖を解消するために、アチャン・サオは、禅の修行の守護力を解説した。彼はまず皆と共に、仏陀の功德を念じ誦えるようにし、彼らの心が静かになった時に、更に進んで、彼らの疑惑と心配を解決するために、簡潔に直接的に、道を示した：

”みなさん、怖がる必要はないのです。あなたがたが禅の修行をして、‘仏陀、仏陀、仏陀’と念ずるならば、神霊はあなた方に、干渉することはありません。我々は必ず病気をしますが、もし、病気を鬼神の祟りだと考えるならば、それは違います。我々の身体は、一方では、壊れながら、一方では、元のようになるよう、修復しているもので、人は身体がある限り、必ず病気になります。亡くなった親戚に助けを求めても、無駄なのです。それよりは、禅の修行をして、その功德を彼らに回向してあげれば、皆が利益を受け取ることができるのです。”

ここの村人——特に敬虔な仏教徒は、齋戒の日には、時間を見つけて仏教関連の活動に取り組んだり、寺院に行き、お布施を届けたり、雑務の手伝いをしたり、仏法の教えを聞いたり、または禅の修行をしたりすることが、習慣になっている。また、人によっては、すべての活動に、参加する者もいる。この時、達白はすで 13 歳になっていて、彼女は毎朝早くから、父母について、邦克朗の森林道場に行った。彼女は女の子であった為に、出家者と一対一で話し合う事はできなかった。故に毎回、アチャン・サオが、在家の人と話をしている時、彼女は遠く離れた仏殿の後ろ、かろうじて、彼の柔らかな話し声が聞こえる場所に、座った。達白は、婦人たちの後ろに座り、継母の肩越しに前を見て、仏法を注意深く聞いた。彼女はこの種の雰囲気、深く酔いしれた。達白は、すべての村民と同じように、生まれてすぐに、当然のように、鬼神への信仰を受け入れたし、彼女の世界観は、当時の人々と同じように、歴史的影響を受けていた。

彼女は、小さい頃から、鬼神の存在を知ってはいたが、盲目的に信じることはなく、常識的な観点に立って、因果を理解しようとした。家には小さな祭壇があって、先祖を祭ってはいたが、達白の性格の故に、彼女は自然に、仏陀に帰依し、仏法を受け入れた。こうしたことから、達白は、小さい頃からアチャン・サオの深遠なる影響を受け、彼のあの簡素で、現実の中に真理を追求する態度、平和で静かな落ち着いた気質と荘厳な威儀に、気持ちが揺れた。アチャン・サオの性格、彼の話した話、彼の存在自体が、達白に堅固な信心（＝確信）を激発し、彼女の心の中に、消える事のない印象を残した。

彼女は、アチャン・サオの教えを聞いて、禅の修行における、一境への專注を、実践した訳ではなかったが、しかし、心内ではアチャン・サオがすでに証悟した所の、円満静寂な境界を、感受していた。非常に速く、達白はアチャン・サオの徳行による感化を受けたが、この一陣の微妙なる摂受力は、彼女を新しい方向へと向かわせることとなった。彼女は生まれて初めて、この種の力に、忘れがたい思いを持った。当時、アチャン・サオは、女性たちがサンガに供養をする功德を讃嘆していたが、それは彼女たちが、毎日食べ物と必需品を供養するのは、出家者を利益するだけでなく、同時に、己自身においてもまた、将来、福報が得られるのだ、とした。

また、アチャン・サオは簡単にまた断定的に、どのようであっても、この布施の功德は、出家してメーチになって、森林寺院で禅の修行をすることとは比ぶるべきもなく、メーチこそが、一切有情衆生の福田である、と補足したのである。法話の席で、この話を聞いた達白は、大いに驚いた。この日、アチャン・サオは、この小さな女の子の心の内の奥深い所に、小さな一粒の種を蒔いた訳であるが、この一粒の種が、ムクムクと芽を出して、やがては、天を突く菩提樹になろうとは！

不要懷疑禪修的價值、也不要低估自己的能力。

(禪修行の価値を疑ってはならないし、己の能力を低く見積もってもならない)

在追求真理的道路上、不管修到哪里都满足于当时的成績、

(真理を追求する道において、どこまで修行したかに関わらず、その時々成果に満足する事)

因為這個成績反映了部分的真理、是你可以依凭的。

(この成果は、部分的に真理を反映しており、あなたが拠り所にしてもよいものなのである)



## 生涯の祝福

---

アチャン・サオは卉晒村一帯に、合計三年ほど滞在した。最初は森林の端にいて、その後、もう一つの端に引っ越した。アチャン・サオたちが引っ越しを希望する時、達頌はいつも一緒に彼らと共にいて、新しい引っ越し先を探してやり、その後に、友人たちと一緒に、小さな茅葺小屋を建てて、サンガに布施をした。アチャン・サオが坎差伊県に別れを告げて、北方へ行脚しようとした時、この地域の、宗教的な環境は、完全に変化していた。彼の影響力はかくも広く、大部分の村民は、神霊への崇拝を捨てて、仏教を受け入れた。

達頌は、他の人々と同じように、仏教がこの地で旺盛になった事を喜んだ。アチャン・サオが村を離れる時、彼の心は悲しみで一杯になると同時に、すでに仏法が、普泰族の居住区域において根付いた事を喜び、また安心した。しかし、達頌は思いもしなかったのだが、アチャン・サオが去った後、もう一人の、その当時、最も尊敬される森林仏教の禅師が、間を置かず、続いてやって来たのである。タイの現代仏教史上、アチャン・マンの一生と果の証悟は、崇高無比な地位を有していた。聞くところによると、彼が開示する所の、甚だ深くて微妙な仏法の威力と摂受力は、人以外の有情でさえも、心底悦服した、という。天神、龍、キンナラ鳥と阿修羅はすべて、彼の慈悲の光の中に、まどろんだ。彼の優れて厳格で、刻苦の修行の道は、彼をして頭陀僧とならしめ、その当時において、苦行の道風を切り開いた。彼の弟子は数が多く、皆、彼を模範とした。彼は円満で欠点のない心霊の戦士として、決して妥協することのない戒律によって、これらの弟子を統率した。伝説によると、一目アチャン・マンを見るだけで、一生涯幸せでいられた、という。

達頌がアチャン・サオを送り出した頃、アチャン・マンの伝奇と業績は、ちょうど人に知られつつあり、彼の名声は、人々の噂となって、タイ東北部にも、伝わって来ていた。アチャン・マンは、真正の行脚僧で、その年の安居のために選んだ場所に、安居の期間が終わっても、そのまま居続けるという事は、なかった。雨季が終わると、彼は即刻、弟子たちと共に、東北部の大荒野の中に、何の躊躇もなく、自由気ままに遊行に出かけたが、それはまるで小鳥が、風に乗って軽々と飛び、天高く舞い上がり、興に赴いて木々に止まり、湖や沢に降り立ち、その後には又、翼を広げて、天高く舞い上がるようなもので、縁に従って至る所に、逍遥した。これこそ、頭陀僧の淡泊洒脱なる、振る舞いであった。1917年、雨季がもうすぐやってこようとしている頃、アチャン・マンと、60人の僧侶たちが、北方から、この村の近くの森林山麓に徒歩で到着し、各自各々は、木の下、洞穴、がけ下、墓場などに、行脚傘を広げて屋根とし、そこに住み着いた。

一時の住居と決めたこの場所から、下を見下ろすと、弁晒村が望めた。アチャン・サオが、弁晒村において、処女地を開拓するような布教を進めておいたので、アチャン・マンの到来は、一大センセーショナルを巻き起こした。村人は、サンガに福田を植える機会を得たことに興奮止まず、人々は皆、敬虔な心と感謝の心でもって、この一群の修行僧を、迎え入れた。アチャン・マンと弟子たちは、この新しい場所に来てはなお、頭陀僧の伝統に従って、簡素な禅的修行生活を送った。斎戒の日には、多くの村民が、山麓の、アチャン・マンが足をとどめている場所を訪ねたが、達白の両親もまた、毎回参加した。その時、達白は、アチャン・マンの輝かしい名声の事は知らずにいて、彼女が知っていたのは、ただアチャン・サオとアチャン・マンは、兄弟のように親しい道友であり、菩提道において、お互いに支え合っている間柄である、という事だけであった。

達白は、両親と共に、アチャン・マンを訪ねる事が多くなった。そして、アチャン・マンとアチャン・サオの二人の気質は、明らかに異なることに、気が付いた。彼女は、アチャン・マンと親しくなるや否や、彼が勇猛で、エネルギーに満ち溢れている事を知った。アチャン・サオは静かで優しかった。アチャン・マンは背が低く、また痩せてもいたが、しかし、彼の話す言葉は、アチャン・サオより活力があり、話をしながら、両手を振り上げ、動作は敏速で力があり、声は大きく、朗々としていた。

最初、達白は、アチャン・マンの優しいけれど、威厳のある様子に接して、少々怖いと思った。アチャン・マンが早朝、村に托鉢に来るとき、達白は食べ物を鉢に布施したが、この時、アチャン・マンは度々立ち止まって、彼女に、自分に会いに来るように言った。しかし、達白は恥ずかしさを感じ、またアチャン・マンを、尊敬と同時に畏怖していたので、仏教の催しのある日だけ、両親や村人たちと一緒に行って、彼に親しんだ。アチャン・マンは、彼女に格別親切であった。斎戒日には、彼女が来ているかどうか気にして、彼女とよもやま話をした。アチャン・マンは直観で、彼女が尋常でない修道の素質と、深い敬虔な心を持っている事に気が付き、故に、彼女に、禅の修行をするように勧めた。

彼の指導は、基本的には、アチャン・サオの方法と同じであった：禅の修行として、心にただ” 仏陀” しか浮かばなくなるまで、不断に、” 仏陀” という言葉を唱え続ける、というものであった。アチャン・マンが実践において強調したのは、心を収めて修行する時——心内において、一文字一文字明らかにしながら、不断に ” ブッダ、ブッダ” と黙然しながら、それ自体に専注し、念を留めることを保ち続ける、というものであった；一回毎の ” ブッダ” の生起と消滅に気づき続ける事。彼女は、この方法は非常に簡単だと思ったものの、内気で慎重な性格のせいで、最初は試してみる気になれなかった。アチャン・マンが何度も何度も、彼女に禅の修行をすべきだと言いつけるので、達白は、自分もしかしたら、ある種の素質があるのかも知れないと思い、心の中で考えた：「私はただの田舎の女の子だけれど、何か特別の才能があるのかしら？ そうでないとしたら、なぜ、彼は、私をこれほど、気に掛けてくれるのか？ 彼は深い慈悲でもって、私を教え導いてくれるのだから、今日から私は、彼の言うとおりに、禅の修行を始めよう。」

その時一日中、彼女の心内の奥深い所で、揺るぎがたい願望が生まれた：今日こそ、アチャン・マンの教えを守って、全身全霊で ” 仏陀” に集中する日にしたい、という願望が。夕食を終えた達白は、簡単な片づけをした後、自分の部屋に戻り、誠心誠意、しっかりとした心持で ” 仏陀” と黙然した。落ち着いた気持ちで、15 分ほど一心に念じた所、彼女の意識は、突然、心の内部に落ち込み、安らいで静かな不動の境界の

中に凝った。それはまるで井戸の底に落ちたようであり、身体と心は、安らぎと静けさの中で、消え去ってしまった。これは、彼女がこれまで経験したことのないもので、それは特別なものであったが、彼女は、何が起きたのかを、知ることができなかった。

暫くすると、彼女は深い定から、少しばかり退出したが、その後に、己自身の死体が、己の眼前に横たわっているのが、見えた。それを見て達白は不安になった。彼女ははっきりと、この死体は己自身であることを知った。というのも、このイメージは、余りにも真に迫っており、生々しく、己は死んだのだということに、疑問をはさむ余地はなかった。この時、突然、彼女の頭に一つの考えが浮かんで、平静だった境界を打ち壊した：「私は死んでしまった。それならば、明日の朝、誰が私に代って、出家者に供養をするのだろうか？誰が、私が今夜、座禅の最中に死んでしまったことを、アチャン・マンに知らせるのだろうか？」

しかし、彼女は非常に速くこの考えを打ち消して、心を安定させた。その後、己自身の運命を受け入れて、己自身に静かに宣言した：「もし私が死んだというのなら、それでもいいわ！誰でもいつかは死ぬのだし、誰も死から逃げられないのだから。国王だって、いつかは死ぬのだから。」ここまで考えると、彼女の心は決まり、目の前に横たわっている死体を専注した。目の前のイメージは、依然として鮮明であり、変化することはなかったが、その為、彼女は自分が本当に死んだのだと確信した。

彼女は、己が死んだらどうなるのか、考えてみたが、納得できる答えは、得られなかった。この時、一群の村人たちが、突然、彼女の目の前に現れ、ゆっくりと彼女の身体を持ち上げ、死体を担ぎ上げて、近くの墓地に運んで行った。村人たちは、彼女の身体を、墓場の中の、人気のない場所におくと、次には、アチャン・マンと何人かの出家者が、神妙な面持ちで、死体に近づいた。アチャン・マンは死体の側に立って、暫く死体を見ていたが、僧たちに言った：「この女の子は死んだ。これから私が、葬式を取り仕切る。」

出家者たちは、頭を垂れて、静かに傍観し、アチャン・マンは ” 諸行無常・・・ ” と念誦し始めた。” 身体を構成する各部分が、それぞれ死んだ後、身体そのものは、もう何の役にも立たない。しかし、心が身体と共に、死ぬということはない。それは引き続き、不断に作用する。もし、この心を使って、善行を育成するならば、その利益は無尽蔵である；もしそれを使って悪行をなすならば、それは己自身に害をなす。” アチャン・マンは、上のような言葉を、三度、ゆっくりと、静かに繰り返し、その後に、姿勢を正して静かに立ち、手に持った杖で、死体を三度叩き、一回ごとに、下のように念じた：” 我々の身体は無常である。生まれた限りは、必ず死ぬ；我々の心は永恒であり、

それは生まれる事もなく、死体と共に死ぬということもない。心は、因と縁に牽引されて恒常に移動し、旋回し、変化している。”

アチャン・マンは手に持った杖の先端で、リズムカルに死体を叩き、叩きながら、上のような道理を説いた。軽く叩いている内に、彼女の死体は腐乱し始め、一回叩く毎に、死体は腐乱を続け、先に皮膚が膨張して破裂し、中の筋肉が見えるようになり、次には筋肉も腐り始め、骨と内臓が露出した。達白は、その様子を見ながら放心していたが、その内、死体はただの骨だけになった。アチャン・マンは骨骸の中から心の ” 真髓 ” を取り出して、掌に乗せて言った： ” 心は永遠に滅することはなく、もし、心が滅したならば、あなたは、二度と意識を復活させることができないであろう。 ”

達白は、情景の成り行き全体を見ていて、心内は畏怖と驚きで一杯になったが、この出来事を、どのように理解していいか、分からなかった。アチャン・マンが話し終わると、彼女は困惑した： ” もし、人が死んで、身体には骨しか残らないとしたら、何によって意識が、回復するのか？ ” アチャン・マンは依然として掌の上の ” 心髓 ” を凝視したままで、決して達白の方を見なかったが、彼女の戸惑いには、即刻、応答した： ” 意識は戻ってこなければならぬ！意識を伴って戻ってきた心髓は、ここにある。君の意識が、戻ってこないなどということはありません。明日の明け方、君の意識は回復する。 ” と。

達白は一晩中座禅したが、完全に、己自身の死体のジャーナの中において、黎明が来たとき、心はようやく、サマーディから退出した。彼女は知覚を回復した後、頭を巡らして、ベッドの上の身体を見てみたが、己が死んではいないことが知れて、ホッと一息ついた。彼女は完全に、日常生活のレベルの意識に戻り、生きている事を歡ぶと同時に、昨晚発生したことを振り返り、禅の修行の時に、眠ってしまった上に、一晩中、夢を見ていたと、自分を責めた。アチャン・マンは失望するに違いない、と思った。当日早朝、アチャン・マンは托鉢の為に、達白の家の前を通ったので、達白は食べ物を鉢に入れて布施をした。彼は最初、彼女を不思議そうに眺めていたが、その後に微笑んで、そして、食事が済んだ頃、自分に会いに来るようにと、彼女に伝えた。

達頌は、娘を連れて、よく知っている山道を歩いて、アチャン・マンの住んでいる場所に行った。どうしてアチャン・マンが、彼女に会いたいのか、理解できなかったのも、少しばかり気持ちが重かった。達白は、黙って父親について歩いたが、頭の中は、昨夜の出来事で一杯で、禅の修行の時に眠ってしまった自分が恥ずかしかったし、それをどのようにアチャン・マンに伝えていいのか、困っていた。彼女はどこかに隠れてしまおうと思うのだが、どこに隠れていいのかわからなかった。彼らは二人で、出家者が仮住



まいをしている場所まで来たが、達白は、少し用事を思い出したと言って、水辺に行き、女性たちに交じって、水を汲んだ。

アチャン・マンは、達頰が一人でやってきたのを見て、訝りながら、達白はどうしたのだと聞いた。達頰は、川べりに娘を迎えに行き、アチャン・マンの所へ連れて行った。達白は緊張しながら、坂を上ってきて、アチャン・マンに三拝したが、彼女が息を整える間もなく、アチャン・マンは聞いた：“君、昨夜の禪の修行は、上手くいったのかい？”彼女はしどろもどろになりながら、答えた：“アチャン、全くもってだめでした。私は、念仏を 15 分くらい称えた所で、深い井戸に落ちたようになり、その後は、寝て仕舞いました。一晩中夢を見ていて、朝になって目が覚めました。禪の修行をしっかりと実践しないなんて、自分自身にがっかりしています。あなたは私の事を、怠け者だと言って叱るでしょう。”

ここまで聞くと、アチャン・マンは気持ちよさそうに笑わないが、本人に直接訊ねた。“教えておくれ。君はどんな風に眠ったの？どんな夢を見たの？”

達白が昨夜の出来事を伝えると、アチャン・マンは大笑いして、嬉しそうに言った：“それは寝ていたのじゃない！夢をみていたのじゃない！君が体験していたのは、静かな、調和のとれた境界で、サマーディまたは定とよばれるものだ。この体験、境界をしっかりと覚えておきなさい。君が夢だと思ったものは、実際は、深い定の中に自然に出現した禅相だ。もし、別の日に、この種の境界になったら、リラックスして、それが自由に展開するようにし、心配したり怖がったりしてはいけない。怖がる必要がない事を、覚えておきなさい。しかし、禪の修行中に浮かび上がる、如何なる現象にも、鋭く気づいているべきで、明確に了解していなければならない。私がここにいるかぎり、君が傷ついたりすることはないが、今日から君は、禪の修行の時に見た禅相を、どんなものであろうとも、すべて私に報告しないなければならない。”

修心就像農夫耕田、先把土地清理、

(修心とは、農夫が田を耕すようなもので、先に土地をきれいにし)

接着整地、犁地翻土、育苗插秧、施肥、澆水、除草

(次に整地して、耕し、苗を育て植えて、施肥をして、水を遣り、除草する)

最後、你就有個豐盛的收成。

(最後にあなたは、豊かな収穫を得る)

## 桑畑

---

達白は、10歳を過ぎた頃から、自発的に仕事に取り組むことができた。彼女は生まれつきの努力家で、自分から進んで仕事をみつけてこなし、人に言われて初めて取り組む、ということがなかった。ある年の事、稲の収穫が終わり、それを蔵に収めた後、達白は即刻、桑畑の開墾に着手した。普泰族は養蚕に長じ、蚕が糸を吐いて繭を作ると、糸を引き、それを繕って絹糸にした後、機を織って布にした。蚕は桑の葉を食べるので、養蚕には桑を植えて、葉を茂らせなければならない。養蚕する人は、桑の実が熟した後、葉を摘み取って、竹の寝床に飼っている、蚕に食べさせなければならない。達白は、養蚕が金になるのを知っていた。それは家族に新しい収入源を齎すので、彼女は継母と共に、桑を植えて養蚕する技術を身に付け、己自身で桑畑を開拓する計画を立てた。彼女は、稲田の一番端っこの、少し高くなった場所を開墾したが、そこは土でできた丘で、一部分が森林で、桑の木を植えるのに適していた。

彼女はさっさとそこを整地し、全体を、平らかにした。そこを整頓してみると、背の高い木木が残ったが、それは皆硬木で、日陰を作り、桑の苗が猛烈な太陽光に晒されるのを防ぐことができた。達白は、桑の苗木を植え、それが、湿気の強い熱帯気候の中でも、大きく成長できるほどになるまで、細心の注意を払って、管理した。暫くして達白は、アチャン・マンが村人たちに、安居の場所を探していると、話しているのを聞いた。彼の心の中の理想では、広くて平な高地で、樹木はあまり多くなく、太陽の光が、多少は地面に届き、雨の多い雨季に、湿気が多すぎないように、対処できる場所がよかった。達白は即刻、自分の桑畑の事を想った。

というのも、桑畑は丘の上にあり、稲田よりは上で、排水もよく、稲田から吹いてくる風は、湿気を吹き飛ばすことができ、その地域の温度を下げる事ができた。彼女が桑を植えるために整地した場所は、茅葺小屋を建てるのにちょうどよく、切らずに残しておいた大木は、外部と隔離するのに、役に立った。達白は、父親や兄たちと相談した後、アチャン・マンに、自分の桑畑が気に入るかどうか、視察に行くよう要請した。アチャン・マンは、そこへ向かうと、その環境全体に対して、満足げな様子を見せたので、達白は喜びで破顔し、彼が慈悲によって、己の供養を受け入れて、ここで安居を過ごしてもらおうよう、頼んでみよう、と思った。驚いたことに、彼女がそのことを、まだはっきりと言い出せないでいる間に、アチャン・マンは大声で、この場所は、己が雨季の安居を過ごす為の寺院を建てるのに、理想的な場所である、と宣言した。

それを聞いた達白は少し驚いて、自分の考えを言うのを忘れてしまったが、一切は思い通り整ったように思え、それ以上、何も言うことはなかった。アチャン・マンは、物

言いたげに彼女に向かって微笑み、彼女の心の中では、もうこの桑畑は彼のものになったのだ、と確信した。二人の間には、以心伝心に分かり合えるものがあり、ただ、正式な布施のための手続きが、成されていないだけであった。そうして、達白は跪いて、アチャン・マンに三拝し、彼女の家族全員による供養である、この土地を受け取って貰うよう、請うた。

アチャン・マンは頷いて受け入れ、その後に、彼女の発心を祝福し、彼は彼女に、彼女はこの布施の功德によって、今後、一生困窮することはない、と保証した。アチャン・マンの新しい寺院の近くにぬかるんだ低地があり、それを人々は”農々(=ノンノン)”と呼んだ。故に、寺院の名を、農々寺とした。達頌が先導して、村民は早速、仕事に取り掛かり、小さな木を切り倒し、竹を集めて、茅葺小屋を作り、サンガに寄贈した。

アチャン・マンは12人の出家者だけ、雨季の期間農々寺に住むことを許可し、残りの僧侶たちは、何組かのグループに分けて、坎差伊県の、各地の村落に、留まるようにした。アチャン・マンは、あえて弟子たちを、異なる地域に派遣したが、彼の住まいとは、あまり近すぎず、しかし、それほど遠くもなく、禅の修行で問題が起きた時、すぐに彼に会いに来れる様、配慮した。このようにすれば、全員の利益になった。というのも、大勢の僧侶が同じ場所に住むと、お互いがお互いの、妨げになるからである。農々寺の茅葺小屋は小さかったけれど、大殿は5、60人の僧侶が集まって、集会を開けるものでなければならなかった。というのも、布薩日(=ウポーサタ)に、戒律を詠読するために、これほど多くの僧が、集まってくるが故に。その為、村の経験豊富な年配者が、自ら工事の進捗を監督し、建築物の安全性を確保した。

彼らは先に、硬木を切り倒し、磨いて柱や梁にした。その後に柱を地中に埋め込み、床を敷いた。床は、地面より一メートル程高くした。それは、雨季になって、洪水がやってきた時に、水害の影響を避けるために、であった。農々寺で安居入りの法会が執り行われた時、大殿は、地域の在家信者で一杯になり、大殿に入りきれない人々は、庭に蓆を敷いて座った。達白は、人々と共に座り、高座に座ったアチャン・マンが仏法を開示するのを、一緒に聞いた。アチャン・マンは布施の功德から説き始め、達白は、己の布施によって、舞い踊りたくなるような嬉しさに満ちた因縁を成就した事で、心内に暖かいものが流れるのを、止める事が出来なかった。

アチャン・マンは、朗々とした力のある声で、布施の真正なる意義を説いた：布施の功德は、自我の犠牲的行為である。他人に対して、見返りを期待せずに、無条件に利益するのは、布施を受け取る人に、豊穰を齎す。その種の行為は、人として、布施の中では、よりよい功德をなすものあり、心は、この善行を通して、福德と善良な品格を、蓄

積することができる。心が、布施という善法の欲を、激発する事を通して、心は、善なる種を蒔いたのであり、いずれその同じ心が、善の果報を収穫するのだ、ということ、彼は強調した。布施は、未来の安楽・果報の因の種である。というのも、それは善道に往生する為の、基礎を打ち立てるものであるが故に。

続けて、アチャン・マンは、持戒の功德を開示した。彼は持戒とは、聖人君子の基本的な品行であり、誠実に五戒を受持して初めて、功德を獲得できる、と説いた。それぞれの項目には各自、特定の利益がある：

不殺生戒の果報は、健康と長寿であり；

不偷盜戒の果報は、己の財産が偷盜に会ったり、損失に見舞われない事であり；

不邪淫戒の果報は、夫婦の相互の信頼であり、足るを知り、罪悪感と羞恥心なしに、生活できることである；

不妄語戒の果報は、誠実であるが故に、人々から信頼され、尊重される事である；

不飲酒戒の果報は、己の心が内外の干渉を受けず、理性的で理知的な心を持つ人となり、騙されたり、愚かになったりすることがない。

厳格に浄戒を保つ人は、一種の、知足でありつつ、また、信頼できる人となり醸しているもので、どこに行っても、その地域の衆生に、影響を与えることができ、衆生を安心させることができる。戒行の力は一人の人間を保護し、心のレベルを高めることが出来、また来世において、さらに高い階層に生まれ変わることを保証する。故に、謹厳に持戒する人は、来世においては、必ず天界に、生まれ変わる事ができる。これが持戒の利点である。

アチャン・マンは次に、禅の修行が、我々に最大の果報を齎すことについての、解説をした。この宇宙全体で、心は最も重要な要素となる。人の一生は、色身の健康であろうと、心霊の幸福であろう、すべては、心の美しさにかかっている。人は、心に依存して生活しており、人がその一生涯において、体験する喜びや悲しみは、すべて心が感じ取るものである；人の逝去は、色身から心が離れるが故に亡くなるのであり；人は、己の業によって生まれ変わる——業もまた心が根源となっている。心は一切の根源であるが故に、今・この幸せと、未来における幸せのために、この一粒の心を鍛錬することは、必要不可欠な事柄なのである。

我々は、禅の修行を通して、心を正しく訓練することができ、禅の修行を通して、妄想を克服し、心の安定の基礎を打ち立て、心をして、静かで満ち足りたものにする事ができる。その後の三か月、達白は熱心に、禅の修行をした。彼女のアチャン・マンへの強固な信頼によって、彼の指導の下、修行は飛躍的に進歩した。達白は天性、禅相を見

る事と、神通の境地を誘発することに長けており、その結果、毎晩、非常に多くの、奇妙で神秘的な境界を遍歴することとなった。達白の天賦の才を思い、アチャン・マンは、特別彼女に目をかけた。毎晩、坐禅する時、アチャン・マンは意識の流れを達白に向け、彼女の心識の状態を調べた。故に、彼女の禅の修行に関する体験は、掌に乗せて見ているようで、彼女の修行が出色である時、翌日の朝には、彼女をお寺に呼んで、小参、すなわちインタビューを行った。

毎朝、アチャン・マンが村に入って托鉢する時、達白はいつも、食べ物を布施した。彼女は村人たちと一緒に列を作って、アチャン・マンが自分の目の前まで来るのを待って、食べ物を鉢の中に入れた。托鉢の時、アチャン・マンはめったに人と話をしなかったが、達白の禅の修行が順調だった夜の、その翌朝、食べ物を受け取る時に、彼女に食事の後に、お寺に来るようにと、言った。食後しばらくすると、達白は、家人と一緒にお寺に行き、自分の特殊な体験を、アチャン・マンに報告したが、寺院にいる出家者は皆、彼女が夜毎に、異なる心霊の領域に入り込む、その物語を聞きたい一心で、また、アチャン・マンがどのような指示を出すのかを知りたくて、彼女の周りを取り囲んだ。アチャン・マンはいつも親しげに達白を呼び寄せ、彼女の話す一言一言を、慈悲の心で、聞き入った。彼は、達白が猪突猛進のタイプで、活発な心を持っている事、その為に、非常に容易に、各種の境界を体験することができるのを知っていたが、これは一般の人が、持ち合わせていない能力であった。

この方面において、アチャン・マンは経験が豊富で、その為に毎回、そのものずばり、的確な指導をすることができた。この徳が高く、年長の禅師と、彼の年若い弟子は、瞬く間に、深く厚い師弟関係を築きあげたが、達白はアチャン・マンを尊敬する余りに五体投地し、また、彼が己の為に心血を注いで、指導してくれる幸運に、感謝した。雨安居が終わって間もなくのある日、アチャン・マンは、人を遣わして、達白にお寺に来るように伝えた。アチャン・マンは、彼と弟子たちは、この地域を離れて、頭陀僧の伝統に従って、四方八方行脚しては、雲水の遊行をするのだと言った。次に彼は眉を上げて、彼女を見ながら、唇に浅い微笑を浮かべながら、男友達がいるのかどうか、聞いた。達白は、首を振って、いないと答えた。彼はゆっくりと頷くと、もし君がそう願うのなら、出家してメーチになり、私と一緒に行動することができるが、最も重要なのは、父親の同意を得る事だ、と言った。

彼女は彼を見ながら、何を言っているかわからず、黙っていたが、彼は静かに、彼女の答えを待った。達白は、どのように答えればよいのか、己の気持ちと考えを整理して、彼について出家したいけれども、彼女の父親が絶対に許さないだろう、と言った。アチャン・マンは彼女を安心させるように、笑顔で頷ずいて見せ、彼女を家まで送って行っ

た。達頌は、彼女の願いには冷ややかで、彼女の出家を許さなかった。というのも、彼女が万一、後になって還俗を希望したなら、嫁ぎ先は決して、見つからないだろうと思うが故に。彼は、彼女に、平凡な家庭生活を送って欲しかったし、家事の合間に、縁に従って、修行すればよいと思った。

アチャン・マンはそれを聞くと、会心の笑みを浮かべ、達白に、忍耐して待ち続ければ、何時の日にか、必ず願いがかなう、と励ました。そして、現在のこの段階においては、彼女は必ず彼との別れの時の約束を厳格に守るようにと、求めた。それはすなわち、彼がここを離れて後、決して禅の修行をしないこと！彼女は分に安じて、世俗の生活を送り、因と縁が熟した暁に、二度目の禅の修行を再開する事。彼は、将来一人の高明な禅師が現れて、彼女が正道を歩めるよう、指導してくれるであろう事を保証する、と言った。ただ、眼前の状況で言えば、彼女は忍耐力をもって、この期間を過ごさなければならなかった。

アチャン・マンは、達白が猪突猛進するタイプで進歩も速いが、しかし、未だ十分な力がなく、禅の修行で問題が起こった時に、己自身を守るすべを知らない事を心配した。彼がここを離れた後、万一、禅の修行で偏差、副作用が出た時、それを処理してくれる人がいない。彼女には、彼女が正道を離れた時に、状況を掌握して糺してくれる、一人の高明な禅師が、必要であった。そうでなければ、彼女は容易に間違った道に迷い込み、己自身を傷つけてしまう。

このような事から、アチャン・マンは、彼がこの地を離れた後、達白に、禅の修行を禁じたのである。達白は、アチャン・マンが、これ程厳しく、彼女が禅の修行を続けることを禁止する理由が分からなかったので、己の好きなことを止めなければならないことが悲しかったが、アチャン・マンへの堅固な信心の故に、彼女は突如として、修行を中止した。

この後、彼女が再び座禅に取り組むまでに、20年の歳月を必要としたのである。

你的身、你的心、你的生命——

(あなたの身体、あなたの心、あなたの命——)

這些都不属于你的、

(これらは皆、あなたのものではなく、)

所以不能依靠它們帶給你

(故に、それらによって、あなたに)

真正的快樂。

(真の楽しさを、齎すことはできない)

## 農家暇なし

---

アチャン・マンが去った後、達白は口数が、少なくなった。彼女は禅の修行を止めて、彼女の生命の躍動が、その中に陶醉した所の、喜悦と興奮を静め、消し去ろうとした。達白は生まれつき恥ずかしがり、人との付き合いが好きではなかったので、このような状況の下で、彼女は仕事に没頭し、時間を仕事で一杯にした。達白は、いつも手元になにがしかの仕事を持っていて、ひと時も立ち止まることがなかった。彼女は、綿花や藍を植え、養蚕に必要な、桑も植えた。

彼女は手織りをし、糸を紡ぎ、白いフワフワした綿花を紗に縊って、その後で、布に織った。彼女は機織り機の前に、何時間も座って、蚕糸と綿紗を布に織り、その後、ゆったりとしたスカートや、ブラウスを縫い、美しい図案に基づいて、藍染をした。その染料は、彼女が育てた藍から作った。また、彼女は、田舎の人が着る野良着を断ち、縫ったりした。達白は、知恵があり手が器用であり、手芸に関して、非常に天分があった。普段は、竹ひごや籐ひもで、凝った技巧の、軽くて使い勝手の良い籠などを編み、綿花の枕やクッションを作り、冬に着るセーターを編み、古い洋服をつくろったりした。また彼女は、一日中、涼しい森の中において、山菜を採ることもあれば、味と色と形状から判断して、食べられる瓜や果物、蕨やキノコを採った。

夕方、家に帰ると、彼女は籠一杯の収穫物を分類して処理し、きれいに洗って切り刻み、魚や肉と一緒に煮炊きして、美味しくて栄養のある一品にした。達白の多才多芸は、村で頭角を現すことになった。普泰族の社会では、伝統的な手芸に優れている年若い女子は、よい嫁になれるとばかりに、称賛された。忍耐強い事、落ち着いて着実である事、家庭と伝統に忠実であるという性格、親に孝行し、敬老の精神を持つ彼女は、他家の女子よりもなお、出色の存在であった。暫くすると、仲人が、婚姻の話を持って来た。その中の一人は、近くに住んでいて、達白より一歳下の布麻であった。彼は勇気を振り絞って、彼女の家の家長に、婚姻を打診した。

この時、達白は、いまだアチャン・マンの指導の中に沈潜しており、恋愛する気持ちがなく、結婚したいと、考えたこともなかった。しかし、彼女の両親は、布麻の申し込みを受け入れた。達白は、彼らの希望に逆らうことは考えられず、この結婚話を受け入れざるを得なかった。どうやら、達白は、浮世のごたごたから、抜け出すことはできないようであった——今のところは。

達白と布麻は、普泰族の伝統に従って、雨季に入ったばかりの頃に結婚した。その時、達白は 17 歳であった。風習に従って、結婚後は、達白が夫の家に引っ越して、一緒に

住むことになったが、そこは、彼女の家とあまり離れていない、大家族の一家であった。彼らは、一軒の、非常に大きな、茅葺の屋根を持った、高床式の木造家屋に住んでいた。ここに来て、達白は家族の中の、最も若い構成員となり、当然の如くに、日常生活の労働の主力とみなされ、屈強で堅忍不拔な性格から、彼女は各種の重責を、担うことになった。布麻の性格は、完全に彼女とは異なった。

布麻は呑気でだらしなく、遊び好きで、人が仕事をしている所へ来ては、ちょっかいを出した。彼は、田植えや稲刈りに近所の女の子を雇ったが、彼の妻が、傍で仕事をしていても、彼女たちといちゃいちゃふざけ遊び、こそこそと達白についての論評をした。もしかしたら、彼は妻にやきもちを焼かせたかったのかも知れないが、達白は見ないふりをして、無関心を装い、道理に合わない愚かな言動に対して、無言を貫いた。

達白は、いつ終わるとも知れない雑事の中にいた——油や塩や薪や米、三度の食事、雨の日の仕事、風の日仕事、年若い女性が永遠に終わらせることのできない、あれやこれらの雑事の中に。彼女は明け方、黎明の前には起き上がり、薄暗い蠟燭の光の下で、色々な仕事をすばやくこなした。まずは炭をカマドに入れて火を起し、火だねが大きくなった所で、水に漬けて置いたもち米・・・彼女たち夫婦とその他の家人のための、三度の食事に必要な分量を竹かごに入れて、一度にそれを蒸してしまう。

その他には、家の裏か、高床式の建物の下で飼っている家畜に、水と餌をやった。水は、このあたりでは、長い間の難問で、村民は、皆で一つの井戸を使っていたが、その井戸はそれほど遠くないところにあった。村民は、井戸から水を汲んで二つの桶に入れ、それを肩に担いで家に戻った。このようにして、彼らは、家中の貯水用の大甕がいっぱいになるまで、何度も水を運んだ。水汲みは重労働であったが、しかし、怠けるわけにはいかなかった・・・というのも、どの家も、飲み水や食器、衣類の洗濯、熱い気候の中でシャワーを浴びて清潔を保つ等、どうしても水が必要で、どの家も、水汲みを怠る訳にはいかないのであった。

田舎の生活に、田植えは欠かせない。田植えは、一年に一度の雨季を、待ち望む。雨季の到来は、よい前兆であり、皆に慶祝され、歓迎された。しかし、雨季はまた、更に多くの仕事が増えることを意味していて、更に多くの辛苦、きつい労働が増えるのであった。

五月初めの最初の大雨は、休耕していた土地を湿らせ、村民たちは、二頭の強壯の水牛に、重たい、木製の犁を嵌めて、水田の中を行ったり来たりして、土地を耕した。耕した土地は、足で踏み均し、泥田に変えた。乾季の時、村民は、川の水を田の中に引いて、苗を育てた。細心の注意を払って苗を育て、田植えができるまで大きくした。



雨季が来て、田圃を、稲苗が植えられるように手入れをすると、一群の婦女が、一列に並んで、泥田の中で腰を屈めて、一步一步後退しながら、まるでラインダンスを踊っているかのように、泥臭いにおいのする泥田に、苗を植えて行った。雨季がやってくると、村の景色は、まったく別のものになった。空には一陣また一陣と、雨雲が立ち込め、田圃は緑が濃くなり、周囲の丘や山には、竹がさわさわと揺れ、緑色濃い鬱蒼とした大地は、そば降る雨の中に、時折、姿を現し、時折、姿を隠して、見えなくなった。水を張った水田は、それぞれ高さの異なる、青い苗を、空に向かって、抱いていた。早朝、村は、静寂の中で、熱気と湿気に満たされ、夕暮れ、田圃の側で蛙がクワクワと鳴き、時折、池の側で、雁が鳴いた。

毎回、雨季が来るたびに、達白は戦々恐々とした。彼女は、八月には、西南の季節風が弱まるために、雨量が足りなくなることを心配し、九月には、暴虐の台風が、この地に洪水を齎し、降り続く雨が、この地を蹂躪して、黄土の泥道が雨水に押し流され、水牛が歩き回り、牛車が行き交うことによって、轍が出来て、人も家畜も、一步も進めなくなることを、心配した。雨季の季節全体において、時に、雨は盆をひっくり返したかのように降り、時に、篠付くように降った。

稲は、これらの雨や風に打たれて、茎高く、緑濃く、立派に育った。稲は、10月に花を咲かせるが、この時、水田は一面の黄金色の稲穂の海となり、秋風の下で、ゆっくりと揺れた。収穫の時が来ると、達白の家人は全員、水田に集まって、稲刈りをし、鎌で刈り取った稲穂は、畔の間の空き地に、積み上げた。この作業は、何週間も続き、皆は灼熱の太陽の下で、腰を曲げて作業をし、手が動けば鎌も動き、一列また一列と、収穫にいそしんだ。その後には、しっかり結実した稲の穂を、地面に並べて、太陽の光の下で、干した。

今、達白は、新しい家庭の農業の担い手となり、労苦を厭わず愚痴も言わず、家内の仕事と、田畑の管理をした。何週間もの時間をかけ、雑草を取り、畔を踏み固めた。収穫の後、彼女と布麻は、田圃の端で徹夜した——今年初めての収穫——来年の食糧——稲穂はしっかりと完全に乾燥して初めて、脱穀することができる。脱穀と篩は、みな女性の仕事で、この事は、達白と他の女性たちは、昼間の仕事を終えた後に、冷え込む夜にもまた、外で稲穂の番をしなければならない事を物語っていた。脱穀は、稲穂を高く持ち上げて、その後地面に打ち付けるというもので、そのことによって、穂についての米粒を、脱穀した。

達白と他の女性たちは、すべての稲穂が打たれて、地面に米粒が山のように積まれるまで、長時間、上を向いては腰を伸ばし、その後、下に向かって稲穂を打ちおろす作

業をした。それが済むと、篩にかける作業が続く。篩は竹で編んだ、穴の開いた円形の大きなお盆のようなもので、篩の上に米粒を一杯載せて、それをふるって、米粒を空中に舞いあがらせ、その時、風が糠を吹き飛ばす、という仕組みであった。その後には、十分に乾燥し、脱穀して、糠を取り去った新米を袋に入れ、隊列を組んだ牛車に乗せて、村に運び込み、銘々の家の、米蔵に積み上げた。

我的根門不停受到轟炸：

（私の根門は、絶えず爆撃を受ける）

眼対到色；耳対到声；

（目は物に、耳は音に）

鼻対到香；舌対到味；

（鼻は香に、舌は味に、

身対到触。

（身体は触に対する）

我觀察所有的這些東西、

（私は、これらのすべてを観察し）

如此以来、每一根門都成了我的老師。

（その時よりこの方、根門が、私の教師となった）

## ちびっこケーウ

---

達白は、この忙しいばかりの世間を、倦み厭ったが、彼女はそれに、黙々と耐えた。唯一、彼女が慰撫されたのは、寺院であり、宗教儀式であり、修行であった。彼女の生活は、布麻によって、厳格な制限を受けて、孤独であった。彼にとっては、女性は家人と共に家にいるべきで、外出することはならず、修行などということは猶更、もっての外であった。古の信仰は、普泰族の文化と社会に、二つの階層を齎した：貴賤と男女の別であった。ここ、すなわち、達白の生活する社会において、彼女は小さい頃から、何事も逆らわずに、受け流すことに慣れていた。

布麻は、彼女にほとんど自由を与えなかったが、それは夫たるものの特権であり、女性が夫に嫁ぐときの、暗黙の了解事項であった。彼は、彼女に、寺院の齋戒日の活動に、参加させなかったし、早朝に、托鉢僧に供養する事と、夜に読経する以外、他の仏教の活動は一律、禁止した。彼女にとって、夫に黙って従うより他に、選択の余地はなかった。

達白は、家事と農作業自体を、修行だと思いなし、そのように、結婚生活を過ごした。長い労働時間が、彼女を疲労困憊させたが、しかし、彼女は苦しみを、専注、すなわち、精神の統一に昇華するよう、努力した。彼女は己自身に、混沌として、不透明な生活の中で、精神を統一し、己の心を統制し、憤怒と怨恨の中で、専注を保持しようとした。彼女は、毎回夫を恨むたびに、この感情を、慈心と憐憫の心に、転化した。彼女は毎回、己が他人を嫉妬していると感じた時、出離の生活を想い、アチャン・マンが彼女にした約束を思い出すようにした：いつかある日、彼女は白い三衣を着て、出家する。達白は、直観によって、修行に沈潜する意義を知っていたが、彼女が今できる事はといえば、仏法を日常生活の中に、生かすことだけであった。

責任感から、彼女はすべての雑務を引き受けた。彼女は長い間、不満を意識し、生活の圧力を感じた：結婚の枷は、彼女をしっかりとからめ捕り、彼女が見るもの、聞くこと、感じることに、皆、苦いものでないものは、なかった。17歳で結婚したが、あつという間に、彼女は27歳になった。毎年、同じような憂鬱がやってきて、同じように、苦悩を受け入れた。今では、彼女はどのような人に出会っても、どのような事件に遭遇しても、これを柳に風と受け流し、よく観察して自省し、身の些末な出来事を、心の糧とするようにと、志した。

達白の心は、剃髪して尼僧になり、淡泊な出家生活を送る事を模索するようになり、時間がたつにつれて、彼女の気持ちは、少しずつではあるが、益々強くなり、出家する以外に、何の希望も持たなかった。

ある日の夜、彼女は布麻の側に来て跪き、自分のこれまでの思い、また、世俗の責任を放棄して、出家したいという、発心に関する希望を述べた。布麻は、なんら妥協の余地なく、絶対に反対だと言い、同時に、このことは、二度と口にしないように、と言った。

達白は、俯いて、彼の決定に従った。生活は、これまで通りに、続けられた。

日は一日一日と過ぎ、生活は相変わらずではあったが、彼女は希望を抱いて、忍耐強くチャンスを待った。何週間のある日、彼女は布麻が機嫌がよいのに気が付いた。彼女は、自分を自由にしてほしいと、再度、頼んでみた。布麻は再び拒否したが、その理由は、彼女が出家したならば、彼が、夫としての責任を果たせないために、妻が妊娠しないのだという噂話を、皆はコソコソするだろうから、というものであった。

この事に関して、達白はどのように言っているのか、分からなかった。このことは、とりもなおさず事実であり、彼らは結婚して10年になるのに、子供が生まれなかった。両方の親戚の家族は、それぞれ子供が列をなしているのに、ただ彼らだけが、子宝に恵

まれなかった。本来、これは幸運な業報であった：というのも、そういうことであれば、彼女は出家しやすくなるからである。しかし、それもまた今となつては、家を出られない足かせになってしまった。彼女は布麻に道理を説いて、理解を得ようとしたが、彼はどうしても、ウンとは言わなかった。普泰の家庭は、通常、非常に大きく、赤子の誕生は、歓迎された。というのも、家に新しい成員が増えるという事は、利益を生み出す力が増えたということである。

子供は成長すれば、家事や農作業を分担できるし、養老、介護もできる。達白が結婚して、10年も経つのに、いまだ子供に恵まれないので、年配者や従兄弟たちが、彼女に代って心配した：彼女が老いた時、誰が面倒を見る？その故、その中の、すでに子だくさんの従姉が懐妊した時、達白と相談して、達白の子供として、養子に出すということになった。出産の時、達白は産婆の役を果たした。生まれた子は、女の子であった。

達白は可愛くてしかたないように、この子を抱いて帰り、名前を ”ケーウ”、私の ”愛すべき小さな子供”、とつけた。人々は、達白に養女が来てから、明るくなり、細心の注意を払って子育てし、母性の喜びにあふれるのを見て、皆は彼女の事を ”メー・ケーウ” と呼んだ。その意味は、”ケーウのママ” である。この呼び名はごく自然に広まり、その後、彼女は親しみを込めて、皆に、メー・ケーウと呼ばれるようになった。ちびっこケーウは、聡明で活発な女の子に成長し、母親が仕事の時、熱心について回った。彼女の動作は、母親と同じようにてきぱきとしていて、いかにも、敏捷な様を見せた。メー・ケーウは、母親が逝去したために、仕方なく小さな頃から、色々な手工芸や技術を身に着けたのだが、彼女は娘にも、彼女と同じように、子供の時から自主的で、責任感のある心意気を発揮して欲しいと思った。

子供を育てる事は楽しいし、興味が尽きない。メー・ケーウは、ストレスの多い生活の中で、いくらか気持ちを分散させて、一息つくことで、とりあえず、悶々とした気分を、緩めることができた。彼女の心内では、己の修行に対する憧れを、誰かに聞いて貰いたかったが、しかし、ちびっこケーウは幼な過ぎたし、天真爛漫で、世間の苦難など知る由もなかった。メー・ケーウは、長い間、己自身に、世間の苦難が影のように付いて回り、また、周囲にいる人々の苦しみを見て、心が痛んだが、その痛みは日増しに大きくなった。平凡な村民たちは、毎日、仕事の為にもがき苦しみ、青年の頃から年老いるまで、また死ぬまで一生涯、働きづめに働くのを見て、彼女は生命の残酷さを想った。生まれる事は死ぬ事であるという悲劇には、洪水に蹂躪された後に、干ばつに襲われるような、残酷さがあった。

メー・ケーウが、ちびっこケーウを養女にしたその年、達頰が亡くなった。歓びの後に、続いて来るのは、悲しみであった。この年は、長く雨が降らず、田畑の収穫が出来なかった。楽しみと苦痛は、手を繋いで顔を出す、それはまるで、牛車の二つの車輪のようで、左右同時に回転しながら、人を死に追い立て、新しい生命を生み出し、その後にもまた、車輪はねん転して、止まない。メー・ケーウは、生命全体を支える主軸は、苦難でできており、一切は無常に変遷しており、誰も苦しみから逃れられないのだ、と思った。これほど多くの暴風に吹かれ、暴雨に打たれたメー・ケーウはしかし、その喜怒哀楽の中においても、初心を忘れることはなかった。

彼女は、どのような転変を体験しても、心の底では、出家が彼女の最終目標であり、そのことに関して、かつて一度も迷ったことはなく、それは彼女にとって、決して揺るがない、信念であった。彼女は時々、己が農々寺で出家した様子を想像した——剃髪し、白い三衣を着て、素朴で、単純で、かつ安らいで静かな環境の中において、誰の干渉も受けない——静かな出離の生活の中で、修行を再開する自分を。

種々の悲哀と苦楽が、彼女を不安にし、これらの感情は、彼女の心を曇らせ、彼女は、己を見失ったり、初心を忘れてきた。そのようではあっても、彼女は世俗の生活において、長年、己自身を練磨し、己の信念を忘れないようにすると同時に、己の心内の動きを、明確に覚知し、それらが平静を保つよう、調伏した。しかしながら、年を取るにつれて、負うべき責任は増々重く、心内の平静は、徐々に、挫折——希望がかなわない為の焦り——にとって代わられた。毎回、この種の問題に当面する時、アチャン・マンがここを去る時に保証した所の、必ず出家して尼僧になる日が来る、という希望が、唯一、彼女の心が波立つときの、慰めとなった。今、養わねばならない娘が一人増えて、彼女の希望は、益々遠のいたように思えた。

状況はかくの如くではあったが、命終わるまで尼僧の姿でいられる、正式の出家ができないのであれば、短期出家を試してみることはできるかもしれない。田舎の年若い青年たちは皆、その年の雨季に短期に出家して、その後には還俗し、再び在家の生活を送る。それは一種の、成人式のようなものであった。結婚した男性でも、短期出家をすることがあるのだから、彼女にできない事が有ろうか？当然、彼女には娘がいたから、よくよく、考えてみなければならなかった。この時、ちびっこケーウは 8 歳になっていて、家事もできるようになっていた。彼女はすでに、父親の面倒を、三か月程なら見ることはできたし、なんなら、従姉妹たちに手伝ってもらうこともできた。事を順調に進めるためには、彼女は先に、重労働を要する仕事をすべて、片付けておく必要があった：田を耕す事、田植え、それから、還俗後の稲刈り。布麻は、彼女が修行に行くことを明確

に拒否したが、しかし、もし細心の注意を払って計画したならば、彼も妥協するかも知れない。

短い時間の自由であっても、全く自由がないよりは、良い；すこしばかりの修行であっても、全く修行しないよりは良い。こうして、ちょうど 10 年前と同じように、メー・ケーウは、布麻の側に来て跪き、自分は小さな自由が欲しい、生きている間に、少しばかり自分のしたいことに取り組んでみたいのだ、と正直に話した。当然、彼女も家庭が大事であることは承知していたが、ただ、少しばかりの時間、己一生の夢を叶えてみたいのだ、とも伝えた。その後、彼女は己の計画を述べて、自分がいなくても家庭生活はいままで通り進むし、三か月出家した後には、必ず戻ってくると、受けがった。彼は無表情で前を見ていたが、静かに彼女の言い分を聞いて、その後彼女の方を見て、頭を左右に振りながら、軽蔑したように手を振って、出家のことは忘れろ、と言った。

彼女には、面倒をみるべき夫がいて、養わねばならない娘がいる——これこそ彼女のしなければならない仕事であり、彼女の夢などに聞か貸すことはない、彼は、思った。こうして、メー・ケーウは、命の困惑の中に逆戻りして、次のチャンスを待つより他なかった。忍耐は美德であり、憐憫と寛恕もまた美德である。彼女は、布麻本人を恨まないようにしたし、また、彼が設けた色々な制限をも、恨まないようにした。彼女はちびっこケーウを愛していたし、布麻の決定も尊重した。しかし、彼女は夢を、放棄はしなかった。メー・ケーウから言わせれば、苦しみの中で、希望が彼女の支えであった二年後、雨安居が近くなった時、彼女はもう一度、夫の元へ行き、彼に譲歩してもらえないか、と頼んでみた。

布麻の態度は軟らかいものに変化し、語気は鋭いものではなかったが、しかし、以前と同じく、情状の変化はまったくみられず、彼女の心は、砕け散った。メー・ケーウの義両親と実家は、共に彼女の窮境を知っていて、色々取沙汰したが、彼女に賛成する人も、反対する人もいた。この時、ある人が、家族の中の長老に出て来てもらい、調整するというのを思いついた。この長老は、経験が豊富で、普段の仕事、何事にも正義感で対応し、非常に尊敬されていた。彼は、メー・ケーウを小さい頃から知っており、メー・ケーウが父親に連れられて、アチャン・マンに会っていた頃の、詳しい事情も知っていて、彼女の発心に心を動かされた。達頌の面子を慮って、彼はこの事に、口を出す事に決めた。彼はこっそり布麻に会いに行き、布麻に、修行の功德を説いて聞かせ、物事は天理に背いてはならず、情理に合わねばならず、布麻が一時、妥協をするべきだと、布麻を婉曲に諭した。

その甲斐あって、相談が纏まった：布麻は、妻が雨季の三か月出家することを承諾し、しかしその間、家事と娘の面倒は自分で見るが、一日でも多く、お寺にいることは許さない、と言った。老人の説得の下に、布麻は、メー・ケーウがお寺に行っている三か月の間、彼も不殺生、不偷盗、不妄語、不邪淫と不飲酒の五戒を守ると、誓いさえた。これは仏教の基本的な修行であるが、布麻はこれまで一度もそれを守ろうなどと考えた事はなかった。事が急転直下に展開したので、メー・ケーウは驚愕しながら、戸惑い、喜んで、両手を高く額の前に掲げ合掌し、善きかな、善きかな、と連呼した。アチャン・マンの 20 年前の予言は、今、実現した！

彼女は心を静めると、一つの誓いを立てた：出家の期間、彼女は勇猛に精進し、決して怠けない。彼女が最初にしたかったのは、禅の修行で、これは、彼女のし残した志であり、彼女によって完成されるのを待たれていたものである。これまで何度も何度も、夢は打ち砕かれたが、今回、彼女は決して、己自身を失望させまい、と誓った。

## 第二章 出家——メーチの生きざま

---

基本訓練就像用 有 Y 叉的樹枝 掌着香蕉樹、

(基本的訓練とは、ちょうど Y 字の木の枝を使って、バナナの木を支え)

讓沈重的果串發育長大、

(重い果実を大きく育てて)

避免香蕉還未熟就掉在地上。

(バナナが未熟な内に地面に落ちないようにするのと同じである)

## 万縁の放棄

---

メー・ケーウの出家の日は、仏歴阿沙陀月（太陽暦 7 月）の満月の日と決まった。この日、万里晴れ渡り、メー・ケーウは農々寺の僧や尼僧たちの前に座り、全くの後悔なく、これまでの半生における一切を、手放した。過去の己を捨て、古の、莊嚴で簡素な儀式に参加し、正式に落飾して尼僧となり、メーチになることを誓った。この年、メー・ケーウは 36 歳であった。メー・ケーウは、朝早くから寺院に行き、剃髪の手配をした。彼女は心臓がドキドキしたが、それでも微笑んで常住の尼僧に挨拶し、その後、

傍らに座って、一緒に、簡単な朝食をとった。食事が済むと、彼女が長年追い求めてきた、一切を捨てて、梵行の生活を送るという夢が、実現する。

彼女は古い身分の象徴を脱ぎ捨て、その後しばらくして、蝶が舞い乱れる井戸の脇にしゃがんで、不安げにメーチ・タンに、己の頭を差し出した。この上席のメーチは、手に古い鋏を持って、彼女の頭の上でチョキチョキと動かして、烏の濡れ羽色をした長い髪を、バサバサと切り取った。彼女の頭はあっという間に、あられもない、虎刈りになった。メー・ケーウは静かに、地面に落ちた髪の毛を見、色身の虚妄の本質を思った：髪の毛は私ではない。それは私に所有されない。身体のその他の部分と同じように、頭髮は自然の一部分であり、物質世界の一部分であり、頭髮は世間に属し、自分に属さない。それらは、” 我是誰（私は誰か？） ” という問いとは、関係がない。

次に、メーチ・タンは、いつも使っている、鋭い刃を持つ、丸い柄のカミソリを持って、虎刈りの頭を剃って、ツルツルの坊主頭にした。メー・ケーウは頭をなでながら、会心の笑みを浮かべ、一筋の糸ほどにも、何の未練も感じなかった。他のメーチたちは、彼女の周りを囲んで、タイのメーチの伝統的な白い制服を着せた：腰から下、足首までを覆うスカート；ボタンのついた、袖の広い、ゆったりとしたブラウス；一枚の長い布、これは左の肩にかけて、右の脇下を通し、右肩を露出させて着用するもので、仏教では、このような着衣でもって、尊敬を著した。メー・ケーウは、出家の儀式を執り行う長老アチャン・カンパンに三度礼拝し、両手で合掌して蠟燭、線香と蓮の花を持ち・・・彼女はこうして、仏陀に帰依し、法——仏陀の至高で無上なる教えに帰依し；僧——四双八輩、男女和合の衆に、帰依した。

次に、彼女は一心に浄戒を保ち守ることを誓い、大衆の目の間で正式に、メーチの基本的戒律：

生命を害さない；

偷盗をしない；

淫しない；

妄語しない；

飲酒しない；

午後食事をしない；

歌舞音曲に親しまない；

化粧しない、飾らない；

高くて立派なベッドに寝ない

という戒文を念誦した。



メー・ケーウが、戒の項目を念誦し終わると、アチャン・カンパンは、彼女の方を見ながら、戒の各項目について、これから詳しく説明する、と言った。（中略—最終章にて翻訳し、付録とする）

アチャン・カンパンは、戒について、一つ一つ、具体的に説明をして、メー・ケーウを励ました後、彼女が正式のメーチになる為の、儀式を執り行った。ここにおいて、メー・ケーウは、メーチ・ケーウとなって、一生涯の夢を、叶えたのであった。

我熬過許々多々の苦難來考驗自己的願力、  
（私は多くの苦難に耐えて、己の願力を試した）  
試過好多天粒米未進、  
（何日も断食し）  
好幾個晚上不躺下來睡覺。  
（幾晩も横にならず、眠らなかった）  
忍耐是滋潤我心靈的糧食、  
（忍耐は私の心霊を潤す食糧であり）  
精進是讓我躺下休息的枕頭。  
（精進は私が休む枕であった）



## 再びの宝

---

メーチ・ケーウは、俗世間から歩み出て、世間と隔絶した修道の天地へと、向かった。彼女の夢はついに実現したが、しかし、彼女の奮闘は、いま始まったばかり！

尼僧たちは、自分自身の住居を持っていた。そこは、男性たちの住居とは、乱雑な背の高い竹藪で、隔離されていた。メーチ・ケーウは、小さな茅葺小屋に案内されて、そこを住居とした。それは最近建ったばかりで、竹でできた床も壁も、みな薄緑色で、すべすべしていた。屋根の萱も、厚い層をなして、見事なものであった。メーチ・タンは、ここでは最も深い教養のある尼僧で、メーチ・ケーウがこの寺院を布施した、その6年

後にここで、出家した。彼女とメーチ・ケーウは、父の代からの友達で、道心堅固な出家者であり、メーチ・ケーウから深く敬慕、尊敬された。

彼女は、学ぶ為にやって来る、年若い尼僧のために模範を示し、彼女たちを励ました。彼女は、彼女より少し後に出家したメーチ・インと共に、農々寺の女性たちを統括し、この小さな団体が、本分を守りながら、仲よく共に暮らせるように、心を砕いた。新しい生活が、始まった。メーチ・ケーウは初日からすぐに、寺院の静かで安らかな生活のリズムに溶け入り、毎朝、日の明けない内から、起き出した。

彼女は、早朝三時には起床し、顔を洗い、冷たい水で、眠気を覚ました。その後に蠟燭をつけて、茅葺小屋の側の、歩く瞑想のための小道に行き、修行した。歩く瞑想は、一步ごとに ” ブッダ、ブッダ・・・ ” と黙然するもので、心が完全に目覚めてから後、坐禅した。彼女は不動の姿勢で、平静に一心に専注して座り、太陽が出て、朝が明けてから、急いで大殿に行き、他の出家者と共に、朝の勤行、読経をした。

軽やかで柔らかい読経の声が止むと、出家者たちは、何分か静かに思惟し、その後に、朝の勤めを終えた。メーチたちは、屋外の厨房で煮炊きをし、いくつかの簡単なおかずを作り、僧たちが托鉢から戻ってくると、いくらか食べ物を補充してあげた。メーチ・ケーウは、他の尼僧たちと一緒に、台所仕事を手伝うのが好きで、その後、皆で一緒に食事をした。男性たちと同じように、メーチたちも、一日一食であった。このような飲食の習慣は、禅の修行に都合がよかった。

食事の回数を減らし、食べる量を減らすことは、禅の修行に有益であった；食べ過ぎると、心は遅鈍になりやすいし、食べることに食欲で、いつも食べ物のことばかり考えるのは、道心を侵食する、毒素となった。台所仕事が片付くと、その日はもう二度と食べ物のことで思い患う事はなく、禅の修行に専心でき、心身が軽くなった。メーチたちは協力し合って、寺院全体を管理し、たとえば、煮炊きとか、清掃とかの寺務を、支えた。毎日の午後、彼女たちは住居から出て来て、摂心し、念を住め保持しながら、よく撓る長い柄の、竹でできた箒を使って、茅葺小屋の周り、それらを繋ぐ小道を、掃除した。

その後に、台所を掃除し、鍋や皿などを片付け、翌朝の食事のために、少しばかりの生米を鍋に放り込んで、水に漬けた。それらが済むと、静かに井戸辺に行き、洗濯をし、沐浴をした。夕方、皆で一緒に徒歩で大殿に行き、男性陣に混じって、夜の勤行をした。読経の後、外は暗闇に包まれるため、彼女たちは長い蠟燭に火をつけて、各々の住まいに戻り、深夜まで、禅の修行に勤しんだ。

メーチ・ケーウは、一人で茅葺小屋で励んだが、彼女は、歩く瞑想と座禅を交互に実践し、昔、熟知した所の、非常に深い定の境地を、思い出そうとした。20年前、アチャン・マンが村を離れてこのかた、彼女はずっと、人々と家族の為の仕事に、心を勞し、長い間、禪の修行をしていなかった。そのようなことから、彼女は、精進の価値を、痛感した。そして彼女は、禪の修行に集中し、心を稲田とみなして、田畑を一筋また一筋と梨で耕すように、仏陀、仏陀と、一句また一句と念ずる度に、冷静にかつ明晰に、己が心を耕した。

忍耐力と根気は、彼女の長所で、彼女が頼りにしてよい性質であった。彼女は、世俗の種々の事柄を、忘れようと決意し、純粹なく今・ここ>に専注しようとした時、彼女の神業のような、迅速な進歩は、多くの初心者を驚かせた。静寂に満ちた真夜中、メーチ・ケーウは端正に座り、瞑想した。ある一瞬において、彼女の心身は、地面を抜けて下に落ちて行く。それは崖から落ちるようでもあり、井戸の底に向かって、落ちて行くようでもあった。一切は消えてなくなり、完全なる<静止>があった。この時、彼女の心は、ただ、心自身のみを覚知し、その他のものを覚知する事はなかった——その覚知は、心内の深い所から湧き出る様に、活力が充満し、心身における能知（=知る能力）を超越した。

この体験は非常に短い時間内に起こり、全く完璧に安らいで静かなひと時であった。彼女はこの境界から退出すると、心は非常に鋭く、澄み渡り、明晰になった。メーチ・ケーウは、一度は失った宝を、取り戻したのだと確信した！

彼女は、深い定からゆっくり抜け出すと、これまで見たこともない、奇怪な情景が、心の中に展開されたが、それはまるで、夢から覚めたかのような感覚であった。凶暴な顔をした、頭のない鬼が、突然、どこからともなく姿を現し、ゆっくりフワフワと、彼女の視界に入ってきた。

頭の無い鬼は、胸に一個の、真っ赤な血の色をした目玉をはめ込んでいて、凶暴な目つきで、彼女を睨み付けた。メーチ・ケーウはそれを見て、身の毛がよだったが、脅威が迫っている様でもあり、どうしていいか分からず、逃げようと思った。

その為に、定力が揺らぎ、恐怖と戸惑いに襲われた。

その悪鬼は、まるで彼女の負のエネルギーを吸い取ったかのように、突然体が膨張し、魁夷で嵩高くなった。メーチ・ケーウの心が、乱れた。この凶悪で危険な刻々、彼女は突然アチャン・マンの事を、思い出した。かつて彼が教えた、怖い時には、決して逃げてはならない事。反対に、念を住めて保ち、清らかで明晰な心で対応せよ、という言葉、思い出したのである。この事に思いが行くと、心は即刻、清らかで明晰になり、その後、メーチ・ケーウは、純粹な覚知をもって、心を今に、安定させた。彼女は次に、

心が震え、恐れ、慌てふためいている感覚に専注し、頭の無い鬼に注目するのを、やめた。このようにして情緒が安定すると、恐怖は徐々に退散し、最後には霧散した。

この時、同時に、あの恐ろしい情景は淡くなり、最後には消えてしまった。禪定から出て、メーチ・ケーウは、日常的な通常の意識に戻ったが、彼女は、恐怖が齎す危険性について、反省した。彼女は直観的に、恐怖を齎す禪相自体が問題なのではなく、恐怖そのものが問題なのだ、ということを理解した。禪相はただの心理現象で、心と身体を傷つける力はなく、また、禪相自体に好悪はなく、特別の意義もない。心がどのように禪相を解釈するのかが、キーポイントで、それが危険の源であった。

もし、その解釈が、恐怖または嫌悪感を引き起こすならば、これらのネガティブで有害な情緒は、禪の修行中である心を動揺させ、心の静けさを破壊し、心から、理知を失わせしめるのである。もし、この時に、注意力を、禪相の恐ろしい面に集中させるならば、当然、ネガティブな情緒の働きが強化され、危険の度合いが、拡大される。恐怖と禪相は、同時に存在することはできない為、この時、禪の修行者は、禪相に注意を払ってはならず、恐怖自体に専注し、改めて<今・ここ>に、しっかりと安住するようになるべきである。メーチ・ケーウは、清らかで明晰な内観によって、禪修行の時、彼女を傷つける事ができるのは、唯一、コントロールをすり抜けた怖気、恐怖心だけである、と気が付いた。

アチャン・マンが彼女に教えた禪の法門は、簡単そうに見える。一定のリズムで念仏するのも、難しくはない。しかし、彼女は、これほど長期に禪の修行をしていなかったし、今、心を専一に集中することは、言うは易き、行うは・・・であり、彼女が修行を再開した時、余りの気落ちに、頭を壁にぶつけたくなつたほどであった。彼女は、心と身体の間を思った。双方がお互いに値踏みし、心がこれを必要としている時、身体はあれを必要とした；心があれを欲しいと思う時、身体は別のものを欲した；己の内部全体は、支離滅裂であった。食べ過ぎると眠いし、少ないと妄想する。歩く瞑想と座る瞑想。個人と大衆。彼女は一体どのようにすれば、一日のそれぞれの変化の中で、それぞれの境界において、鋭敏で、自覚的な専注を保持できるのか、知りたいと思った。

メーチ・ケーウは、断食を試してみた。続けて何日も食べないでみたが、彼女は、断食は心を昏沈させ、心を愚鈍にし、感情が揺れ易くなり、妄想の干渉を受けることに、気が付いた。こうなると、心のエネルギーはスムーズに流れる事ができなくなり、これらの障礙によって、彼女は精進を、保つことができなくなった。彼女はアチャン・マン膝下の出家者の多くは、断食を、修行を向上させる方便として、常々、飢餓と各種の辛

苦に耐え、断食を通して、覚醒心を高め、心を勇猛にし、專注力を鋭利に磨いている事を知っていた。

彼女は断食を試してみた後に、これは、己の性格に合っていない事を、認めた。彼女の心は、断食から利益を得ることは、できなかった。横にならず、徹夜して寝ない、という事に関しては、彼女はこれに、適応した。メーチ・ケーウは、出家して二か月目の月日は、ほぼ：座る、立つ、歩くという三種類の姿勢の中において、全く横になる事はなかった。彼女は ” 静坐者の修行 ” を試す事にし、己の天性の長所に恃んで、禅修行を高める方法を研究し、それを編み出した。メーチ・ケーウは、もし横になって眠らないならば、彼女の心は光明に満ちて、鋭敏になり、覚醒的な覚知力を得て、また非常に安らかで、静かで、調和がとれる事を、知ったのであった。こうして、彼女は、21日間連続して、横にならずに修行、精進した。

こうして毎日、寝ないで頑張った所、彼女の禅修行は益々深く、微細になり、確信もまたそれにつれて、強くなった。鋭敏な六根は、彼女を勇猛な人に変え、彼女の大胆で、猪突する性格に、合致した。彼女は禅修行において、益々頻繁に禅相が出るようになり、内容は益々、奇妙なものになって行った：ある時は、未来を予見し、ある時は、異なる心霊の領域に入り込み、ある時は、深遠なる仏法を洞察した。ある日の真夜中、メーチ・ケーウは深い定から出てくると、一つの禅相が見えた；彼女の死体が機織り機の上であって、身体はすでに腐敗して、膨張し始めており、色は黒く、皮膚が裂けて、膿と血が流れていた。

太った蛆虫が身体を覆い尽くし、蠕動しながら、腐った肉を食べていた。イメージ全体は迫真に満ちて、見ていた彼女の心は、大いに、打ち震えた。この時突然、彼女は、アチャン・マンが背後にいるように感じた。どうやら、アチャン・マンは、彼女の背後から、肩越しに、この奇異な場面を、見ているようであった。彼はゆっくりと、慎重に、メーチ・ケーウに注意を促した。死ぬことは生まれることの当然の結果である——一切の衆生は、一たび、この世間に生まれ出て来たならば、必ず死ななければならない。

彼らの身体は、最終的には必ず腐乱して、元の元素に戻る。実際、世間の一切合切は、みな衰退して、壊れてしまう。死は、常に我々と共にあるが、しかし、我々はこの命題を、考えようとはしない。アチャン・マンは彼女に、己自身の生老病死について、誠心誠意、思索することに、着手するように、と指示を出した。

做個堂堂正々の出家人！

(堂堂、威儀ある、出家者になろう！)

不要貪図世俗生活的汚穢而毀了出家的發心、  
（世俗生活の穢れに耽って、出家の發心を汚してはならない）  
不要回頭、不要眷念俗家、親屬。  
（振り返るな。俗世間、親兄弟の事は、忘れてしまえ。）

## ハチの巣をつつく

---

雨季の期間、ちびっこケーウは家において、時々、雑用をこなし、時々、従兄弟たちと一緒に遊んだ。彼女は、明朗快活な女の子であったが、今は、母親と一緒に過ごした、安らかで快適な日々を、懐かしいと思った。母親のいないこの期間、彼女は何とか、父親の機嫌を取ろうとしたが、布麻は不機嫌で、いつも、朝早くから出かけては、夜になってから、帰って来た。齋戒の日、ちびっこケーウは、伯母たちと一緒に農々寺に行き、母親に会い、前に後ろに彼女にまわりつきながら、家での出来事を話した。彼女の話聞いて、メーチ・ケーウは心配になった；布麻がいつも家にいないなどという事は、尋常ではなかったし、ちびっこケーウの話では、彼女の夫は、いつも酔っぱらって、酒の匂いをさせながら、家に戻ってくるようであった。

子供の為に、メーチ・ケーウは時々家に戻って、家事をこなし、ついでに状況を把握しようと思った。家に戻ると、夫はやはり、いなかった。彼女は、家で一日中洗濯や洗い物をし、ご飯を炊いて娘に食べさせたが、布麻はいくら待っても、帰ってこなかった。出家して三か月目、彼女は一週間に一度は家に戻って見たが、この間、一度も布麻に会わなかった。噂が伝わってきた。布麻は、隣村の女性と密会しており、それは二人の子供を連れた寡婦であった。それだけではなく、布麻は酒を飲み始め、常に酩酊して酔いつぶれていた。

この噂を聞いて、メーチ・ケーウは夫の不忠に嫌悪を覚えた。今、彼女は結婚生活に倦み、一心に梵行の生活をしたいと願い、還俗の事を考えると、気持ちが重苦しくなった。彼女は己の約束を守ったが、夫は基本的な戒さえも守れず、常軌を逸した行為は、彼らの結婚生活を破壊した。

雨季が終わろうとしていた。メーチ・ケーウは、安居が終わった後の、己の身の処し方を考えると、どうしていいか分からず、極度に苦しんだ。彼女は全くもって、二度と再び、結婚生活に戻りたくなかったが、娘の幸福を、深く願ってこいた。彼女はちびっこケーウと引き続き、親しい関係を保ちたかったし、母親の責務を果たし、彼女を教育してやり、彼女を育てたかった。しかし、ちびっこケーウはまだ 10 歳で、余りに小さくて、母親と一緒に、お寺で過ごすのは、無理であった。その上、彼女はすでに出家

していて、日常生活の必需品のすべては、お寺からの配給に頼っており、そんな少しばかりの物資では、娘を育てることは、できない相談であった。

メーチ・ケーウは慎重に、何かいい方法はないものかと、何週間も考え続けた。そして、ゆっくりと、一つの考えが纏まっていった；彼女は、家庭とお寺の生活の両方を、兼務することができる。昼間は家において、母親となり、妻となり、世俗の義務を果たす；夜には寺院で禅の修行をし、引き続き、道業に精進する。この考えは荒唐無稽であったし、現実的でもなかったが、しかし、彼女はそれらの事は気にせず、まずは試してみよう、と思った。前に約束してあった通りに、メーチ・ケーウは、雨安居の最後の日に、家に戻った。

しかし、彼女は白い三衣を脱がず、戒も捨てず、メーチの身分を保ったまま、黒いスカートとブラウスで白い三衣を覆い、己の企みを隠した。彼女は午前と午後は、ちびっこケーウと共に家事に勤しみ、その後に夕食の支度をした。彼女は、家人が夕食を済ませた後に、夜の暗闇に紛れて、寺院に戻るつもりであった。ちびっこケーウと布麻が、食卓に向かって食事をしている時、彼女は傍で世話をしながら、己は決して食べないで、メーチの不非時食戒を守った。メーチ・ケーウのこのような態度は、布麻を怒らせた。彼は彼女に、いったいどういうつもりなのかと詰問し、彼女に座って食事するように、命令した。メーチ・ケーウは拒否した。妻が言うことを聞かないのを見て、布麻は手を挙げた。メーチ・ケーウは退いて、階段を駆け下ったが、布麻が追いかけてきた。

その時、ちょうどメーチ・ケーウの兄である英が道端において、布麻を押し止め、喧嘩をやめさせようとして、あれこれ宥めながら、メーチ・ケーウを家から遠ざけた。布麻は怒り狂い、メーチ・ケーウと離婚すると咆哮したが、彼はまた、もし、メーチ・ケーウが財産を半分欲しいと言ったならば、最高裁まで争ってやると吼えた。メーチ・ケーウは、暗くなった空の下を、急いで村を通り過ぎ、お寺に向かった。世俗生活の心労と、苦難に疲れ果てた彼女は、その場で、もう決して、二度と還俗しないと、決意した。

お寺に戻ると、メーチ・ケーウは、皆が自分のことを、心配しているのを知った。彼女は、先ほど自分の身に起きたばかりの出来事を話すと、メーチ・タン・・・女性出家者の中の上席の者が、メーチ・ケーウを叱って言った：「どうして夫の元へ戻る必要がある？あなたは自分で、蜂の巣に手を入れてつき、自分で煩惱を増やしているだけ。これをよくよく教訓にして、もう火の中に、手を突っ込んだりしない事。たとえあなた自身は火傷しなくても、あなたの名節は、地に落ちるわよ。」

メーチ・ケーウは、もはやこれまでと、布麻とは一刀両断しようとしたが、何人かの兄たちが、彼女に対して、正式に問題を解決すべきだと主張した。彼女は兄たちの意見を受け入れ、何日かの後に家に帰り、婚姻関係をどのように幕引きするのかを、布麻と相談した。布麻は一切の妥協の余地なく、結婚した後に築いたすべての財産は彼のもので、彼女の実家が彼女に持たせたものを、どのように処理するのか、だけが問題だ、と言った。この点に関して、メーチ・ケーウは何等の異議を申し立てる事もなく、却って彼に感謝したくらいであった。というのも、己はすでに落飾して出家しており、世間も財産も、取るに足りない糞土のように思えたから。

彼女は、ビンロウを切る為に使っていた小刀以外、何もいない、と言ったが、これほど小さな品物でも、布麻は：あの小刀は結婚してから手に入れたものだから、俺のものだ、と反論した。メーチ・ケーウは最後の小さな望みも諦めて、世俗の生活を遠離し、世間の一切合切を捨て、一切無所有の身となった。

最終的な協議を終えると、メーチ・ケーウは、こっそり娘に会いに行った。彼女は子細に、また注意深く、最近起きた事をちびっこケーウに話して聞かせた。今回の事件は、彼女たちの運命を、変えた。彼女はちびっこケーウが、よく理解し、納得してくれるだろうか、と、祈るような気持であった。母親の出家の決意を聞いて、ちびっこケーウは、彼女と一緒に寺院に住みたい、と言った。メーチ・ケーウは、申し訳なさを感じながら、ちびっこケーウを眺め、出家の生活がどれほど清貧であるか、また、己の財産をすべて夫に渡してしまった今、自分自身は何一つ持たず、その為、彼女を養えない事を、心を痛めながら、説明した。

例えそうでなくても、子育てするには、寺院は、ふさわしい場所ではなかった。メーチ・ケーウの態度は優しくかったが、決意はすでに決まっておき、娘に他の選択の余地はない事、今となっては、父親だけが、娘に生活の必需品を与えることができる事、故に、父親と生活する外ない事を説明した。

メーチ・ケーウは同時に、彼女が大きくなったら、父親の財産を相続できるし、もし、その時になっても母親と暮らしたいのならば、寺院に来てよい、と約束した。もし、本当に実現したなら、メーチ・ケーウは、心の扉を大きく開いて彼女を歓迎し、彼女と共にいて、自分が老いて死ぬまで、修行を指導してあげる、と言った。ついにちびっこケーウは、イヤイヤながら母親の説得を受け入れ、父親の所に戻った。

メーチ・ケーウは、心配事を抱えながら、寺院に戻った。彼女の頭の中は、親族との関係を断ち、愛を辞し、友情を捨てる事の是非について、混乱した。何度も考え、考え



している内、思いはいつも、シッダッタ王子の、出家の因縁についての物語に、戻って行った。

王子は、愛する妻と子を置いて、王位と、世間の種々の煩わしさを振り捨て、求道の道を歩んだ。彼は、父親としての責務を果たさなかったが、しかし、彼がこのような選択をしたのは、神聖な目的の為であり、究極の真理の証悟の為であり、徹底的に、生死輪廻から抜け出す為であった。円満に覚醒した後、仏陀の成就是、世間における一切の犠牲と行いを超越した。

彼は、己自身の修行を成功させる事によって、数えきれない程の衆生を教え導き、彼と同じ様に、煩惱から解脱できるように、したのである。メーチ・ケーウはここまで考えて、自ら納得し、仏道に励む道心を激発し、決して後へは引かない心意気でもって、仏陀の足跡をたどり、梵行生活の最高峰を目指す事を、決意した。

仔細観察你的内心煩惱的起伏、

(あなた自身の、心内の煩惱の起伏を、子細に観察しなさい)

別那麼容易給它們騙去。

(そう簡単に、騙されてはいけない)

等你有能力掌控它們時、

(いつかあなたに、それらを掌握し、コントロールする能力が育った時)

就可以把它們的負面作用轉成正面的心靈能量。

(それらのネガティブな作用は、心のポジティブなエネルギーに変えることができる)

## 水を汲む

---

メーチ・ケーウの果敢な行動は、弁晒村という、人間関係が濃密な小さな村落に、大きな衝動を与え、その渦中の両家の家族は、皆、己の立場を擁護するために、大声で弁明した。農々寺の女性たちは全員、弁晒村の出身であり、今回の騒動の波を、かぶらない訳にはいかなかった。彼女たちはメーチ・ケーウの決意を支持した——ほとんどの人が、彼女がそのようにした事を肯定したが、しかし、現実問題としては、不必要な注目を引き起こし、村の人間関係が、寺院に持ち込まれた。寺院は村に近すぎた為に、事態は悪化の一途をたどった。

常住の僧侶と尼僧への、村民の干渉を避けるために、お寺は、早急に、何らかの方法で、この問題を解決する必要があった。尼僧たちは、寺院を遠くに引っ越すことは、考慮に値する方策だと考えた。というのも、そのようにすれば、寺院を、村民から引き離

す事ができるから。メーチ・タンは、日常的な清浄が、村民の俗事によって乱されるのを避けるために、将来的にも、僧侶と在家は、一定の距離を保つのがよい、と考えた。農々寺の住職アチャン・カンパンは、アチャン・サオの古参の弟子で、持戒厳しく、禅の修行に優れ、村人に尊敬されている、頭陀僧であった。アチャン・カンパンは、寺院の住職としても、また弟子を指導する年配者としても、サンガの利益を守る責任があった。

寺院内に住む在家男性にも被害が及んだため、メーチ・タンとメーチ・インは、アチャン・カンパンとこの事について、詳細に語り合った。もちろん、最終的な決定権は、アチャン・カンパンにあった。アチャン・カンパンは、彼女たちとよく相談した後、付近の山にもう一軒寺院を建てて、引っ越しをしよう、という事になった。彼に付いて行きたい出家者は、彼に付いて行き、そうでない者は、農々寺に残ればよい、とした。

攀山は、磐山山脈が伸びた先の、いくつかの山丘の中にあり、弃晒村とは6マイル離れていた。歩くか、または牛車に乗っていた時代、高低差のあるこの地形は、人々を拒絶したし、故に、辺鄙であった。彼らが選んだ場所は、嶺の崖の下で、崖の高さは10mほど、その崖は傾斜がひどく、登ることが出来ない。眼下は、竹が濃密に茂り、紫檀が群生する斜面であった。崖岩が大きくはみ出している部分は、枯れた苔に覆われ、その下は長方形に開かれた大きな洞窟で、そこに身を隠す事ができた。上方にせり出した大岩があるため、洞窟の中は、太陽光が届かず、雨に濡れる心配もなかった。

来た当初、ここには、何もなかった。僧と尼僧たちは、各自に割り当てられた洞窟に、湿った地面から離れる様に、簡単な、竹でできた高床式のプラットフォーム、平台を作った。これなら、禅の修行ができるし、住むこともできる。当時、厠を建てていなかったのだから、各自各々、崖の隅に行き用を足したが、いつも、いたずら好きな猿の群れが、木の上から、見ていた。水は、ここで生きていくのに必要な、最も重要な資源であると共に、最大の難問でもあった。最も近い水源は、山の谷底にある一本の溪流であったが、歩いて行くのに、30分かかった。皆で相談した結果、新参のメーチが、水汲みを担当する事になった；男性たちは、近所の農夫と一緒に、新しい寺院の基礎を作る事になった。毎朝、朝食が済むと、メーチ・ケーウは竹でできた天秤棒の先に、二つの空桶をぶら下げてそれ担ぎ、他の女性たちと共に、水を汲みに出た。

彼女は、狭くて細長い坂道を通らなければならなかったし、あちらこちらに埋まっている木の根っこ、所構わず顔を出している石ころを避けて、歩かねばならなかった。溪流にいくと、その水を、桶一杯に満たした。その後は、水で一杯になった二つの桶を、

天秤棒にぶら下げて担ぎ上げ、険しい山道を戻った。水が桶から零れ落ちないように、彼女は小心翼翼で、洞窟に戻ってきたときは、息も絶え絶えであったが、水をあけて桶を空にすると、再び水を汲みに出かけた。こうして、日に何度も何度も、山道を往復した。

水汲みというのは、重労働である。毎日毎日、重い足取りで、登り、下り、また登り・・・、メーチ・ケーウは、疲れを知らぬかのように、同じ労働を繰り返した。重労働にあっても、道心は揺らいだ事はなく、彼女は世俗の逆境を、修行上の増上縁にしようとして決心し、道を歩くときは ”ブッ——ダ” ”ブッ——ダ” と一文字、一文字黙然し、やがて黙然すれば、たちまち心が平静になり、天秤棒も軽く感じられるようになり、作業にあたって、それほど疲れる事もなくなった。メーチ・ケーウにとって、心の扉が開いた後、水汲みは簡単な労働となった：それは、身の丈にあった、ちょうど良い分量の仕事を、この時この場でこなし、一步の次は、また一步步む、ただそれだけのことだ、という認識を、明白に、得る事ができたが故であった。メーチ・ケーウの兄たちが、状況を探りに、臯山に来た。

彼らは彼女の暮らしぶりをみて、その辛苦のほどに、震撼し、驚いた。彼らは深く妹を愛していて、彼女の苦勞を減らす為に、苦しみは共にという精神を發揮して、尼僧たちが、水を汲んで、山道を往復するのを、手伝った。しかし、六人の男性と五人の女性が使う水の量は、半端なく、最後には、彼らも疲れてしまい、先ほどまでであったくやる気も、消え失せた。彼らは、メーチ・ケーウに、弁晒寺に戻るよう勧めた。そこにいれば、少なくとも、兄たちが、何程かの援助を、する事ができるから。彼らは彼女に、布麻は再婚し、家を売り払い、ちびっこケーウと家人を連れて、新しい町に引っ越して行った事を、告げた。

メーチ・ケーウは、それを聞いても、心を動かされる事はなく、アチャン・カンパンと共に、臯山で清貧なる修道生活を送る事に、決めた。暫くすると、新しく建てた寺院は、初歩的な姿を現したが、しかし、本当にここに住み続けるのだとしたら、水源が一番の問題であった。彼れらは、近所の山々を調べつくしたが、それでも、水源を見つける事が、できなかった。万策尽きたかと思われたその時、ある日の夜、結跏趺坐して、背筋を伸ばし、己の内部に向かって専注していたメーチ・ケーウは一つの、つつましい願をかけた：もし、我々が臯山で暮らし続けてよいのなら、どうか、お寺の近くに、水源を見つける事ができますように。

そして、そのまま、いつもの通り、瞑想した。夜も更けた頃、彼女の心は深い定から出て来ると、一つの禅相が、自然に浮かび上がった。それは、藤の蔓と背の高い雑草が、

12面の池の上を覆いかぶさるように、生い茂っている、というものであった。彼女はこれがどこであるかを知っていた。というのも、かつて何度もこの付近を歩いたし、洞窟からは、遠く離れては、いなかったから。次の日の朝、メーチ・ケーウの申し出により、尼僧たちは、彼女の指示に従って探索に行き、厚い水草に覆われた池を、幾つも発見した。

皆は意外な出来事に喜び、アチャン・カンパンは、メーチたちと当地の農民とで、藤の蔓と水草を取り除き、池の堆積物を浚うよう、指示を出した。堆積物は、非常に多かった。池を浚って、綺麗にした後、これらの池の水は、寺院が通年使っても、涸れるということとはなかった。

人会受苦是由于执着放不下、

(执着して、手放そうとせず)

老是不満足。

(いつも、なんにでも、不満をかこつ時、人は苦しむ)

好々観察自己的心、

(よく己の心を観察して)

学习怎麼捨棄苦的原因。

(どのようにすれば、苦の原因を、捨て去る事ができるのかを、学ぶべきである)

## 別世界への出入口

---

臯山に住んでいた時、メーチ・ケーウは、深夜に瞑想していると、よく、各種の特殊な境界を経験したが、それは、今まで聞いたこともないような、普通では考えられないような、事柄であった。深い定から、少しだけ退出すると、メーチ・ケーウの心は、彼女が熟知する所の、心霊のエネルギーが交差する世界に、入ることができた。この世界は、異なる領域をもっており、色々な心霊レベルの衆生がいて、ある者は暗黒、低いレベルの領域から来ており、過去の悪業の苦の果を、受け取っていた：ある者は、光明の世界、高尚なる領域から来ており、それは天人、または梵天に属する者であった。

禅定は、彼女を、とある一つの出入口に、導いた。ここでは、異なったエネルギーのフォースが、彼女の心を引き付け、彼女の注意を促した。アチャン・マンは、かつて、これは近行定であり、このレベルの定は、異類の衆生的心霊のエネルギーに遭遇する事によって、彼女は、容易く傷つけられてしまう、と言って忠告した。同時に、彼女に、彼女がこの出入口に入り込む前、必ず、しっかりと、己の心をコントロールできる能力を、身につけておかねばならない、とも言った。メーチ・ケーウは、アチャン・マンの

言葉をしっかりと胸に刻んではいたが、彼女の生まれつき、好奇心が強く冒険好きな性格によって、心は、誘惑に負けて、つい、探検に出かけてしまうのだった。

出入口を出た後に見る光景は、彼女を恐怖に陥れ、また夢中にもさせた。身体のない、非常に大きな神識の群れが彼女を取り囲んだ——ある者は叫び、ある者は泣き——彼女に対して、彼らが過去において為した数々の悪業を、解消して欲しいと、哀訴した。多くの顔と体がびったりと彼らに吸い付いていたが、これらは過去世の命の残渣であり、それはまるで、いまだ終了していない旅程における、死の烙印のようであった。この種の神識はすべて、彼らの住む暗黒なる一角を照らし、彼らに希望を与えて貰いたい故に、彼女に憐憫を乞い、注目され、守ってもらいたい、と思っていた。

これらの禅相の多くは、殺された動物の神識で、彼らは、己の激烈な苦痛を和らげて貰うために、功德が欲しくて、彼女の所へ、やってきた。ある日の真夜中、メーチ・ケーウがサマーディから出てくると、今殺されたばかりの水牛の神識が、彼女の前に現れて、苦痛に耐えきれずに泣き叫び、彼の運命について、悲しみの訴えをした。この水牛の神識は、亡霊のようで、彼女の禅相の中に出現するやいなや、即刻、己の悲惨な過去について語り始めた。メーチ・ケーウは、心識でもって、彼の話す情報を受け取った。その水牛は、彼女に、彼の主人は残忍で野蛮な人物であり、少しの慈悲心もなく、毎日、朝から晩まで、彼を追い立てて田を耕させ、車を引っ張らせたが、これまで一度も、彼の苦勞を思いやることもなく、いつも鞭で打ちつけ、虐待した、と言った。最後には、この可哀そうな動物は、木の幹に括りつけられて、残忍に屠殺され、食べられてしまった。死に臨んで、彼は激烈な苦痛を感じ、頭を何度も強く殴られ、その為に、心裂けんばかり、肺もちぎれんばかりに嘶き、最後には、気を失って、その場に倒れてしまった。この水牛の神識は、この時まで、傷の中に浸っていて、前世の形体に執着しており、メーチ・ケーウによって、功德を回向してもらい、来世には人間になるチャンスを得たいのだ、と言った。

この神識は、メーチ・ケーウの憐憫の心に鑑み、直接彼女に、水牛となって生まれた事によって受けた苦痛を訴え、水牛が忍従しなければならない、人間による野蛮な行為と、無情の虐待について申し述べた。人として生まれたからには、たとえ貧苦で下賤であっても、畜生ほどには、虐めと侮辱を、受けたりはしない。故に、水牛は、来世、人間になる事を、渴望した。

メーチ・ケーウは非常に驚いて、本当に、そのような残忍なことがあるのかどうか、訝った。彼女は、近所の多くの農夫を知っているが、皆善良で、気の良い人たちばかりであった。禅相の中で、彼女は水牛に対して、自分の疑問を伝達した。水牛は自分の主

人は残忍で野蛮な人であり、称えるべき人格などないのだと、言い張った。そうではあっても、この水牛の心内は、恨み心で一杯であり、事実を歪曲している可能性があり、または主人が彼を打ったのには、理由があったのかも知れない。

彼女は率直に、彼に聞いてみた：

”あなたは他人の畑の作物を食べた事はないですか？

それとも、田圃の側の野菜を食べた事はないですか？

このあたりに住む農夫は、皆善良で、あなたが悪い事をしていないならば、なぜに虐待することがあるのでしょうか？

私は、あなたが何か間違ったことをして、罰を受けたのだと思いますが、違うでしょうか？”

彼は認めた：

”私がそのような事をしたのは、無知からです。私は一日中、田圃で仕事をしましたが、主人は決して、草場に連れて行って、草を食べさせては、くれませんでした。私はお腹がすいて、見つけたものは、何でも食べました。私に言わせれば、すべての植物はみな同じに見えて、所有者がいるかどうか、私には分かりません。私は、ものを盗もうとは思った事はなく、私に人間の言葉が分かったならば、過ちは犯さなかったでしょう。人は、動物より聡明なのですから、彼らこそ、我々の本性を理解して、我々に、更に憐憫をかけ、我々を許すべきです。己の能力に恃み、その他の生命を無情に蹂躪する事、特に人の道徳に悖るようなやり方は、許されません。善人は、このような恥知らずな、罪深い行いは、決してしません。あなたが言うように、この付近の農夫のほとんどは、善良であるでしょう。

しかし、私のあの主人老通（＝ロートン）は、残虐で品格のない人間です。あの人はそれほど無情で、はなから、憐憫とは何かも知らないし、寛容とは何かも、知らないのです。彼は他人にも冷たく、なにより、動物なんかには、配慮などしないのです。”この悲惨に屠殺された水牛の話聞いて、メーチ・ケーウの表情が変わった。小さい頃から大人になるまで、メーチ・ケーウは畜生の悲惨な運命を、憐憫した。彼女は以前、毎日、黄牛と水牛に餌をやる時、もち米を一握り食べさせてあげ、彼らの耳元で囁いた：あなた達は田圃で仕事をするけれど、当然、ご飯をお腹いっぱい食べていいのよ。

動物はこのように可愛がられて、彼女と非常に親しくなった。たとえば、首に鈴をつける為の紐が切れた時、牛は、直接彼女の所へやってきてそれを知らせ、決して、これを奇貨として、逃げてしまう、などという事はなかった。今、メーチ・ケーウは理解した。これらの動物は、たとえ飼い主によって、よりよく待遇されたとしても、過去の業力によって、一生涯、苦勞せざるを得ない事を。

メーチ・ケーウは知っていた。衆生が悪道に墮ちるのは、憤怒と怨念が、その主要な原因である事を。この悲惨な訪問客が、憎しみの心で一杯なのを見て、彼女は彼に、心内に怒りを持ち、復讐の考えを巡らす事の危険を、教えた。彼女は、水牛の神識に警告した。ネガティブな感情は、来世に、人となって生まれたいという願望と、矛盾する。もし、本当に人として生まれたいのならば、必ず、これらの有害な煩悩を、コントロールしなければならない、と。メーチ・ケーウはまた、彼に、五戒は人としての基本であり、もし、人に生まれ変わる機会があったなら、これらの基本的な規範を、しっかりと守る事を、誓わねばならないとも教えた。

彼女は五戒について、説明した：その他の生命を殺したり、傷つけてはならない；偷盗はならず、他人の物を盗る事は許されない。たとえば、他人が菜園に植えた野菜であろうとも；邪淫もならず、間違った性的関係をもってはならない；嘘を言い、故意に人を騙してはいけない；また、酒または精神を混濁させる毒物に、耽溺してはならない。殺・盗・淫・妄は他人を害するだけでなく、人間関係の基礎——信頼と率直さを壊してしまう。酒と毒物に耽溺する事の危険性は、人の精神を混濁させ、上記の四つの戒を、犯すようになる点にある。業の見地から言うと、これらの行為は、畜生、餓鬼と地獄に墮ちる、原因である。

これらの悪道にいる衆生は、無量の苦を受け、心霊は薄弱で、善業を修して善道に往生する事が、非常に難しい。故に、誠心誠意五戒を護持することは、悪道に墮ちる事態から遠く離れることができ、また、同時に、人として生まれ変わる事が、保証され得る。もし彼が、このように五戒を守ることが出来、身口意の三業において、悪業を為さないならば、大いに期待することが出来る——今は無理でも、将来において、必ず得ることが出来るに違いない——彼が渴望する所の人身を。

メーチ・ケーウは、この不幸な神識の、悲惨な境遇に深く同情して、人道に往生できる種を蒔いて貰いたく、慈悲をもって彼に、功德を回向してあげた：“私の功德を、あなたに回向します。それによって、あなたが己の言動を守り、善根を育て、あなたの善なる品行を導き、資糧を蓄積して、真実、楽しい場所に、往生するようと、祈願します。”この水牛の神識は、メーチ・ケーウの祝福を受けて、彼女の殊勝な功德の回向に随喜した後、軽快で歓喜の伴った心で、そこを離れた。それはまるで、彼が生まれ変わりたいと思う所の善道へ向かって、針路を取ったようであった。

翌朝、メーチ・ケーウは当地の村人を一人呼んで、側に来てもらい、こっそりと、昨夜起こった出来事を、話して聞かせた。彼女は彼に、あの水牛の前の主人である老通が、どこに住んでいるか、あの牛に、何をしたのかを、調べて欲しいと、言った。また同時

に、彼女がこの事件を調べている事は、老通に知らせないようにと、釘を刺した。というのも、事が公になれば、老通は面子を失うし、老通が彼女を恨んだ場合、彼の悪業が、益々深まるが為に。

その村人は、彼女から話を聞くと、彼らは、二人とも同じ村に住んでいて、老通の事は、よく知っている、と言った。昨夜の八時過ぎ、老通は、水牛を木の幹に括り付け、殺した。村全体に、哀れな水牛の、必死の嘶きが、響き渡った。殺した後、老通は、肉を焼き、たくさんの友人を招いて宴を催し、人々は騒ぎまわり、明け方まで、騒音が絶えなかった。人が悪業を為しているのを見て、メーチ・ケーウは悲しかった。心内の奥深い所で、彼女は、錐に刺されるような痛みを感じた。それはまるで、悪業を為しているのが、自分の子供であり、その粗暴な行為に、彼女の、人間性への信頼が、裏切られたように感じた。

彼女は加害者と被害者が、怨恨、報復、暴虐と怒りの循環という悪業の中で、一世また一世と、相互に役割を変えながら、絶え間なく、下方へと落下して行き、ますますもって、暗黒なる悪道へと、向かうのを見た。メーチ・ケーウは村人に、あの水牛が、もし救済を希望するならば、ただ、憎悪、恨みと復讐の念を停めて、他人の善行を随喜するしか、方法がない、と言った。今現在、彼は鬼道の衆生であり、善を實踐する事はできないが、しかし、他人の善行を随喜・讃嘆する事によって、心靈上においては、それを善行の功德だと、見做すことができる。

あの水牛は、メーチ・ケーウと善縁を結んだが故に、善道に往生するための、第一歩を、すでに歩み出す事ができた。未だ、生死輪廻から解脱できていない人は、よくよくこの事件を思惟して、どのような人間であっても、もし心の修行を怠り、戒の原則を守る事を軽視するならば、同様の境地に墮ちる事を、覚悟しなければならない。

不要像動物那樣只知喫睡、

(動物のように、ただ食べて、ただ眠るな)

戒惧自己不再沈迷世俗的生活、

(またもや、世俗の生活に沈潜することに惧れを抱き)

謹小慎微害怕来生会堕落。

(小さき<悪>を謹じ、ささやかなる<悪>を慎み、来世の悪趣に備えよ)

不要座在那里発呆、

(君よ、そこで惚けていないで)

生命剩下的時日不多了、

(生命の火の、残りの時間は少ないが故に)



好々警惕自己！

(己の覚醒にはげむべし！)

## いのしし

---

メーチ・ケーウは、心の言語でもって、心霊の領域の衆生と、交流する。これは、すべての衆生の、共通言語である。ちょうど人間の意識が、話の内容と形式を決定するように、心霊の領域の衆生の意識流は、思いと感情によって交流されるが、その中には、意味と目的が含まれる。一つひとつの思いと感情は、明確な内容を含んでおり、他の衆生の意識と交流する時、明晰で完全な概念と己の考えを、直接相手方に伝達する。

メーチ・ケーウは、心の言語で直接、これらの衆生と交流し、彼らにどのような問題があるのか尋ね、彼らの生活の背景を理解し、彼らの物語を傾聴した。彼女は非常に、彼らを援助してあげたかったのだが、ただ、大方出来た事と言えば、彼女の禅の修行と梵行の功德を、彼らに回向するのが精いっぱい、後は彼らが、これら手に入れた功德を、どのように上手に利用するか、という問題が残されるだけだった。

ある時、彼女は禅定の時、水牛事件より尚、不思議な事件に、出くわした。それは一頭の、殺された猪であった。この猪は、夜中に阜山に来て、餌を探しながら、野獣が水を飲む水溜まりまで来た時、そこに身を伏せて、隠れていた当地の猟師に、射殺されたのである。メーチ・ケーウが、明け方まで瞑想していた時、一頭の猪の霊魂が、彼女の視野の中に、浮かんで現れた。この霊魂が、メーチ・ケーウを訪ねて来た時、彼女はもう何を見ても不思議にも、思わなくなっていて、その為、意識を直接相手に向け、この猪に、一体何の為に、私の所に来たのかと、直接訊ねた。

猪は、驚いた様子で、ドギマギしながら、ボソボソと、語り始めた。彼が言うには、自分は、水溜まりに来た時、阿黒（＝アーヘイ）という猟師に、殺された。メーチ・ケーウは、なぜ、そのように注意を怠ったのかと、問うた。猪は、メーチ・ケーウに、彼を信じて欲しい、と懇願した。彼は、生きていく為に、いつも警戒心を解かず、特に猟師には注意していた。野獣が大自然の中で生きて行くためには、その凶悪危険な様は想像を絶し、その環境は、通常の辛苦、厳しさではない、と言った。猪は森の中において、季節の影響を受けるだけでなく、その他の猛獣の脅威にも晒され、猟師と落とし穴は更に危険で、その為、いつも慄きながら、暮らしている。この猪は、非常に慎重な性格で、故に長年生きてきたが、不幸にも、最後にはやはり、猟師に殺されてしまう運命となった。

この猪がメーチ・ケーウに訴える所によると、彼はまた再び、野獣に生まれ変わるのを、非常に恐れている、との事だった。再度、あの信じがたい苦痛、長期的な怖れと猜疑の中で暮らすのは、耐え難い。一頭の猪になって生まれれば、永遠に気の休まる時はなく、一日として、安心して日を過ごすことができない。この猪はメーチ・ケーウに、彼は再び、畜生に生まれ変わることを、避ける事ができなさそうで、それが辛い。悲しいかな、福德薄く、将来どこへ生まれ変わるのかという見通しも、立たない。故に、わざわざ彼女に会いに来たのは、彼女が回向する功德によって、自分が人として生まれ変わる可能性を高めたいが為だ、と言った。

彼は、自分が、先ほど獵師に殺された身体肉以外に、彼女に供養できるものはなく、故に、メーチ・ケーウに慈悲をもって、彼の肉を食べて貰いたい。そしてメーチ・ケーウに、身体肉の気力を高めて、人に敬愛され、尊敬される精神生活を過ごして貰い、その事もまた、彼の功德としたいのだ、と言った。その猪は、急くようにメーチ・ケーウに伝えた。明日の朝早く、獵師の家人が、彼の身体である肉を、寺院に持ってきて、供養する。彼は、メーチ・ケーウに、彼の肉を食べて欲しい。この布施が、彼が、人として生まれ変わるのに十分な功德で、あつて欲しい。猪は、彼女に一番上等の部分の肉を供養したいのだが、しかし、彼が思うに、人は利己的だから、あの獵師は、精肉は己の手の中に残し、残りの肉を持って来るだろう。

メーチ・ケーウは、この猪が言い出した願い事に、非常に驚いた。長年、彼女は動物の亡霊が、己の肉をもって供養とし、それを功德となす、という事に出会ったことがなかった。彼女は、心底この猪の悲惨な運命を憐憫し、慈心を回向してあげると同時に、彼から申し出のあった、布施の心意気を、受け取った。彼女は、彼の布施の功德を讃嘆し、彼の自尊心を激発した。その他の、悪道にいる衆生に開示するのと同じように、メーチ・ケーウはこの猪に対して、五戒は、人身を得るための根本である事を強調し、五戒でもって、身口意の三業の規範とするようにと、論じた。その後、メーチ・ケーウは、修行の功德を彼に回向する事を祈願し、彼が人道に往生するようにと、願った。猪は、満足した様子で、彼女と約束し、彼女の祝福による励ましを受けて、恭しく別れを告げて、去って行った。

次の日の朝、メーチ・ケーウは、大殿において、他の出家者と一緒の時に、声を低めて、今回の、考えられない程不思議な出来事を、話して聞かせた。彼女は情景を詳細に述べて、皆が、全体の状況を理解し、もし、本当に、あの獵師が猪の肉を持って来たならば、彼らが慈悲の心でもって、猪の布施を受け取れるように、配慮した。彼女は、お寺の住人全員に、幾らかずつでも猪の肉を食べてあげて欲しい、その事によって、彼の

布施への発心を尊重してあげられるし、かつ、そのようにする事によって、彼が人道に往生できるよう、支援してあげる事もできるのだからと、頭を下げた。

果たして、予想に違わず、その少し後に、獵師阿黒の妻が、寺院にやって来た。彼女は、猪肉の焼いたのを持ってきて、アチャン・カンパンと僧侶たちに、恭しく供養した。彼らは、彼女に、この猪の肉は、どのようにして手に入れたのかと聞いた所、彼女の申し述べる所の事は、すべて、メーチ・ケーウの説明と、一致した。すべての出家者は、この供養を受け取り、彼らの慈悲による行為が、多少とも、この可哀そうな命の苦痛を、和らげられるようにと、願った。メーチ・ケーウは、渴愛が、死と再生を繋ぎ、生命をば、一連の、止まる所を知らない、憂いと悲しみと、苦悩の中に、引きこむのを見た。

彼女は、非常に多くの人々が、貪欲に捻じ曲げられ、憎悪に追い立てられる光景に、遭遇した。彼らは、茫々たる無明の大海の中で、頼れる者もなく、定かな目標もなく、ただ漂いながら、過去に為した深重なる業力に巻き込まれて、下方に沈んでいくばかりであった。悪道にある神識は、福德の資糧を最も必要としていながら、これらの餓鬼は、過去世において人道にあった時、無私の中で布施をする習慣がなく、道徳による庇護の力を、見落とした。人身を得た時に、福德の資糧を蓄積しないならば、死後、神識が暗黒の悪道に堕ちた時、もはや再び、徳を積むことはできない。これら孤独な魂や野卑なる魂は、己自身の内に頼りにできる福德がなく、他人による救済を待つ他なかった。

もし、人道にいる善人が、身口意の三業の功德を、彼らに回向する事を発心しなければ、これらの餓鬼は、極度な貧困と窮乏の中に生きて、善道へ向かう方法が全くなく、ただ、引き続き、悪業による悲惨な応報を受けるしかなく、過去に行った悪事または一時的になした悪の果報が消耗しつくされるまで、待たねばならなかった。メーチ・ケーウは、餓鬼は、流浪している動物のようで、貧困と恐怖の環境の中で漂泊しており、心霊の力が尽きる事によって当惑し、気遣いをしてくれる主人がいない、と思った。これらの悪業の果報に落ち込んだ衆生は、どの道に生まれようとも、皆同じであった。というのも、彼らの苦痛と悲惨は、止まることを知らないものであったから。

一切的意识領域、一切的衆生、

(すべての意識的領域、すべての衆生は)

都源自于心。

(みな、その心を源としている。)

所以、你最好全神專注自己的心、

(故に、全身全霊をかけて、己の心を專注せよ。)

你会在这里发现整个宇宙。

(そうすれば、あなたは、そこにおいて、宇宙全体を発見するであろう。)

## 山中の亡霊

---

皐山寺は、アチャン・カンパンの指導の下、徐々に発展して、道風蓬勃とした道場となり、出家の男女二衆は、皆、禅の修行に専心した。アチャン・カンパンは、かつて、アチャン・サオの膝下で何年も参学しており、故に宗風は、この尊敬すべき仏教指導者の風格と一致した。寺院内に住む者は、和合の精神を重んじ、お互いに尊重し合って、共に暮らした。毎朝、僧たちが肅々と徒歩で村に入り、托鉢する光景は、人々に、油然として、敬慕の念を抱かせた。メーチたちは、寺院に残り、露天の厨房に集まって、煮炊きをし、僧たちが托鉢から戻った時に、少しばかりの白飯とおかずを、補充した。

村人が、寺院の入り口にベンチを置いたので、僧たちが戻ってきた時、メーチたちは、ここに立って、準備しておいた食べ物を、彼らの鉢の中に入れた。寺院に戻って、分配すべき物品を分配した後、僧たちは、大殿に集まって、安居の年数の多寡に従って、順序良く座り、経を読んで祝福した後、黙々と朝食を摂った。メーチ達は、読経による祝福を受けた後、自分たちの住まいに戻り、同じように、出家の年数の多寡によって、座席を決めて、黙々と食事をした。食事が済むと、男性たちは、各自、鉢を洗い、ふきんで拭いて乾かし、鉢カバーをかけて、並べて収納した。女性たちは、茶碗や鍋を洗い、厨房の片づけと掃除をした。

朝の作務が終わると、ここで寝泊まりしている修行者達は、各自、辺鄙な場所にある小さな茅葺小屋に戻り、経行～歩く瞑想か、または坐禅をした。彼らは、午後四時ごろまで森の中において、その後寺院に戻り、午後の作務に取り掛かった：まずは地面を箒で掃き、その後に、皆で付近の池まで行って水を汲み、それぞれの水がめを一杯にした：飲むためのもの；足を洗うためのもの；鉢と鍋などを洗うためのもの、など等であった。作務が済むと、シャワーを浴び、引き続き、禅の修行をした。もし、その夜に会議がないならば、深夜まで修行して、その後に、ようやく眠った。

アチャン・カンパンは、通常、一週に一度、常住の者を集めて集会を開いたが、それは、齋戒の日の夕方に催された。皆は、まず一緒に読経し、偈頌を念誦して、三宝を讃嘆した。夜の勤行が終わると、アチャン・カンパンが禅の修行に関する注意点を述べ、皆が弃道に努力するよう、激励した。法話が終わると、弟子たちの質問や問題に答え、どのようにして修行を継続するのか、指導した。他の日に、もし何か急用があった場合、適当な時間に彼に会って、相談する事もできた。修行の上において、アチャン・カンパンは、深く弟子たちに敬われ、尊敬された。彼は紳士的で礼儀正しく、人に対して正直で誠実であり、事に当たっては、慎重かつ堅実であった。

禅の修行と持戒の成果は、彼の心内が、真正の平和と静けさに満たされている事を、意味した。彼は、異なる深さの定に証入する事に精通し、各種各様の境界において、豊かな経験を持っていた。この見地から言うと、彼の禅の修行の深みは、メーチ・ケーウの天賦のもと相応した。彼の心は自由に、甚深のサマーディに入ることができたし、多くの心霊の領域の衆生と頻繁、密接に接触する事ができた。故に、メーチ・ケーウに対して、特殊な禅定の、各種の境界に、どのように対応するべきか、指導することができた。メーチ・ケーウは、この方面において、受益多く、彼の指導に、非常に感謝した。臯山にいた何年か、メーチ・ケーウは禅の修行において、大いに収穫があった。

毎回、新しい心霊の領域に入る度に、彼女は益々、肉眼で見えない世界を、理解した。アチャン・カンパンの指導の下、メーチ・ケーウは能力を強化し、多くの、常人が知る由もない、低くて下賤で微細な非人間的世界に接触し、かつ、そこでの各種の現象を、理解した。彼女は、色とりどりの多彩な境界を体験し、楽しくて仕方がないかの如くに、心霊世界を探索した。彼女を驚かせたのは、非常に多くの亡霊の社会は、人の社会とよく似ており、指導者がいて、社会全体を管理し、集団の活動を監督し、同時にまた、方法を講じて、大衆間の調和を保持していて、漂泊している孤独な魂や、野卑なる魂とは、完全に異なっていた事である。

ある種の衆生は、かつて多くの功德を蓄積したものの、しかし、過去世の悪報が現前して鬼道に墮ちたものであるが、しかしながら、彼らは、前世にあった善良なる性格を保持しており、故に大きな威力があり、徳でもって衆を服することができた。その他の、徳を蓄積していない亡霊は、徳行があり、権威がある亡霊を敬い畏れ、その指導に従った。

鬼道の社会では、一人の亡霊は、ただ善なる力に頼るだけで、非常に大きな群衆を統括することができる。それはすなわち、善行の果報が、当然悪行の果報より力がある、という道理でもあった。また、メーチ・ケーウは、亡霊の社会は、集団または階級によって分断されているのではなくて、厳格に、自ずから顕現する所のある種の果報によって、貴賤秩序が保たれていて、そのため、人類の社会程には、差別や蔑視はないことを知った。彼らの生活の状況、また社会的な地位などは、みな、過去になした業に相応していた。

偶には、亡霊の頭目が、メーチ・ケーウを連れて、彼の地盤を参観させ、彼女に、色々な亡霊の生活内容を、説明することもあった。亡霊の世界にも、ならず者はいて、これら問題を起すならず者は、一か所に集めて生活させる。人類が ” 牢獄 ” と言ってい

る、場所である。亡霊の頭目は、牢獄にいるならず者は、陰険で下品で、過剰に他の亡霊に干渉するので、彼らの罪行の内容に沿って、懲罰を受けているのだ、と言った。

その頭目は、”亡霊”という言葉は、人類が命名したもので、彼らはただ、宇宙にいる色々な有情の中の一つに過ぎず、彼ら自身の業報に基づいて存在している意識的生命体であり、その事について誤解せぬよう、メーチ・ケーウに注意を促した。メーチ・ケーウは禅定の体験を通して、多種多様のレベルの世界を体験したが、ある時には、彼女の神識は身体を離れ、天界または異なるレベルの梵天界に漫遊した。

天界の心識は、また別の業力の法則によって支配された衆生で、彼女は各種の天人に出会ったが、これらの密やかで妙なる有情は、過去の善業の果報が熟した為、楽しい、幸福な環境の中で生活しており、高度なレベルの天界に生きれば生きる程、彼らは益々、密やかで妙なるものになった。彼女は、地居天にも会ったことがある。これら発光する天人は、その土地と深い因縁があるため、そこの地に生まれ、森や果樹園、木の上などに住んでいた。人間の肉眼では見えないのだが、メーチ・ケーウの天眼は、天人をはっきりと捉える事ができた。彼女は、天道にいるのは知足の衆生で、彼れらは幸せに暮らしており、いつも感官の悦楽を享受しているが、これは、彼らが過去世において、人であった時に布施、持戒と禅定の修行をして、蓄積した福報である、と思った。これらの善業が、彼らをして、天に生まれさせ、快適で美しい生活の中で、色々な欲楽を享受せしめているのであった。

天人に、各種の福報があるとは言っても、しかし、積極的に向上しようとする意欲に欠けている為、彼らは善を修して、己の寿命を延ばそうとはしない。その為、ひとたび、福報が尽きると、彼らは人間界に降りる事を希望し、人間界において、善良な性格によって功を奏せしめ、善を修して、福德を蓄積したいと考える。劣悪で困難な悪循環に陥って、悲惨な応報に遭遇している亡霊とは違って、天道の衆生は、善の果報を、享受している。そうであっても、一つの事柄については、天人とその他の衆生は、異なる所がない：すなわち、彼らもまた、感情の執着というお荷物を背負って、止まることを知らない輪廻の中で、解決の道がみつからないでいる。

一つ強調しておきたいのは、これら天道・鬼道などは、心霊の領域を言い、物理的空間ではない、という事である。故に、天道は、比較的 ”レベルが高く”、比較的密やかで妙やかであると言い、鬼道は相対的に ”レベルが低い” という時、それは心識の高低を言うのであって、物理的空間の高低を言っているのではない事に、注意して欲しい。”上に向かって” ”下に向かって” と言うのも同じで、それは世俗の言語を

用いて、色身の移動を言うのであり、意識の流れる方向は、この表現とは同じものではない。意識流の微細な動向は、世俗の理解を超えている。

物理的な上下移動には、出力が必要であるが、心が向かう所の比較的 ” 高い ” または ” 低い ” 意識の領域は、力を必要としておらず、 ” 高低 ” は、ただの比喩に過ぎない。天人と梵天は、下から順に、階層をなす世界だと言う時、字面のままに理解して、高層ビルのような、低きから高きへと登って行くイメージを、持つてはならない。これら天界は、意識的レベルでの存在で、上に向かってという時、それは心の意向であり、心の意識流をあるレベルに、すなわち、更に微細なレベルの波動に、合わせる事を言う。こうしたことから、上に向かってというのは、一種の比喩であり、心の意向なのである——心は、布施、持戒と禅定を学ぶ事を通して、この種の、意識流を調整する能力を育成し、獲得するのである。

我々は、地獄が ” 下にある ” と言うが、それは物理的空間の下方を意味するのではなく、心が、ある種の心霊の目的地にチャンネルを合わせ、チューニングに成功した、ということなのである。これら、天国と地獄を見る能力を持っている人たちは、心の内に存在する機能によって、この事を成し遂げているのである。サマーディの奥義に深く入る事の出来る禅者にとって、心霊の交流は、普段の日常的な経験と何等、変わる所はない。

情報の要点は、意識流の中から生起し、心霊の言語によって、完璧な概念として、伝達され、それを受け取る人は、明晰にその内容を理解することが出来、それはまさに、普通の言語で交流しているのと、同じなのである。一波毎の意念流は、直接心内から出て行き、その時、同時に伝達されるものは、心において、真実に感受した内容や、正確な意味も含まれており、その為、更に一步踏み込んで、その内容を解説する必要がない。日常使われる言語もまた、心の媒介であるが、しかし、心内の真実の感受を表現する事が出来ない上、内容を正確に伝達する事も難しいため、誤解を招きやすい。心と心の直接的な交流においては、このような食い違いは、生じる事がない。

仔細観察你身語意三業、

(子細に己の身口意の三業を観察し)

言行举止要沈穩内斂、

(言行と振る舞いは落ち着いて、内に収斂すべし)

不要説太多話、

(沈黙は金)

也不要給自己添麻煩。

(己を大切に、シンプルに生きる。)

注意自己的語言、

(話す時は細心に)

笑的時候要矜持。

(笑う時にはよく慎んで。)



## ノーックラパ洞

---

長年修行してきて、メーチ・ケーウの禅の成果は、独特の風格と、明確な方向性を得た。毎回の修行において、新しい心霊の領域に入る事もまた、彼女の禅修行の動力を、強めることとなった。彼女は非常に多くの時間をかけて、他の衆生の憂い、悲しみ、苦しみと懊悩について研究したが、しかし、生死の中で、流転して止まない、彼女自身の感情の執着について、顧みて観察する事を怠った。

というのも、禅相は、心の内部の意根の接触により、内部に専注し、観照する事によって知ることができるもので、故に、彼女は禅相の観察を、心と深層心理の働きを探索する事だ、と見做した。彼女は、禅定の時に出現する現象を観察する事によって、心と深層心理の働きの真相を、理解することが出来る、と考えた。

問題は、禅相の中の世界は、人間の世界と同じように真実であり、また、同じ程度に明確ではあるが、しかし、それは結局は、外部世界に属するものに過ぎない、という事であった。これらの現象に実体がなく、触ることができなくても、しかし、本質的には、心が知る所の対象であり、心以外を観照する所の法に、属しているのである。

メーチ・ケーウは、全身全霊で、これらの禅相を探索し、研究したが、それが却って、禅の修行において、彼女がただ外部にある心霊の領域にのみ専注し、己の心の中の、精彩なる内部世界に専注するのを、忘れさせてしまう事になった。

メーチ・ケーウは、修行の内において、このキーポイントである所の問題点を抉り出すことはせず、アチャン・カンパンもまた、十分な智慧が足りなかった為に、メーチ・ケーウの欠点を、指摘する事ができなかった。



もともと、彼の修行もまた、定と神通の範疇から抜け出せておらず、その知見においても、メーチ・ケーウの禅修行の境界に対する、迷妄と執着を突破することは、不可能であった。彼の心の内には、甚深なる定力の支えがあったが、般若の内観、すなわち、智慧の内観に欠けていて、故に、禅の修行における境界の無常・苦・無我の本質を洞察する事ができなかった。

メーチ・ケーウはアチャン・カンパンの指導力を信頼していた為、己に、真なる高明な指導者が必要である事に、気が付かなかった。

メーチ・ケーウは、色々な心霊領域を知る事に、益々夢中になり、興奮を齎す新しい体験と、更なる広範な知識を、貪欲に追求した——この貪欲の汚染は、正に、衆生が輪廻に堕ちこむ心識の世界、流転して止まない原因であった。メーチ・ケーウは、苦及び苦を作り出す真相を、いまだよく理解していなかったのも、たとえアチャン・カンパンが定力を駆使しても、彼女のこの強烈な、定が重く、智慧が軽い傾向から抜け出すのを、支援することができなかった。

故に、メーチ・ケーウは、サマーディの静けさの中に耽溺し、知らず知らずの内に、感官が認識する所の、微妙なエネルギーに沈潜し惑った。メーチ・ケーウは、1937年から1945年まで、阜山にいたが、この期間は日本軍がタイにやって来た時期であり、タイという国を、その地域の安全が悪化する程の、衝突の中に引きこみ、第二次大戦の主要な前線における戦場となした。戦争が勃発し、戦闘機が、彼女たちの住んでいる山の上を飛行して、爆撃の作戦を実行した。戦闘機は帰路、使い残した爆弾を、付近の山に投げ落とし、その後初めて、近くの空軍基地に戻った。

間欠的な、耳をつんざく爆音によって、僧と尼の二衆は、がけ下に逃避したが、ただメーチ・ケーウだけは、一人泰然として、影響を受けなかったし、恐れを知らぬげに、禅の修行を続行した。彼女は、たとえ命を投げ出す事になっても、仏法を追求したい、という願いを立てた。

彼女は、今生において、煩惱から解脱したいと願う人は、修行の途中において死ぬのならば、本望だと思わねばならない事を、知っていた。ある時期、空爆が止まない時があった。修行する女性たちへの影響が大き過ぎて、メーチ・ケーウとその他の何人かの尼僧は、しかたなくノックラパ洞に引越した。彼女たちは、山の中の、折れ曲がった小道を半日程、這うようにして登り、軍事的航路から遠く離れた山の中に来た。ノックラパ洞は、実際には、山の端に隆起した連山の中にある洞穴の群れで、ここでは、各自が、一人に一つずつ、静かな洞穴を選んで、禅の修行をすることができた。

山中の洞に到着した最初の真夜中、メーチ・ケーウが深い定から出て来て、彼女の意識が、外に向かって流れ始めた時、大きな蛇に似た精霊に、出会った。彼女は即刻、それが一匹の龍である事に気が付いた。この種の、心識の形態で存在する衆生は、地下の洞穴か、または洞の下の水脈に住んでいる事が多い。メーチ・ケーウは龍の、随意に外形を変える事のできる能力に、非常に興味を持った。通常、彼らは、人に化身して、出現する。その龍は乱暴に、己が化身した所の、龍の体をメーチ・ケーウに巻きつけて、頭を上げて、彼女の顔に近づけ、軽蔑するような語気で、脅すように言った：太陽が出る前に、すべての尼僧たちを食べてやる。

メーチ・ケーウは、死を恐れない時に発揮する力をよく知っていたので、この巨大な龍の頭を見ても、興奮する事もなく、冷静に警告した。愚かで乱暴な行為の齎す果報について、よく考えるように、と。彼女は、メーチとは、仏世尊——無上正等覚者——の娘である事、彼が侵犯してはならない存在である事を、忠告した。その龍は、己の考えに固執していたが、メーチ・ケーウは、もし、本当にすべての女性たちを食べてしまうと言うのならば、まず私から食べなさい、と挑発した。龍は、即刻、大きな口をパツクリと開けて、彼女を攻撃しようとした。この時、メーチ・ケーウの功德による神秘的な力が顕現されて、その大きな口が燃え始めた。龍は余りの痛さに、大声で哭いた。その龍は、最後には折伏され、化身は礼儀正しい、友好的な、普通の青年の姿に変わり、女性たちが彼の洞に住む事を許可する、と約束した。

龍は調伏されたものの、この異類は、己の気性を治すという事はなく、毎日、あちらに飛んだり、こちらをかすめたり、休む事を知らなかった。また、彼は洞の真ん中にある石の上に座って、笛を吹くのが好きで、その笛の音は、洞全体に響き渡った。しかし、彼が、坐禅しているメーチ・ケーウの側に来ると、笛の音は、なぜか小さくなってしまふ。それは音が、笛の中に詰まって、出てこれないかのようであった。この不思議な出来事に、彼は困惑し、また気落ちした。暫くして、メーチ・ケーウが、己の笛の音を、コントロールしているのかも知れない、と思い始めると、益々不安になり、彼は彼女の神通の威力に対して、益々感服すると同時に、彼女を打ち負かそうという気持ちも、消え失せた。

ある日、メーチ・ケーウは龍が笛を持って、自分の側を通るのを見て、どこへ行くのかと問うた。龍は、彼女をからかうように、村に行つて、村の娘と恋を語り合うつもりだが、今は、メーチ・ケーウといちゃつきたい、と言つた。彼女は少し狼狽し、彼を睨み付けて、自分は持戒の女性行者であり、彼に興味を感じない、と言つた。彼女は、彼に、基本的な道徳を守らねばならない事を訓告し、戒は品德の根本である事を強調し、有情の衆生は誰もが、それを愛惜し、保持しなければならない、と言つた。彼女は、彼

に、道徳の規範は、柵のようなもので、衆生がお互いの物質的な、または心霊的な財産を侵害しないようにするもので、また同時に衆生の内的な価値を保護し、維持するものだ」と説明した。

もし、道徳的な節制がない場合、世界は凌辱と混乱の中にあり、いかなる場所も、平和で静かではありえなくなってしまう。メーチ・ケーウは、また、この年若い龍がこれ以上、道徳を軽視しないよう、仏法に基づいて、悔い改めて、生まれ変わるべきだと、懇ろに忠告した。もし、このような廃退的な心態を、改めることができたならば、己自身も、その他の衆生も、共に安らいで楽しいのだ、とも言った。彼女の話聞いて、龍は喜び、従った。己の過ちを認め、メーチ・ケーウに許しを乞うた。彼の心が感化されたのを見て、メーチ・ケーウは、一步踏み込んで、彼に五戒を守るよう勧めた。

”まず最初に、その他の生命を害してはならない。このようにするのは、あなたが己の憤怒を、どのようにしてコントロールするのかを学び、慈心を育成するためです；次に、許可を得ていない状況の下で、他人の物を盗ってはいけません。偷盗したいという考えを捨て去るのは、貪心を束縛し、占有欲を放棄することで、こうする事によって、あなたは成長する可能性が出てきます；如何なる不当な性的関係もあってはなりません。邪淫を禁止する事は、あなたがあなたの淫欲を降伏する助けになり、知足の態度を養います。

またこれ以外には、嘘を言うてはいけません。どのような時にも、本当の話をするように。このようにすれば、あなたは妄語の習慣を制御することができます。すべての交際相手への、誠実さを大切にしてください；最後は、お酒を飲まない事です。お酒を飲んだ後に乱れる事態を避け、同時に正念を育成します。まず最初に、このことが出来る様になってこそ、一切の戒を守って、不犯でいられます。”基本の五戒を守るよう、龍を説得したメーチ・ケーウは、彼を教え導き、戒を守る以外に、布施と禪定も非常に重要で、この三つの道品は、今生だけでなく、生きては死ぬ、未来の生々世々において、心が頼りにする事のできる基礎であり、また、衆生の今現在の一切は、己自身の過去の行為が招きよせた結果であり、一切の業報は、己一人で受け取らねばならず、身代りになってくれる人はいない、と説明した。

ノックラバ洞の女性たちは、当地の村民が供養してくれる白米とその他の食品に頼る他、彼女たちもまた山菜、芋類、茸などを見つけて食料とし、炊いたご飯と塩漬け魚は、信徒が供養した。これら布施をしてくれる村の女性たちは、忠実な信徒となり、彼女たちの誠意に応える為、メーチ・ケーウは常々、己自身の禅修行の経験を披露し、彼女たちが、道徳的概念を学べるようにした。しかし、彼女が龍を訓服した話が村に伝わ

ると、多くの村民は、不安と恐れを感じた。ここの住民は、長期に亘ってアニミズムの信仰に浸り、極端にタブーを迷信し、誰かの心霊の力が、鬼神より上に来ると、彼らは警戒し、恐れた。

彼らは、この事件を魔術と関連づけて、恐れ、また畏敬した。ノックラパは、森林地帯に属していて、村民は通常、猟をし、山菜を採って暮らしていた。メーチ・ケーウが神通を使った話を聞いて、彼らは、森林に入るのを止めた。そして、その後に、彼女たちを非難する人が、出始めた。当時、普通ではない暴風雨に見舞われ、大雨が降り続き、村の窪地は水浸しになったが、これは洞に住んでいるメーチ・ケーウが、この雨を呼んだのだと、誰かが言い出した。流言飛語が飛び交い、日本軍がこの地域に来たのも、メーチ・ケーウたちのせいにされた。ノックラパ洞は、清らかで静寂幽邃ではあったが、一連の侮辱を受けた為に、メーチ・ケーウは、ここを離れる決意をした。各種の誤解が、修行仲間に多くの迷惑を齎すかもしれないと考えたメーチ・ケーウは、他の女性たちと共に、皐山に帰ることにした。

仮使你忽略培養内在的念和慧、

(もし、内なる念と慧を育成する事を疎かにし)

不肯痛下苦功、

(辛く苦しい修行から逃れるならば)

那麼你修道上的障礙会越積越多、

(修道上の障礙は益々多く積み重なり)

到最後遮蔽所有的出路、

(最後にはすべての出口が塞がれ)

永遠墮入黑暗之途。

(永遠に暗黒に墮ち込む事を免れない)

## 還俗

---

アチャン・カンパンは、修行者の模範であり、皐山寺の大衆の道心を、激発した。彼は、女性たちに、日常的に、修行を指導したが、それは常に、メーチ・ケーウたちと接触する事を意味した。アチャン・カンパンは、集会を開き、女性たちの悩みを聞いて、それぞれの事柄に関して、相応の意見を述べた。彼の年齢と、人格が高潔で、名声高い地位に鑑みて、その他の女性たちと、世俗的感情的な確執は、起きるはずがなかった。しかし、遺憾な事に、人の性（サガ）とはそれほどに脆弱で、道心が誘惑に負けてしまった！メーチ・ケーウたちが、ノックラパ洞に行った後、何人かの尼僧は、皐山に残

った。アチャン・カンパンは、己の指導者である所の身分を無視して、その中の一人に、愛憫の情を起した。彼の深い定は、その他の衆生の状況を観察し、調査する事はできたが、智慧の修行、己の本性を返照することを疎かにした。

彼は仏法の本質を忘れた：己の心身の本質を徹底的に観察する事、それらの無常・苦・無我を徹底的に観察するという修行を怠ったのである。甚深なる禅定の中で、心身は合一して一念になる：心の能知（＝知る能力）の本質は、純粹で単純、不動で静かであった。この一心の境界は、微妙であり、形容しがたい純潔な調和があり、喜悦に満たされる為に、人をその中に惑溺させることがあった。しかし、この禅定の境界がいかに純潔であろうとも、依然として、貪・瞋・痴に汚染されており、この定の境界の本質は、世俗を超越しておらず、故に、その中で得られる知見は、世俗の智慧であり、必然的に汚染が含まれているものであった。

一粒の、サマーディの中にあり、単純で合一した心は、非常に奥深く微妙で、清らかで透徹していて、力がある。ただ、この專注する心を、観の修行に用いてこそ、出世間の智慧を証得することができる。ただ、徹底的に、身、受と心を観察する事においてのみ、貪・瞋・痴を根ごと引き抜くことができる。一切の現象は皆、無常であり、空であるという本質を悟得し、そのことによって執着を断じた時に初めて、生死に流転する輪廻を、打ち破ることができる。禅の修行においては、定と慧は必ず相い補うものでなければならない、それは、牛車の両輪が、同じ目的地に向かって、回るようなものである。定の静けさと專注は、智慧をして、特殊な方便でもって、観を修することを可能にし、微細な煩惱に滲み込み、かつ、それらを逐一、消し去っていく。智慧が、煩惱を消し去った後、定は更に深まる。故に、定と慧は、捻転しながら強化され、仏道において、禅者を覚醒へと導いていく。サマーディの純粹な境界から出て来て、アチャン・カンパンは出入口を抜けて、各種各様の心霊のエネルギーの世界に行き、外に向かって、これらの微細な領域を、專注した。彼は、心の内部にある、透徹した清らかさを利用して專注する事、鋭利な定力でもって、己の実相を観察する事、心身五蘊の執着を観察する事を怠った。彼が解脱智慧によって、荒々しい、俗的な本能を防御することをしなかった為、彼は依然として淫欲にまみれ、無明煩惱の貪染に繫縛されていた。

メーチ・ケーウが、ノックラパ洞から戻った時、アチャン・カンパンとその新参の尼僧との恋愛は、すでに皆の周知される所のものとなっていた。しかし、彼の、団体の中での長老の身分や、またこれまで尊敬されて来た、その名声に鑑み、僧と尼の二衆は、彼の不当な行為を非難するのを、遠慮した。彼らは、倫理に悖る恋愛が、早急に終わりをみて、状況が落ち着くのを待とうと、内々に相談した。故に、アチャン・カンパンが

突然、その尼僧と共に、戒を捨てて還俗する事を決めたと宣告した時、皆は大いに驚愕し、悲しんだ。メーチ・ケーウと他の女性たちは、彼の指導を信じ受けて、実践していたが、今、彼自身がこれらの教えから乖離したのを見て、メーチ・ケーウは深く失望した。

その始まりから今日まで、道場の女性たちは、彼の膝下で、すでに8年近く参学していた。彼の還俗は、寺院に波風を立たせただけでなく、住職の席につく者がいなくなり、尼僧たちは、どこかもっと理想的な場所へ、引っ越さねばならない、と考えた。今、彼女は、指導の責任を負わねばならない立場になった。メーチ・タンとメーチ・インは、尼僧を集めて会議を開き、皆が同じ思いである事を確認した：尼僧たちの目下の急務は、彼女たちの村に帰り、適当な場所を見つけて、女性専用の道場を建てる事。このような意向を抱いて、メーチ・ケーウは他の6人の尼僧たちと、一緒に弁晒村に帰ったが、それは1945年の事であった。村の、名望高い二人の年配者は、彼女たちの、突然陥った困難な境遇に理解を示し、非常に同情して、20エーカーの農地を提供してくれたが、それは村の南方の、おおよそ1マイルほどの所にあった。

この土地は、周囲の稲田より少し高く、長年綿花や大麻、藍などの経済作物を植えるのに、使っていた所であった。農地の中に、大きく乱れた竹藪や、高く聳えた紫檀の樹林があって、外界からの干渉を受けない暗がりを持つ環境を作っていたが、それらは、修行者が安住するのに、都合がよかった。尼僧たちは、彼らの布施を有難く受取り、女性専用の森林道場を作るために、即刻、工事を始めた。弁晒村の人々の助けを借りて、彼女たちは、大木の下に生えた灌木や雑草を取り除いて、とりあえず使うための、茅葺小屋を建てた。寝るためのプラットフォーム、平台は、竹で作った。彼女たちは、まず、竹を裂き、柱にしばりつけて、しっかりと固定し、周囲を竹垣で囲った。プラットフォーム全体は、地面から45cm程離し、長さ1.8m、幅1mほどであった。

屋根は、付近に繁殖している萱を一括りに纏めて、それを順序良く乗せた。一人のメーチに、一軒の茅葺小屋。小屋同士は、できるだけ距離を取った。当地の村民はまた、簡素な茅葺小屋の横に、経行——歩く瞑想をするための小道を整えた。彼らは、一隅の土地を片付けた後、鋸で切り、鉋をかけて、ツルツルにした柱と木の板を、木釘で打ちつけて、基本的な構造物とし、その上に萱をかけて、頑丈な一軒の、小さな仏殿を建てた。その後、その付近に竹と萱を使って、簡単な棚を作り、カマドを設えて台所とした。井戸がなかった為、彼女たちは、毎日、近くの小川まで行って水を汲んだ。

ここでは、日常生活に使う色々な品物が、不足した。斧、鋤、鍬など、ほとんどの物は、村人に借りた。メーチたちは、竹で湯呑や、その他の台所用品を作り、ビンロウの

殻で、簡単な履物を作った。生活条件は非常に悪く、不便ではあったが、メーチたちは貧に安んじ、道を守り、淡々と過ごした。弁晒村の女性専用道場は非常に小さく、村からは距離があった。ここでの修行は、規則が厳格でシンプルであり、生活は異常なほど単純で、素朴であった：昼間は禅の修行をし、夕方には皆で仏殿に行き——殿の中は、なんらの装飾品もなく、快適に過ごす為の備品もなかったが——皆は、堅い木の床に直接座り、偈頌を念誦して、仏法僧の三宝を礼賛した。

メーチ・ケーウは常々、一人の女性修行者の身として、生活の中で出会う困難は、大したことはない・・・高明なる禅師に、禅修行の体験を鑑別してもらえないのが、一番の問題だ、と言った。アチャン・カンパンが、欲愛の淫威の下に屈服したのを見た彼女は、非常に残念に思うと同時に、このことがいつも気がかりで、彼女の心を深く困惑させ、不安にもさせた。彼女は、どうして、禅の修行が、彼のこの野卑で俗なる、本能的な欲望を昇華できなかつたのか、その原因を見つけ出そうと、己自身を追い立てた。彼女自身も、正しい道を歩むのかどうか、疑問であった。なにか修行の、大切なキーポイントを、忘れてはいないだろうか？

これらの問題が、長く彼女の心に引っかかりながらも、なかなか答えを見つけることができなかつた。最後に、彼女は、修行者を指導する事のできる、真正の禅師を探し出したい、と思った。メーチ・ケーウは、朝な夕なに、8年間、共に過ごした道友と別れる事、この建てたばかりの道場を後にする事を、決意した。それは、外部社会に出て、明師を探すという決意であった。道場の責任者である二人の古参の尼僧、メーチ・タンとメーチ・インは、彼女の不安を理解して、彼女の発心に随喜した。雨季の後、メーチ・ケーウは、新参の尼僧と共に出発し、弁晒寺北端の磐山の麓を通過して、小道を伝って北へ向かい、数えきれない程の高山と峡谷を渡り、最後によりやく、磐山山脈の最東端、高い嶺の間に建てられた寺院——アチャン・コンマの森林寺院に到着した。

我們最渴愛最執着的就是這具身体、

（我々が最も渴愛し、最も執着するのは、己の身体であるが）

如此一來就必然要受苦。

（そうであるからこそ、苦を受ける）

看清楚這副臭皮囊！

（見よ、この臭い皮袋！）

它就只不過是刹那刹那生滅、

（それはただ刹那刹那に生滅している）

兩尺寬六尺高的一堆血肉羈了。

（幅二尺、高さ六尺の血肉の塊に過ぎない。）

## 観身の法門

---

寺院に着くと、メーチ・ケーウは大殿で、アチャン・コンマと対面した。礼拝の後、メーチ・ケーウは彼に、これまでの出来事と、この事件がどのようにして、修行環境を破壊し、彼女の定境に影響を与えたのかを話し、同時に、己自身の心内の疑惑と不安を、吐露した。

アチャン・カンパンの還俗問題が起きた後、彼女の禅修行は上手くいかなかったが、彼女はなぜそうなるのか、理解できなかった。

直観によって、アチャン・コンマは、彼女の深くて厚い定力を、外界の境界を追求し、色相（＝物の形）に執着することから、全面的に、己自身を観察することに、転換しなければならない事を知った。以前の教師が、肉欲の捕虜となった事から、彼は、メーチ・ケーウに、己の身体を観察する事から始めるよう、求めた。アチャン・コンマは、彼女に、観身の法門を修行するように勧めたが、それは、頭髪から、体毛、爪、歯、皮膚と始めて、人体にあって、人を悪心させる所の特徴と不浄の性質に専注する、というものであった。

その後、引き続き、内部への観察を続ける。

それは、筋肉、筋・腱、骨、骨髄、腎臓、心臓、肋膜、脾臓、肺臓、小腸、大腸、胃、糞便、胆汁、痰、膿、血液、汗、脂肪、涙、皮脂、唾液、関節液、鼻水と尿であった。彼はメーチ・ケーウに、彼女は必ず、彼女を魅了する所の、外部にある現象に意を注ぐ事を、止めねばならず、その反対に、彼女が執着して、己自身だと見做している所の、色身の内部に向かって、一心に専注して、身体の、色々な部位を、研究するべきだ、と強調した。メーチ・ケーウは恭しく彼の話を聞き、特段、異議を申し立てなかったが、しかし、心内では迷いが生じて、アチャン・コンマの考えに同意することができなかった。彼女に言わせれば、内部に専注することは、すなわち、心が寂静の境界に入るまで反復して、”ブ——ッダ” と誦える事に、他ならなかった。

このやり方は、アチャン・マンがもう随分以前に、教えた方法であった。メーチ・ケーウは頑迷に、修行の方法を変えたくないと思い、また、己はすでに、禅の修行方法を知っているという確信があった為、アチャン・コンマの指示を、真剣に受け止めなかった。効果がこれまで程には良くなく、失望する事があっても、彼女は執拗に、これまで通りの方法で修行を続けた。時間が経つにつれ、彼女の心は、ますます禅定に入りにくくなった。己の修行方法に固執する気持ちによって、何か月間も、彼女は、彼女の心における入定を、妨げられた。



己の禪修行におけるレベルの低下に、メーチ・ケーウは怒り悩んだが、しかし、何をどのようにするべきかは、分からなかった。ある日の夜、彼女は禪を行している時、突然覚醒して、己自身を責め始めた。その時、雨が降り出したが、彼女は敢えて雨を避けないで、一晩中大雨の中で経行し、いつも自分が正しいとする独りよがりな己自身の態度を、思いっきり罰する事によって、己の愚かさで無知を償った。

彼女は何度も、己の誤りを点検し、己の心の頑迷さの理由を探した。アチャン・コンマは、正しい道を指し示してくれたのに、彼女はそれを受け入れなかった。今、彼女は、己の確信が不合理なものであり、必ず糾さねばならないものである、と知った。彼女は自問した：真理を追究するための心が、これほど愚かで無知であるならば、私はどうやって、真理を知ることができるのだろうか？

次の日、メーチ・ケーウは重々しく仏前で礼拝し、真心から己の過ちを懺悔し、心の中でアチャン・コンマに許しを乞い、今後は決して、自分勝手な行動を取らない、と誓った。仏偈を念誦して心を摂めた後、彼女は則に従って、観身の法門の修行を開始した。メーチ・ケーウは、身体の穢れと悪心の特徴を観察した。彼女は先に、生きている人間の身体が、明確に嫌悪され、かつ、倦まれる状況を思惟した；鼻孔には鼻汁がある；耳には耳垢がある；皮膚は汗をかき、油脂を分泌する；身体は大小便を排泄する；その上、もし清潔にしないならば、臭くなって、人に嫌がられる。メーチ・ケーウは、このように持続的に修行する事を通して、理解し、かつ納得するようになった。

己の大部分の不安の源は、身体を生命の存在の核心だと執着すること、また身体を己の存在の最も重要な相であると執着することにある事。この観念は、日常生活の意識の中、また気持ちの中では、余り明確ではないが、しかし、深層の部分と、本能の意識のレベルの根深い所で、その作用を発揮した。この本能は、日常生活すべての場面において、非常に強固な、自我感として顕現した。彼女は、我々が生活する所の数々は、みな、身体的な欲望と関係していて、我々は常に、見かけ、服装、面子、個人の快適さに関心を向けている事を発見した。身体の不浄の本質を観察する事を通して、メーチ・ケーウは身体の穢れと悪心、無常に変化する一面を体験し始め、二度とそれらに誘惑される事はなかった。毎日、かくの如くに修行して、彼女は徐々に、身体に関わる執着を離れ、色身によって生起する強烈な自我感、エゴを軽減した。

禪修行の時、彼女は身体を一片一片、一層一層と分解していった。皮膚を観察してみると、彼女は、非常に薄い組織が、筋肉と内臓の上に覆いかぶさっており、一見したところ清潔そうに見えるものの、子細に検査する所のそれは鱗状で、皺のある皮の層で、

多くの汗と油脂を分泌しており、常時清潔にしていなければ、己も、他人も耐えられない、という事を知った。

頭髮は、櫛で撫で付けば、その全体は美しく見えるけれども、何本かの髪の毛が皿に落ちようものなら、汚くて、うんざりする。頭髮と体毛は非常に不潔で、故に毎日、頭を洗い、身体を洗わねばならない。

実際、身体の部分で、どこかずっと清潔でいられる所はなく、身体全体は本質的には、耐えられない程、不潔なものであった。体臭と汚れで、衣服と蒲団類は、常に洗ったり、交換しなければならない。食べ物でさえも、歯で噛み砕いて唾液と混ざった後は、やはり不潔である。肉体全体の性質はみな同様で、人に嫌悪される。メーチ・ケーウは、身体の外部の穢れを子細に観察した後、更に一步進んで内部の器官と、それらの分泌物、悪臭のする排泄物を観察した。

彼女は頭髮、爪、歯と皮膚を真剣に検査した後、一種の幻滅の感覚が、油然として、湧き出してきた。彼女は注意深く、外部にある皮膚の層を剥き、血と混じりあっている筋肉を、晒し出して観察した所、この白っぽい血肉の組織に対して、吐き気を催した。彼女は己自身に、この風景は真実で誤りがなく、一生涯、彼女に付き従う肉体とは、確かにこのようである、と己に注意を促した。彼女はまた、腱、骨とその他の内臓に深く分け入って見たが、一束一束の腱が、骨に纏わりついた様は、台所の生肉のようであった。彼女は心臓、脾臓、腎臓、脾臓、肺、胃、小腸、大腸も見たが、これらの器官は、繊維質の膜で隔てられながら、胸腔と骨盤の間に、それぞれの場所に、ミチミチと詰め込まれた状態にあった。

メーチ・ケーウは順序良く、感官を一つずつ観想していき、器官が脂肪、血液と粘着性を持つ分泌物の中に包まれているのを観想したが、それは、排泄されるのを待つ、腐臭を放つ物であった。メーチ・ケーウは、己の強大な心の力を利用して、身体内部の組織に深く分け入って、探索した。彼女は初めて、透視的な内観をした時、色身の真正なる本質を見た。透徹した智慧でもって、彼女は以下の事を観察した。すなわち、内観の対象を、身体の各部分に拡大してみた所、各々の部分の本質は、皆同じである事を知ったのである。身体全体は穢れており、悪心されるもので、不断に変化しており、その中には、安らいで楽しい己など、ない事を知った。

この深遠なる覚醒が生起した時、彼女の心は、突然、徹底的な静止の状態の落ち込んだ。彼女の心内の奥深い所で、一つの微弱な光が光を放ち、躍動し、益々光り輝いた。その光は不断に拡大し、最後には、心全体をその中に覆いつくしたが、その為心は光り輝き、清らかで明晰で、軽くて柔軟になった。彼女は明け方出定し、その後、朝にす

るべき仕事に取り掛かったが、一挙手一動足に、微細な協調と融合の感覚が伴い、以前にみられた不自由な感覚とためらい勝ちな心は、消滅した。

彼女は喜びの心で、朝食を僧侶たちに供養したが、アチャン・コンマは、彼女の明らかな変化に気が付き、皆の前で声をかけた：“メーチ・ケーウ、君は正しい道の上に立った。これからも頑張るように！”

禅の修行において、正しい道に戻った後、メーチ・ケーウは、アチャン・コンマのお寺に、何か月も滞在して、この殊勝な因縁によって親しくなった善知識から修行を学び、己の禅定と智慧を、強化した。今、彼女はなぜ、アチャン・カンパンの禅定が、色身の執着から来る所の、粗野で、卑俗な本能の欲望から、自由になれなかったのかを知った。彼女は理解した。淫欲の汚染が、如何に強烈なものであるのかという事と、それをどのように、昇華させればよいのか、という事を。彼女は、己自身の修行が、すでに安定して確立された事を確信し、弁晒村の道場に戻って、道友を支える時が来た、と思った。メーチ・ケーウは、彼女の修行仲間に、正しい道に導いてくれる、頼れる導師がいない事を心配したが、今、己自身がこの責任を負う事ができる、と確信したのである。

身為出家人生活淡泊、

（出家の身、生活は淡泊に）

困苦是免不了的。

（艱難辛苦は当たり前。）

我們一定要耐得住、

（一に忍耐、二に忍耐）

切不可偷懶或抱怨、

（怠けてはならず、恨んではならず）

面對任何情況、

（どのようなことが起きても）

皆以慈悲心対応。

（慈悲心が一番）

## メーチの模範

---

メーチ・ケーウは、弁晒村の女性道場に戻った。ここには理想的な、修行環境があった。彼女が外へ出ていた間に、当地の在家信徒たちが、この出家集団を、村の重要な組織の一部と見做してくれたのである。村民は、仏法が布施と善行を教えるのは、社会が出家者の梵行生活を、護持するためである事を理解した。女性修行者たちは、普泰の村

社会の中で、道徳的な模範となり、それは、大衆が福報を植えるための、真正なる福田となった。

弁晒女性道場は、メーチの理想的な修道生活のモデルを作り出し、解脱を追求する大勢の女性たちが、門を叩いた：この道場の出家の女性たちは、世俗社会を捨て、夫や子や親族と別れ、一切の男女関係を断つことを誓願した。彼女たちは剃髪し、白い三衣を着て、外見を変えて、出家者の相を表した。彼女たちは沙門の生活に打ち込み、通常的一般社会の方式による、生活経営を止め、ただ幾つかの生活用具を保持し、他人の布施に頼って、命を繋いだ。メーチの修行を支える根本は、清浄で荘厳なる戒を基礎とし、それを出家生活と修道の、規範とした。修行の項目すなわち道品は、戒によって支えられている為、仏教の出家者は、非常に持戒を、重視した。戒の真正なる価値は、衆生を流転生死させる業の束縛を切断する事で、持戒は、仏法の修行に基礎を与え、苦果を呼ぶことになる悪業を為さず、心身の清浄を護持し、煩惱から解脱する道筋を示した。戒は同時に、出家者の品格を、清浄で欠点のないものとし、サンガの資質を高め、在家の模範とする事を保証した。

弁晒女性道場では、メーチは、厳格に、基本の 8 戒を守った：不殺生；不偷盗；不淫；不妄語綺語、悪口、両舌；不飲酒；不非時食；不娯楽、装飾品を身につけず、化粧をしない；高くて広い、華美なベッドに寝ない、であった。この八項の簡単な戒は、執着を離れる事、智慧、出世間と節制の生活方式を重視したものである事を、はっきりと謳ったものであった。

前の四つの戒——殺盗淫妄の禁止——は、仏教における出家生活の根本的道徳を言い、その他の戒は、修行における原則であり、それは、心身の清浄の助縁となり、四つの基本的戒を展開したものである。もし、メーチが、四つの基本的戒の精神に基づいて戒清浄を保つならば、その他の戒もまた、容易に守ることができる。また、もし、厳重な罪行に属する、この四つの戒に違反するという事は、すなわち：解脱を追求しながら、その他の生命を傷つけるのは、瞋恚と無知に誤って導かれたものである；許可を得ていないのに盗る行為は、共に梵行を修行している、道友の相互の信頼関係を破壊するもので、また、誠心誠意、出家者に供養をしてくれる信徒たちを、裏切るものである；

不淫の戒を犯す事は、仏教の出家の定義である所の、世俗の家庭生活を出離する——を破るものである。また、これ以外に、淫行の禁止は、己のエネルギーを、心霊を向上・進歩に向かわせる、支えとなる；妄語または綺語は、出家衆の内部、及び僧と信者間の、相互的信頼関係を、破壊する；そして、最も重要なのは、破戒は、己自身の心を、傷つける事である。

真正の戒行の本質は、精緻で微妙で複雑である——それは非常に複雑で、ただ単に、戒の項目と規則だけを守る事で、到達できるものではない。底を割って言えば、戒行は、外部の規則を守る事によって境界線を引くような事柄ではなく、それは、心内の純粋な動機によって展開され、顕現されるものである。仏法修行の主要な目的は、心の中の不善な動機を滅し去ることで、故に、貪・瞋・痴を根こそぎ取り除く修行に成功した時のみ、真正の善を實踐することができる。戒の修行は、重要で不可欠なく一杯であるが、しかし、戒を定に導き向かわせない限り、ただ戒を守るだけでは、目標に到達する事は、できない。誠心誠意、善なる動機を育成すれば、心は軽々と、静けさと清らかさ、明晰さを得ることができる。故に、浄戒を厳重に受け保つ事によって初めて、メーチの心に純潔、清らかで率直な喜悦を、齎す事ができるのである。

弁晒村の女性道場の生活は、静かで素朴で、日常生活のすべての場面において、覚醒、覚知を育成する事を強調した。メーチ・ケーウは、禅修行に精通していたので、新しく入門した女性たちの、修心の法門と、その方向性を指示し、指導する責任を負った。彼女は、自ら身を持って教え、衆を指導した。毎朝3時に起きて、経行を5時まで行い、朝の光が厨房の小道に届くと、彼女は皆と一緒に、その日の食事の準備をした。早朝の空気は、軽い爽やかな線香の香と、朝膳の香に満ちた。煮ておいたおかずの大半は横にとっておき、後ほど、近所の寺院の僧侶に、供養した。

恭しく、食べ物を僧侶たちの鉢に入れた後、メーチたちは粛々と大殿に戻り、皆で静かに食事をした。食事をする前に、彼女たちは、食べ物の本質について思惟を巡らし、食べ物は、ただ単に、彼女たちが修行をするための資糧であり、知足の心がけに依り、何を布施してもらっても、その縁に従った。食事が済むと、女性たちは食器を洗い、厨房を掃除し、その後で、各自の茅葺小屋に戻って、禅の修行をした。

午前中に一食しか食さないため、食後の時間はすべて、己の内部を專注する事に、力を注いだ。朝の仕事を終えると、メーチ・ケーウは、一心に禅の修行をした。彼女は道場の中の、辺鄙な一角に建てられた、己の住まいに戻った。ここには一塊になった竹藪がいくつかあり、その中に柚の木と紫檀の木が混ざっていて、環境は幽玄で、外界から遠く離れ、騒音を聞くことはなかった。木陰の下の土地を、村民が綺麗に整頓して小道にし、道の凹凸を直し、それを経行道——歩く瞑想の道とした。

メーチ・ケーウはここに来ると、経行道をきれいに掃除し、その後経行した。彼女はしっかりと意識を保ち、姿勢を正して道の端に立ち、両手は交差して、腰の際に置き、右の掌を左の掌の上に重ねて軽く握った。目は下に向け、接心して專注し、その後、行きつ戻りつ、行禅——歩く瞑想をした。経行道の端から歩き始め、その端まで行き、

軽やかに体を回し、もう一度、道の端まで歩いた。何度も経行すれば、食後の昏沈を防ぐことができた。

彼女は一步ごとに”ブ——ッダ”と念誦したが、それは毎朝、何時間にも及んだ。彼女は心が、深く”仏陀”に專注して、沈潜するまで経行し、念が念を継いで、流れる様になったとき、歩くテンポが変化し、動作は、安定した念住に合わせて、全身が一体化し、調和がとれた状態で移動できるようになり、地面には空気のクッションが敷いてあるようで、彼女は経行道の上を滑るように歩いた。歩く瞑想をした後、精神は渾発し、気力は満ち満ちた。彼女は、経行道の端にある、葉が茂る、枝振りの良い沙羅の木の下で、作務の始まる午後3時まで、座禅した。

彼女たちは一緒に掃除をし、新しく穿った井戸で水を汲んで、水がめに満たし、その後、森に行って、茸や竹の子など、食べられる山菜を採った。戻るとすでに夕方になっており、シャワーを浴びると、皆は、大殿に集まって、夜の勤行をした。読経が終わると、各自茅葺小屋に戻り、静かで辺鄙な森の中で、引き続き、経行と座禅をした。メーチ・ケーウは何時間も経行し、その後で、小屋に戻って、深夜まで座禅をし、その後ようやく眠った。アチャン・コンマの所から戻って、最初の何か月か、メーチ・ケーウは観身の法門の修行を続けた。しかし、暫くすると、彼女の心は徐々に、過去の習慣が戻り、外界の境界に注意が行くようになり、身念住に專注しなくなった。

観身の法門は、彼女の性格と合わず、その為、彼女は活力に溢れた、猪突する心に従って、自然の勢いに任せるままにした。坐禅して目を閉じるや否や、まるで崖から落ちて行くようで、次に、新しい窓が開いて、彼女は突然、違う世界に入り込み、別の種類の冒険が始まるのだった。

毎個人生下来了就注定会死、

(人は生まれたからには、必ず死なねばならず)

然後再出生、

(その後に、また生まれる)

如此一次又一次在苦海中輪廻不止。

(そして、次から次へと、苦海に輪廻して止まない。)

我們可能早上就死去、

(我々は朝に死ぬかもしれないし)

也可能在晚上死、

(夕べに死ぬかもしれない)

誰也不知道什麼時候、

(その時は誰も知らず)  
唯一可以確定的是時辰到了  
(ただ誰もが避けられないのは)  
死亡就会降臨。  
(時が来れば、死が必ずや、降臨することだ)

## 参学の旅

---

毎年、涼しい季節が過ぎ、太陽が南の空高く昇り、暖かい日が続くと、メーチ・ケーウは何人かの敬虔な尼僧を連れて、アチャン・マンに会う為に、ナコンサコンに行った。今回の出発は、雨季の最後の雨が降ったばかりの時に、マンゴーの木は、たくさんの花を競うように咲かせており、蜜蜂はあちらこちらに、飛び回った。彼女たちは、磐山を越えて、ナコンサコンに向かう為、断続的に続く山道に沿って、ノンナイ区ノッピ村の広大な山岳地帯を抜けたが、この行程は、全部で12日程かかった。

山道を辿る高山は、人がほとんど住んでおらず、供養を受けることが難しいので、彼女たちは食糧を携帯したが、高山の区域を過ぎる頃には、食物は食べ尽くし、その後は、当地の村民の布施に頼った。これらの小さな農村は、それぞれの地方にバラバラに存在していて、お互いが遠く離れていたため、一つの村から一つの村へ行くのに、山道をほぼ一日歩かねばならなかった。贅沢にならないように、重くなり過ぎないようにと考えて、彼女たちは少しばかりの食糧を持って出掛けた：生米は竹の容器に、調味料の辛い魚醤は缶に入れて蜜蝋で封をした。その他には、干し肉と干し魚を持ち、道々、山菜を摘んだ。メーチ・ケーウが引率して、一行は、徒歩で弁道場を出発した。食べ物以外に、皆はリックになにがしかの必需品を背負い、遊行用の傘も持った。これは夜寝る時に、自分を守るために使う。

彼女たちは、山の鋭い石で、足を怪我しないように、手作りの草履を履き、頭には綿の布を乗せて、帽子の代わりにした。最初の日、夜遅く、彼女たちは磐山の麓に着いた。この森林には、熊、虎と蛇が多く出没したが、いくつかの隔絶された開墾地に、人の住んだ跡があるだけで、天候は悪劣で、ころころ変わった。ただ、山の風景は非常に美しく、緑は濃く、竹と紫檀が生えて、地上は、青草、羊歯と野の花で埋まり、どこもかしこも灌木と大木があった。遠くから見ると、山道は木々の頂部に密集して生えた木の葉と、巻きついた藤に覆われ、近くで見ると、すべて雑草と樹林であった。山の中腹には、凸凹した大きな黒岩石が地面から露出し、それが遠くまで伸びていて、山道は岩石

に沿ってくねくねと曲り、時には行き止まりになり、時には大きな亀裂が口を開けていて、経験のない者がここに来れば、必ず道に迷った。

一行は疲れ果てて、小さな村に到着した。当地の貧しい村民は、食べ物とその他の必需品を提供してくれた。その供養の中身はともかく、彼女たちは、感謝と真心でもって、それを受け取った。その後、小川の隅でこっそり沐浴して、旅の汚れを落とし、寝る場所を探して、そこで暫く休んだ。各人はそれぞれ、一本の木を見つけて、遊行用の傘を枝に掛け、傘に垂らした薄い紗の蚊帳を、地面に届くようにし、そこに落ち葉と藁を敷いて、坐禅する場所とした。夜 12 時を過ぎた頃、メーチ・ケーウはアチャン・マンの夢を見た。

彼は厳肅でかつ優しげな目つきで、彼女を見つめ、すこしからかい気味に：“君は、これまで、どこにいたの？ どうして、今になってから来るんだい？ 私は、もう年を取ったのを、知らないのかい？”と言った。彼の声の内に、切迫した感じがある事、また強固な意志をも感じた彼女は、思わず、身体が震えた。翌朝、メーチたちは簡単な朝食を済ませた。だいたい、もち米を蒸して丸めたものに魚醤をつけ、その上に干し肉か干し魚を足したもので、もし手に入れることができれば、芋、瓜、山菜、果物、ジャムなどもあった。彼女たちにとって食べ物は、ただ心身の活力を、夜まで維持するためだけのもの、であった。長時間の行脚において、彼女たちは一歩また一歩、一念にまた一念を継いで、＜今・ここ＞を歩むのであった。

悠久の大地に聳える山々を、二週間近く這い登り、大きな山や深い谷を渡り、休耕田や果樹園を横切り、12 日目の午後、メーチ・ケーウの一行は、アチャン・マンの森林寺院の傍に到着した。彼女たちは、先にノッピ村に入り、村の婦人たちが、賑やかに情熱をこめて、出迎えてくれた上に、彼女たちに沐浴を勧め、埃まみれの衣類を、洗うように言った。少しばかり休憩した後、彼女たちは、最後の旅路に出発した。少し坂になった、くねくねと曲がりくねった道の先に、アチャン・マンの寺院はあった。ここは広く開けた谷間で、周囲は、低く連なる連山、その山々はどこまでも続いていて、端が見えなかった。ここには、頭陀僧が理想とする、辺鄙で静かな環境があり、アチャン・マンのサンガは、谷の後方の上部にある、木々が濃密に茂る、森の中にあった。

山の間には、あちらこちらに建てられた農家が見えた。それは 5、6 軒が一塊になったもので、これらの山岳民は、猟と農業で口を糊していた。メーチ・ケーウが歩いて来た道々で、出会ったのと同じように、多くの頭陀僧は、これらの辺鄙な山奥にいる山岳民の布施・供養によって、色身と命を維持していた。到着すると、メーチ・ケーウたち



は、アチャン・マンが大殿に座って、ビンロウを噛んでいる所に出くわしたが、どうやら彼は、彼女たちの来るのを、そこで待っていたようであった。

皆は急いで履物を脱ぎ、甕から水を汲んで、足を洗い、木の階段を上って、彼に面会した。アチャン・マンは振り向いて、大声で笑いながら、普泰の方言で、熱心に彼女たちに挨拶した。メーチ・ケーウに会った彼は、以前と変わらず、非常に嬉しそうであった。彼女たちは、アチャン・マンの前で、一列になって並び、重々しい動作で、三拝の礼をした。白い三衣が、身体の線に沿って擦れて、サラサラと鳴った。次に、皆は、恭しく隅に寄って、そこに座った。皆の心は歓喜で満ち溢れ、この、人々に尊敬されて止まない尊者を、期待を込めて見つめた。

アチャン・マンは常に、情熱をこめて、かつ行き届いた配慮をして、メーチ・ケーウと彼女の弟子に呼びかけ、また、彼女たちの様子を聞いた後には、彼女たちを励まし、褒めた。その後、彼女たちを寺院の端の暗がりにある竹林に連れて行き、ここで夜を明かすように、言った。彼女たちは、遊行用の傘と枯草でもう一晚過ごすしかなく、翌日、アチャン・マンが、村人が作った、堅い竹のベッドを彼女たちに渡すまで、我慢した。彼は、メーチ・ケーウを、自分の家族同然に見做し、彼女に、ここにいつまでもいてもよいのだ、と言った。毎日の早朝、皆が朝食を済ますと、アチャン・マンは椅子に座って、彼女たちを呼び、その後、仏法を開示した。彼の声は、明瞭で力があり、時には、彼女たちの怠慢を叱り、時には、彼女たちの道心を褒めた。その場は生き生きとして、活気に溢れた。

話合いの時、アチャン・マンは、特にメーチ・ケーウの、禅修行における冒険談、異なる領域の、生命と意識、及びそれらの、奇怪な様相を呈する物語に興味を持った。彼は、それらの経験の真偽を、余り問わなかったが、ただ、優しく彼女に、心眼を自分に向けて、己の内部に專注するよう、勧めた。しかし、メーチ・ケーウは、己の特殊な能力に夢中で、彼女は彼女の体験する、超常的な出来事を、ひけらかしたかった。

アチャン・マンは、三界の導師であった——阿羅漢以外の。すべての——見えるもの、見えないもの；知っているもの、知らないもの——衆生の導師であった。彼はメーチ・ケーウの心が擁している能力を評価したが、同時に、その危険性を憂えた。彼は、他の誰よりも、禅相の危険性と、知識の虚構性を知っていた。清浄心は一切を知っていて、何事にも平等に対応するが、しかし、どの法をも区別することなく、執着もしなかった。

メーチ・ケーウの知見を糺すため、また、心の真正なる微妙さを体験させるため、アチャン・マンは、彼女に、色々な異なる法門を教えた。残念な事に、性格は習慣になり、

習慣は固着する力を有した。何年も前に、アチャン・マンは、元気でやる気のある教師が、メーチ・ケーウを正しい道に導くだろう、と予見した事がある。今となつては、運命が、彼女の開悟の時と、因・縁を決めるしかないのであった。

一年また一年と時は過ぎ、メーチ・ケーウは変化の急流——諸行無常の法則——が、アチャン・マンの色身の上に、降臨したのを見た。彼の心は依然として、ダイヤモンドのような光芒を四方に放っていたが、しかし、彼の身体の老化は速かった。メーチ・ケーウは彼と、心霊上の密接な関係を、保持した。女性専門道場が、アチャン・マンの森林寺院と、如何に多くの高山と深い幽谷に隔てられていても、夜、禅修行していると、メーチ・ケーウはいつも、彼が傍にいるように感じた。彼の威儀は、荘厳で光明に溢れ、病気であるとは思えなかった。メーチ・ケーウが、彼の寺院を辞した、あの乾季の後暫くして、彼は重い病気に罹り、病状は急速に悪化した。彼が夜、彼女に会いに来る目的は、変更された。

彼の声には一種の、強烈な切迫感があり、メーチ・ケーウに、早く私に会いに来るようと、きっぱりと促した。もし、来ないならば、もはや会う機会は、ないのだ、と。彼が死ぬかもしれないと考えると、メーチ・ケーウは、震え上がった。彼女は当然、世間の本質——生の本質；死の本質——及びそれらの不確定性を知ってはいたものの、しかし、彼女は、この件に関しては、躊躇して決める事ができず、ズルズルと時間だけが過ぎて行った。

何度も何度も、禅相の中で、アチャン・マンは、彼女にすぐに会いに来るようにと警告した。しかし、彼女は心の中で、彼が健康を取り戻す事を願い、彼の病状が重くて、死んでしまう等という事を、受け入れることができなかった；もしかしたら、彼女が一心に修行した為、彼が自分を観察しに来ているのかも知れない、とも思ったし；また、彼女の怠惰から出たことかもしれないが；どのような理由なのかは兎も角、彼女は遅々として、アチャン・マンに会いに行く事をしなかった。時々、彼女は尼僧たちに、もう一度長旅をしなければならないと訴えることはあつたが、出立の日にちを、決めることはなかった。その結果、何度も何度も、警告を受けていたにも関わらず、アチャン・マンが逝去したその日、メーチ・ケーウは、弁晒村にいた。

その日、メーチ・ケーウは、黄昏時には、すでに座席に座って、瞑想していた。夜の12時になって、心が、深くて繊細な静止状態になった時、突然、アチャン・マンの、光を放つ身体が、これが最後とばかりに、顕現した。彼の顔と身体は、光で輝き、口調はいつもと違って厳しく、しかし、それは真実に直接的で、彼女の定の境地を、打ち砕いた。彼は、青天の霹靂のように、彼女の無頓着を詰った。彼は、清らかな悲心から、

まるで自分の娘のように彼女を愛護し、再三再四、彼女に最後の面会に来るように促したのに、今となっては、すべてが手遅れになった。

彼はもうすぐ般涅槃する。永遠にこの世間から離れる。彼女が今すぐ、彼に会いに行ったとしても、ただ物言わぬ遺体を目にするだけで、彼女が来たことを、もう、知ることができない。無頓着、怠惰・・・こうして最後のチャンスは、失われた。

”メー・ケーウ、汚染された感情に、コントロールされるな。これらの汚染された感情は、無量劫、生死流転する源である。決して、煩惱には害がなく、心の痛痒と関係がない、などと考えるはいけない。ただ、勇猛果敢で、かつ揺るがない心だけが、煩惱の手口を、打ち負かす事ができる。メー・ケーウ、内にむけて観察せよ。仏法を、あなたの導きとしなさい。”

”地水火風であろうとも、天空大地；山林樹木；天国と地獄または餓鬼であろうとも；これらは皆、道でもなく、果でもなく、涅槃でもない。あなたは、この中から、決して、真理を発見することはできない。この中に真理を見つけようと、してはならない。それらは、それら自身の範疇においては、真理に合致するが、しかし、それは決して、あなたが追求すべき真理ではない。これらの物事に沈潜する事は、あなたをして、終わりのない悪循環に、巻き込ませることになる。もう、同じ所を、グルグル回るのを、止めなさい。内に向かって、己自身を観察せよ。真正の仏法は、ただ心の中で生起し、ただ心の中で、光を放つ。それはちょうど、雲のない晴れた空の上の、満月のように、清らかで、明るい。”

明け方まで、まだ時間があつた。メーチ・ケーウは、サマーディから出て来ると、冷たい汗が、彼女の白い三衣を、びっしょりと濡らしていた。彼女は非常に疲れ、失意のどん底にあり、胸が刺されるように、痛かった。師を失った。彼女の誇り、彼女の支え・・・彼女は、急に、心がバラバラになったように、感じた。彼女は横になったが、心は乱麻のようであり、まったく眠れなかった。嗚咽をもらし、彼女は深く息を吸って、己の悲痛を和らげた。

朝の曙光を見ると、彼女はすばやく心身を撰し、寒風の中を、仏殿まで行って、皆に会った。彼女は話し始めると、目から、涙が零れた。涙は、一粒一粒、アチャン・マンが最後に示した事績——彼の姿、彼の警告、彼の教え、彼の逝去——と共に、頬を流れ落ちた。皆は、メーチ・ケーウの予知能力を深く信じていて、これまで疑った事がなかったが、この訃報だけは、受け入れがたかった。メーチ・ケーウが話し終わると、皆は集まって、一塊になった。

この時、村長が突然やってきて、仏殿の階段に飛び乗り、一気に訊ねた：“メーチ！メーチ！あなた方は、知っていますか？何か聞いていませんか？”彼は深く息を吸うと、ゆっくりと吐き、声を低めて言った：“昨夜、アチャン・マンが、サコンナコンで、入滅された。私はさっき、何分か前、ラジオでそれを聞いたのだ。彼らが言うには、朝の2時半に、逝去されたそうだ”

皆はそれを聞くと、耐えきれずに、声を放って泣いた。村長はそれを見て、狼狽え：“すまない……。私はただ、情報を持って来ただけで……。”と言った。

アチャン・マンは、1949年11月10日に、逝去した。その二日前、メーチ・ケーウは、48歳の誕生日を迎えたばかりだった。葬礼は、1月の末に行われる事になり、その前に、メーチ・ケーウは、一度サコンナコンに行って、喪に服した。彼女は、アチャン・マンの棺の前に跪いた。アチャン・マンの棺は木製で、蓋は、ガラスで出来ていた。彼女は、冷たくなった遺体を見つめ続け、後悔が止まなかった。彼女は己の過失を、心の中で黙々と、アチャン・マンに詫びた：“大徳、どうか許して下さい……。”その後、誓った：“これからは決して、無頓着であったり、怠けたり、懊悩したりしません。”

茶毘の日が来ると、メーチ・ケーウとその他の尼僧は、もう一度サコンナコンに向かった。彼女たちが到着した時、ちょうど僧たちが厳粛に、寺院のあずま屋から、アチャン・マンの棺を担いで、火葬場に向かう所であった。棺が前を通る時、メーチ・ケーウは、送別に来た多くの人々と共に、はらはらと、涙を零した。彼はすでに寂滅し、清浄なる涅槃の境に入った。永遠に、二度と、色身の存在に、戻ることはない——この涙と悲しみの溢れる地に。真夜中に、茶毘の火がつけられた。彼女はずっとそこにいて、その全部を見ながら、茫然自失した。ただ、一つだけはっきりしていたのは、彼が、月の光の下で、ひとひらの小さな雲に化身し、猛然と燃え上がる薪の上に、軟らかい雨の糸を降らした事であった。



### 第三章 聖道への歩み

---

有智慧的人看到自身的固執、

(智慧ある人は、己の固執に気が付くと)

認出那是固執；

(それは固執であると認める)

看到陰暗、認出陰暗；

(心の闇に気が付くと、それは闇であると認める)

看到愚痴、他們同様に認得出来。

(愚かた無知に気が付くと、愚かた無知であると認める)

他們只看自己的過錯、

(彼らはただ、己の過失を見て)

不去怪罪別人。

(他人の過失は見ない)

### 修道因縁の変化

---

今、メーチ・ケーウは、ただひたすら、努力した。座禅の前には、彼女は必ず、注意力を内側へと向かわせて專注し、そこに留まり、注意力が心の中に、定まるようにと、祈願した。しかし、メーチ・ケーウの言う所の、内なる專注とは、心が自由に、下に向かって、落ちて行く事を意味した。彼女は目を閉じると、座っている所の下部、その底が開いたように感じ、己は崖から、または井戸から落ちて行き、一つの空間に、入りこむような気がした。その過程において、いくつかの瞬間に、異なる映像の断片がフラッシュするが、その後においては、徹底的な静止、安らぎ、満足・・・があった。が、しかし、この静止の中には、反作用的な動力が隠されていて、即刻、メーチ・ケーウの意識流を、その直前に見た所の、映像の境界の中に、押し戻した。

暫くの間、心の流動的な空間にとどまると、メーチ・ケーウは、己の家に戻ったような、感覚を持った。彼女はすでに、どのようにすれば、容易にこの神秘的な通路を、行き来することができるかを知っていた。一瞬の知覚、ある種の存在、感情、何かの神識・・・、そうして、彼女はまた別の世界に入り、各種各様の、有情の領域に、遊んだ。

真理を追究したいという欲望は、彼女をして、輪廻の中の、最も高等な、最も深いレベルの生命を、観察せしめた。長期的な観察を通して、彼女は、各種の天界の衆生を見、彼らがお互いに交流する方式、習慣、風俗と信仰を、理解した。彼女は心神——精神を

集中し、天眼を利用して、心霊の領域を探索し、どれかの智慧または靈感が、彼女が仏法の真諦を領悟するのを、助けてくれるのではないかと思い、それらを探し求めた。

もう一度再び、彼女は、己の心識を外界に関わらせるという、その習性の内に、戻って行った。メーチ・ケーウが必死に努力しているその時、彼女は、アチャン・マンの近い弟子が、まさに仏法の証悟における、最後の段階に入っている事を知らなかったし、また、彼ら二人は、修道の因縁によって、もうすぐに出会うのだという事も、知らなかった。アチャン・マンの葬礼に出席した後、アチャン・マハブーフは、磐山に行った。山の中をあらゆる方向に歩き回った後、彼はダンマチェディ寺院に来た。ここはアチャン・コンマの僧院で、何年か前、メーチ・ケーウが、己の執拗な性格が災いして、ここで非常な苦勞をした、その場所であった。

完璧なる心霊の戦士として、アチャン・マハブーフは、心内の煩悩を、不倶戴天の敵と見做して攻撃し、煩悩が徹底的に降伏されるまで、手をゆるめなかった。長年来、彼の修行は、生死を賭けた戦場と化し、一回毎の座禅では徒手空拳で立ち向かい、毎回の経行——歩く瞑想は、どちらが負けて死ぬのかと、命を賭けた。彼は全く同情の余地なく、一つの言い訳も許さず、心内の敵を、一つまた一つと潰して行った。彼は休みなく攻撃し、煩悩が隠れている所の根源を探し、彼は一回また一回と、最も明らかな煩悩——歩兵——から、更に微細で、狡猾な精鋭部隊に至るまでを、攻撃した。

これら微細な煩悩は、彼らを保護する所の神出鬼没なる首脳——心性を覆う所の根本無明——に守られていた。貪と瞋を駆動する根本無明は、長らく、狡猾に、心の幽玄なる深い所に、隠れている。無明は、三界の輪廻の統治者として、強烈な煩悩の大群を、死んでも守ると、誓っているようであった。心が、無明の苦しみから抜け出す為には、先に、これら煩悩の力を、解除しなければならない。すなわち、それらの迷い惑う心の力を、無きものにするのである。

アチャン・マハブーフは、心内の根本無明の保塁を攻撃し、無明の内にある、司令部を包囲するために、念と慧を運用して、相手を遁走させる事のできる軍隊を、組織した。彼は念でもって、煩悩からの防衛とし、慧でもって、それらの力を無化した。彼の軍隊は、組織的に、敵の要塞に肉薄した。心内の煩悩がすべて消滅した時、最後に残ったのは、それらの総司令——生死輪廻を創造し、繰り返し延長させる所の、最も深層にある、無明である。この時、彼は最後の攻撃を、発動した。それは、どのような強固な陣地であっても、必ずや攻め落とす事のできる、光り輝く稲妻のような攻撃で、無明の最後の一滴を、余すところなく殲滅し、徹底的に、輪廻の摩天楼を、叩き潰した。

その後に残った心は、徹底的に清らかで、一切の煩悩の本質から、解脱したのであった。ここに、また一人の、円満覚醒した阿羅漢が、世に出現したのである！同じ年、雨季の期間、落ち着いた様子で修行を終えたメーチ・ケーウは、禅修行の中で、一つの予兆を捉えた：月と、月の周りの星々が、天から墮ちてきたのである。彼女は、この禅相の意味を、一人の不出世の禅師と、彼の多くの利根の弟子が、もうすぐ弁晒村に来る、と解釈した。彼女は、ひどく興奮した。当然のように、彼女は、この予兆は、アチャン・マンが以前予言した禅師に違いない、と思った。

メーチ・ケーウは自信ありげに、その他の尼僧に宣言した。来年、ある一人の偉大な禅師が、一群の頭陀僧を連れて、弁晒村に来る。彼女は、誰が来るのか、その時点では分からなかったが、禅相の中に、極めて確実な予兆を見たのは、疑いがなかった。彼女は、この禅師の到来を、以前アチャン・マンと一群の比丘が弁晒村に来たのと、同じだと考えた。その時、彼女はまだ、小さな女の子ではあったが。その後の何か月か、彼女の予測通り、幾人もの頭陀僧がやって来ては、去って行った。メーチ・ケーウは期待を込めて、彼らが足を止めている森に挨拶に行き、彼らを接待したが、しかし、毎回、彼女は失望を抱えて、戻った。これらの遊行僧が、予兆の人物ではない事だけは、確実であった。

1951年1月、アチャン・マハブーワは、一群の頭陀僧を連れて、磐山から遊行しながら下りて来て、弁晒村北部の山の麓にある、緑濃い森林の中に、足を止めた。各自各々は、頭陀僧の伝統に従って、淡泊な修行生活を送るために、木の下、山の洞穴、頂、がけの下などに、遊行用の傘を掛けて、住まいとした。アチャン・マハブーワと、彼の侍者として、一人の沙弥、サマーネンが、同じノックアン洞に住んだ。ノックアン洞は、山頂の地勢が平になった所の片側にあり、村から一マイルほどの距離であった。それは長方形の、幅がある広い洞で、突出した一つの崖の、傍にあった。入口には、平らな石が敷き詰められていて、外に向かって伸びていた。ここは、空気の流れが良く、涼しく、環境全体は、幽玄で静かであった。

アチャン・マハブーワの到来を知って、メーチ・ケーウは幾人かの尼僧と共に、くねくねと曲がった坂を登って、彼に会いに行った。その高地の頂は、地面から露出した黒岩石でできており、波状の地勢は、洞の入口まで伸びていた。到着して、メーチ・ケーウが、アチャン・マハブーワが洞の出入口にある、平坦な大きな石の上に座っているのを見るや否や、彼女の心は喜びに溢れ、振り返って嬉しそうに、低い声で言った：“彼よ！私があなた方に教えた、あの禅師よ！”彼女たちは、心身を撰め、恭しくアチャン・マハブーワの元に歩み寄り、彼の前で跪いて、重々しく、三拝した。

お互いに挨拶した後、メーチ・ケーウは、随分前、彼女が子供だった頃に、アチャン・マンに会ったことがあり、アチャン・マンがどのように禅の修行を指導したか、また、彼がここを離れる時に、どのように、彼女の修行を禁止したのか、を述懐し、また、アチャン・マンに対する尊敬から、彼女は長年禅の修行をしておらず、出家して後、改めて真剣に努力しているのだ、と伝えた。

アチャン・マンの近い弟子として、アチャン・マハブーワは困惑を感じた。どうして、彼女の修行を、禁止する必要があったのだろうか？メーチ・ケーウが色々な禅相について話すのを聞いた時、彼はすぐに、原因を察した。この時、メーチ・ケーウは、各種の神秘的な境界に深々と沈潜して、早 10 年が経っていた。彼女は、禅相が見えなければ、それは修行ではないとっていて、彼女はこの境界の中に惑溺し、この方向こそが、涅槃であり、煩惱から解脱する正道だ、と信じていた。

アチャン・マハブーワは、すぐに、問題の所在に気が付いた。高明な禅師が、この種の、忘我の熱狂的行為を制止しなければ、猛進的で、強くて力のある心は、彼女をして、これらの境界に関する解釈を、誤らせることになり、最後には、迷路に嵌ってしまう。彼は知っていた。メーチ・ケーウのような、心の力がこれほど強い人は、一たび、どのようにして、正確に、心を修めるのかを学んだならば、非常に速く、仏法の成就を得ることが、できる事を。彼は、メーチ・ケーウは、アチャン・マンとよく似ていて、この非凡な能力を、善く巧みに熟練させて運用するならば、己自身と他者の、煩惱からの解脱の、多いなる助けに、なるであろう事を思った。この時から、メーチ・ケーウは、よく山に登ってアチャン・マハブーワに会いに行った。

齋戒の日の夕方、アチャン・マハブーワに礼拝し、その後、彼の、道心に関する励ましの開示を聞くために、彼女は、弁晒村の尼僧たちと一緒に、曲がりくねった山道を登った。開示が終わると、彼は、彼女たちの、禅修行についての様子を訊ねた。毎回、メーチ・ケーウの番になると、彼女はただひたすら、あれら超常的な体験と、自分が出会ったことのある、亡霊や神識の話ばかりした。天界と地獄を漫遊した豊富な体験を通して、自らの目で、異なる色々な衆生を見たことから、彼女は、各種の亡霊の心境や生活の状況、それらがそこに生まれざるを得なかった業などについて、詳しく述べた。

非常に明らかに、メーチ・ケーウは、これら異界と特殊な知識の中に耽溺しており、アチャン・マハブーワは、心配になった。彼は、彼女の神通の能力に驚くと共に、しかし同時に、彼女は、いまだ己の心を御する能力に欠けており、禅の修行において、副作用・傷害が出ないという保証は、なかった。彼は彼女に、安定的に、己自身の心身に専注することを学ぶべきで、外部世界の境界に、注意を払ってはならないと、警告した。



ただ、覚知を、己の内部に、安定的に專注させる時にのみ、煩惱の障礙を解消する事ができ、その時初めて、禪の修行は、更に一步、前進することができる。アチャン・マハブーワは、彼女に、禪修行の最初の目標は、正しい定を育成する事だ、と教えた。

彼女は、禪修行の時、知覚的な念——想いとイメージの中に入り込み、それらの内容に專注する事が、習慣になってしまっていた。この行為は、彼女の心に限界を齎した。正しく定を修習する為には、彼女は、これらの愚かな迷いを捨てなければならず、二度と、想いとイメージに專注しないようにして、受け入れる必要のない限界から、脱皮しなければならなかった。正確な禪修行を通して、心の能知（＝知る能力）の本質を直接体験することによって、彼女は、心身の現象を、客観的に点検することができる。心の能知の核心は、イメージや考えや感受を認知したりするより尚、広大な覚知であり、それは一つの、障礙のない内部空間であり、一切を包摂していながら、しかし、また何者をも、留保しなかった。

この心霊の覚醒の力は、ひとたび育成することが出来たならば、何度も繰り返して復活し、無限に深化することができた。この関門を突破する前、分心して、外部を專注することは、修行者の、禪修行の最初の目標：覚知の根源に至る事——に到達するのを、妨げる。出会って初めの頃、アチャン・マハブーワは、静かに、メーチ・ケーウの述べる神秘で奇怪な体験を聞きながら、細心の注意を払って、彼女の心のエネルギーのレベルを推し量り、その後、穏やかに、彼女に、知覚の意識流を、己の内部の根源に向かわせるように、と言った。彼は、再度、意識は心の作用であり、心の本性ではない事、彼女は、必ず、意識と、意識が齎す有限の知覚を捨てて、心をして、真正なる本性を輝かせしめなければならない、と重ねて言った。

何週間かの後、アチャン・マハブーワは、彼女が指導を聞き入れない事に、気が付いた。その為、アチャン・マハブーワは、禪修行の時に、いか程かの時間、心を完全に内に向けて、專注するようにと、きっぱりと、告げた。彼女はこれまで通り、時々、覚知を外部にある現象に向けてもよいが、しかし、その他の時間においては、覚知が内部に留まるのを、強制しなければならない、と言った。彼は彼女に、己の心を制御する事を学ぶよう促したが、それは、意識流を随意に、内部また外部へと導く事ができるように、なるためであった。禪相が、心の内部に存在する、意根に接触する事から、メーチ・ケーウは、これこそが、己の心の探究である、と思いなした。

彼女は、定の中で生起する現象を観察することは、これらの現象を認識する所の意識を、理解することができ、その行為により、実相を洞察することができる、と確信していた。故に、彼女は己の見解に固執し、修行の方法を変更することを嫌がり、公然と、

アチャン・マハブーワの教えに、真っ向から抵抗し始め、彼女の禅修行の方法は、すでに深い知見を齎しており、変更する理由がないと、態度で表した。

アチャン・マハブーワは、忍耐強く説明した。彼女が見ているのは、宇宙に、自然に存在しているものであって、通常、肉眼でみているものと、大して変わりはない。禅相の中に顕現する世界は、人間世界と同じように、真実で明らかであるけれども、しかし、認知の知覚から言えば、これらは、皆、外部に属しており、物質のようには、明らかな形態を持たないものの、それらを知りえる知覚とは、隔たりがある。最も重要なのは、観察者の立場から言えば、物質的な対象と、心霊的な対象は、なんら差異はなく、すべては、外部世界のものである、という点であった。

彼は、メーチ・ケーウに、注意力を向ける方向を転換させて、外に向かって流れる意識を止めて、それを内に向けわせる事、心の本性——知覚の源流——に覚醒することを勧めた。メーチ・ケーウは、反対し続けた：天眼で見える特殊で微妙なもの、それは、肉眼でみるものとは異なる。天眼は、各種の亡霊の魂や、神識を見ることができる。天界のすべての天人と交流することができる。過去世の因と縁を見ることができ、未来を正確に見ることもできる。彼女は、これらの知見は、通常の感官の認知を超越している、と言い張った。

アチャン・マハブーワは、彼女の頑なで、無知なる様に、これ以上耐えきれず、以前の作風を変えて、彼女に、心が外へ向かって、外部の境界を探索しないように、強く要求した。というのも、このまま、覚知の間違った使いかたをしていては、彼女にとって、生老病死の根源を断ち切ることの、利益にならないが故に。彼は、メーチ・ケーウに、このように指導するのは、彼女の為であると言い、その後、彼女に必ず、己の指示を守るようにと、厳しく指導した。

メーチ・ケーウは、己の知識と理解に十二分の確信を持っていた為、アチャン・マハブーワがどのように警告しようとも、彼女の禅修行は旧態依然として変わらず、彼女は、アチャン・マハブーワと、禅法の真正なる意義について、論争した。今度ばかりは、アチャン・マハブーワも徹底的に怒り、この、言うことを聞かない生徒を、受け入れる事など、出来ないと思った。彼は立腹し、獰猛な語気と表情で、彼女にこれ以上、覚知を外部に向けてはならないと叱り、彼女に対して、直接注意力を反対側に転換して、内へ向けて專注するように、歯に衣を着せぬ言い方で、命令した。

彼は、全くの妥協の余地なく、彼女に言った。この様に努力して修行する以外に、汚染された煩惱を消去することはできない、のだと。ある日の夜、メーチ・ケーウがまた

もや、己に固執して、自己弁護している時、アチャン・マハブーワは、彼女の言葉を遮り、今すぐここを去るように、と言った。彼は、まったく一筋の躊躇も見せず、彼女に今すぐ出ていくように、今後、二度とここへ戻ってくる必要はないと言ひ、他の尼僧の面前で、粗野で耳に障るような言葉で、彼女を追い出した。メーチ・ケーウは、アチャン・マハブーワがこれほど下品な言葉を使うことに驚いたし、また、彼女はこれまで、このような事が起こるなどと考えたこともなかった。彼女は洞を出て、泣きながら道場に戻ったが、道々、己を責める厳しい言葉が、耳の中で木魂し、徹底的に人格が崩れ去ったようで、彼への信頼も悉く尽き果て、もう二度と彼には会わないと思った。

メーチ・ケーウは、これまでのすべてが無駄になったようで、重い足取りで、坂になった山道を降りて行った。彼女が初めてアチャン・マハブーワに会った時、彼女は己の直観から、彼こそは、依止できる禅師であると思ったが、今や、彼は、情け容赦もなく、彼女を追い出した。これから誰に、禅修行の指導をしてもらえばいいのか？これほど長い間、四方八方に探し求め、今、願いが叶い、これほど理想的な禅師を見つけることができたというのに、参学の結果は、余りにも惨めなものであった。今、メーチ・ケーウの目の前には、ただ暗闇しかなく、どうしていいか、分からなかった。

当你的心対自性的領悟彷彿繁花般盛放、  
（錦の花々が、満を持して咲き誇るように、  
あなたの心に、自性に対する領悟が得られる時）  
那漫長無際的苦惱之尽頭、  
（長く、際限のない苦惱の尽きる果てが）  
将慢慢出現在眼前。（ゆっくりと姿を現す）

## 法の予兆

---

メーチ・ケーウは、薄暗い夕暮れの景色の中を、重い足取りで、道場の入口まで歩いて来て、そのまま、自分の茅葺小屋に入った。彼女は一人で、この日の、痛恨の出来事を、よく考えてみたかった。今まで、よく知っていると思っていた住処は、突然、見知らぬものようになり、自分は、偶然ここに迷い込んだ、異邦人のようであった。彼女の心は心配事で一杯になり、色々と考えあぐねている間に、夜は、こっそりと近づいて来た。空の上の月と星は、昨日より暗く、その数も少なかった。彼女の自信は、大いに打撃を受けて、失意の余り、何をどうしていいのか、分からなかった。

心内には、一種の焦りが感じられ、何かが変わらなければならない、という気がした。困難を目の前にして、メーチ・ケーウは、アチャン・マハブーワが己を追い出したのは、正当な理由がある、と思いついた：自分は、故意に、彼の指導を受け入れなかったし、何等の変革も、望まなかった。徹底的に反省すればするほど、己の傲慢が、事件全体の起因であるという事が、はっきりと見えてきた。アチャン・マハブーワは、彼女の禅法を認めず、彼女に方向転換するように指示したが、当然、彼には彼なりの、理由があったのに違いない。それなのに、なぜ、私は、受け入れなかったのか？彼女は、自我の放縦の中に耽溺し、彼の教えを受け入れず、その結果、得る所は、何一つも無かった。

もし、彼の言う通りに、修行していたら？彼女は少なくとも、言われた通りに、試すことはできた。執拗に拒絶したのは、なぜなのか？己の過失を明らかに知った今、彼女は己を責めた：私は彼を師として崇めたのだから、彼の教えに従うべきだった。彼の言う通りに試してみれば、彼の教えが正しいかどうか、分かったに違いない。朝が来て、疑心は徐々に晴れていき、彼女は、心を入れ替える事を決意し、己の心に対して、教えを受け入れる様に迫り、その結果が、どのようなものであっても、甘んじて受け入れよう、と思った。

一日置いた日の早朝、メーチ・ケーウは朝食が済むと、作務を免除してもらい、即刻、茅葺小屋に戻って、急ぎ、座禅した。己の覚知をしっかりと、心身の範囲内に結び付けるよう、己に要求した。彼女は、心が外に、それが外部の現象であろうが、その他のものであろうが・・・向かうのを阻止する事を、決意した。彼女は長い間何度も、亡霊、天人、各種の心霊の領域の衆生の間を往復したので、これらの境界は、彼女にとっては、すでに殊勝な意味を失っていた。

毎回の禅修行の時、すこしばかり注意力を集中して外に向けると、彼女はいつも、この種の衆生を見ることができた。彼女がこれらの衆生を見るのは、普通の人が、肉眼で物を見るのと同じように、簡単であったが、しかし、この能力は、これまで一度も、彼女に如何なる真正な利益も齎したことはなく、あれら汚染された心の煩悩は、髪の毛一筋程も減少することはなかった。ただ、内に向かって專注し、注意深く、意識の活動を観察した場合にだけ、心の汚染を見ることができ、それらの影響を、取り除くことができるのである。

今回、彼女は完全にこの原則を守り、一心に ”ブ——ッダ” と念ずることに、專注した。念じ念じて、妄想が無くなると、意識流が心中の一点に集まって来た。先ほど誓ったばかりの、誓願の強力な力によって、彼女は、覚知から身体が消失するまで、一点に專注し、その後、心は完全に静止して、動かなくなった。深い定からすこしばかり出

て来ると、彼女は即刻、一つの禪相を見たが、それは仏法の兆しであった。彼女は心眼を開けると、アチャン・マハブーワが鋭利な刃物を持って、彼女に近づいてくるのが見えた。彼は、彼女に刃先を向けると、今から、正確な観身の方法を教える、と宣言した。次に、彼は、彼女の身体を、条理整然と一片づつに切断した。彼は、鋭利な刃物でもって、一刀一刀、肉体を解剖し、どんどん細かく切っていった。メーチ・ケーウは、目を見開いて、己の身体が分解されて、地面に落ちていくのを見て、驚いて茫然となった。彼女は、アチャン・マハブーワが更に、各部分を細かく切り刻むのを見ていたが、最後に、地面が、肉と骨と筋で一杯になった。

彼は、メーチ・ケーウの内なる覚知に問うた：“これのどの一片が人間か？一片一片、手に取ってごらん。どの一片が女性か？どの一片が男性か？どの一片が魅力的か？どの一片が美しいか？”

この時、彼女の眼前には、血と肉が、乱雑に取り散らかり、悪心がした。思えば、己は、長い間、それらを捉まえて放さなかったが、今この時に、非常に、気持ちが悪く感じられた。彼女は引き続き、四方八方に散乱した残骸を見ていたが、最後には、何も残らなかった。ちょうどこの時、彼女の心は、内部へと戻って行き、意識は明確に内側に向かって流れ、サマーディの根本へと戻って行った。そして、メーチ・ケーウという存在の中心へと集まり、後に残されたのは、単純で調和のとれた覚知の存在のみであった。能知（＝知るもの、知る能力）の核心は、精緻で微妙で、描写するのが難しく、それはただこのように知られる——心霊の奥深い所に漲る、内在的覚知である、と。

メーチ・ケーウは、注意力を己の内部に向け、意識の正常な流動を停止し、心の真正なる核心——覚知の根源——に証入するように、と決意した。みぞおちの真ん中あたりに、彼女は玄妙で、広くて果てしのない空間——覚知の、微妙で無形なる本性を、体験した。彼女が、己の内部に向けて專注した時、突然、專注する事を忘れ、全きの静けさの中に入った。そこは一念さえも生じず、一切は、空寂であった。心身が大いなる自然の状態にあり、すべての対象・・・彼女の身体を含めて、そのすべてが影形、跡形もなく、消え失せてしまった。

彼女の心だけが、この純然とした静止の境界の中で、何時間も安住しつづけたのである。彼女の心が、深い定から出て来るや否や、意識の微細なる波動——最初は全く察知され得なかった——が、心の核心から外部に流れ出し始め、中心から離れた。この意識の勢いが増したとき、彼女は、心をして外部に注意するように、外部の認知に向かうように駆動せしめる、一種力のある、かつ緊迫した督促を察知した。

この慣性・習慣は、彼女の性格から来ていたが、以前には、全く気が付いていなかった。今、心の根本・・・寂静・清明・明晰に処していた為に、この外へ流れようとする意識が、突然、明確に感じ取れたのである。彼女は、この外へ流れ出ようとする勢力に迫られて、それに抵抗した。この、習慣となってしまうていた、己の意識流を逆転させて、覚知を安定的に、心中において、保持しようとしたのである。彼女は、アチャン・マハブーワを、彼の厳しい警告を思い出し、アチャン・マハブーワが正しかった事を認めた。かくて、彼女は、改めて心の力を高め、離れ去ろうとしている心の勢いを、正しいレールに引き戻した。

その後の何日か、メーチ・ケーウは、覚知を安定的に、己の内部に留めておけるよう、有効な方法を探し求めた。最後に、彼女はその秘訣・奥義を見つけることができた。深い定から出てきた心識が、外へ向かって流れだす問題を、彼女は解決した。彼女は、注意力を外部へ引っ張って行こうとする、あの心の衝動を、押しとどめる事が、出来るようになったのである。心識が外へ流れる時、必ず、想いとイメージの動きが、随伴している。

この旋回して流動する意識が、有情の世間全体を作り出し、この世間の存在を、維持しているのであった。一念さえも生じない時、自然にまかせて運行される所の覚知が、生起する。この、〈今・ここ〉の覚知は、純粋な注意力であり、機敏で自在であり、心身の制限——名・色の幻像によるコントロール——を受けなかった。以前、サマーディから出て来ると、各種の映像が、空（＝空間）に依拠して、彼女の知覚の中に現れ、彼女の心を、それらと随伴するように誘惑したが、拒絶しようとしても、それは全くもって、出来がたく、それらに随伴する事が、とても利益があるようにさえ、思えた。

自然に運用される覚知が、心の合一した所の境界から生起した今、彼女は執着を離れ、心の汚染を離れ、各種の想いとイメージが、念々相続して、生起しては滅しきるのを、観察することができた。專注する意識が、かくも重大な変化を見せた時、彼女は、真正、高明な師の下において参学する事の意義を、見て取った。彼女は、強くて力のある意識流を、善く巧みに転換させ得る事、それと合一して、かつ、それを〈今・ここ〉に安住せしめ得る事を確信したので、恥じを承知で、ノックアン洞に行って、アチャン・マハブーワに会い、己の禅修行の進展を報告したいと思った。

洞に到着すると、アチャン・マハブーワは、厳粛に、かつ顔をこわばらて立っているのが、見えた。”お前は何をしに来たのだ？”彼は厳しい声で、言った。”私は、お前に、ここから去れ、と言ったはずだ。ここは、お前のような、愚かな輩が来る所ではない！”

メーチ・ケーウは、とりあえず彼女の話聞いて貰えないかと懇願し、ここを追い出された日に立った波と風は、彼女の心を痛ませ、それゆえに反省もし、その後、己の過誤をよく観察し、その結果、彼の指導を真剣に受け入れて、己の内部に專注した経緯を、説明した。そして、自分は、己の禅修行の方法を変更し、如何にして、心をして、執着なくして、〈今・ここ〉に保持せしめるかを学んだか、を述べた。彼女は以前、外境に惑わされて、邪見を宝物と思いなしたが、今、彼女ははっきりと、そのような修行は、徒勞である事に気が付いた。この何日間か、彼女は専心して、己の意識が、強い力で外へ向かおうとするのを、どのようにコントロールするのかを研究し、今では、それを己の中心に安定的に安住させる事に、成功した。

彼女には一種の、物事を成就した喜びが感じられ、謝恩の心を抱いて、師に礼拝し、また、謙虚な態度で、彼に許しを乞うた。禅者だけが、真正に、修行の道を理解する事ができる。しかし、正確な禅法の習得は、良き師が必要かつ不可欠である。禅修行の指導者は、いかなる微細な過失も犯すことは出来ない・・・特に、学生が、高くて深い境界にまで到達した時は、尚更である。師は、学生より更に多くを知っておらねば、学生を信服させる事はできない。また、己がいまだ修証していない仏法を、教えてはならない。そのようにすると、学生を支援する事が、できないが故に。もし、師が、己の証得した体験と、内観の智慧でもって指導するならば、利根の学生は、菩提の道において、非常に速く進歩する事ができる。

彼女の禅修行がすでに、正道に安住しているのを見て、アチャン・マハブーフは、彼女の詫びを、優しく受け入れた。彼は彼女に、彼女の心眼が、亡霊を見すぎた為に、彼女の意識流が随意に流れだし、彼女をして、鬼神の思惑通りに生活する事を余儀なくされ、その為に、心の内に作り出した幻像の、奴隷になっていたのだ、と説明した。意識を回転させて、己自身に向けさせよ。そして、一時、その勢いに干渉し、心をして、内在する、能知(=知るもの)の本性に、戻らせしめよ。意識は、心性の働きではあるが、しかし、意識の活動は無常に変化し、心における、固有の素質である覚知に欠けている。意識の状態は、それを知っている所の覚知とは、同時に存在するが、しかし、心の核心とは、この覚知の根源なのである：意識の流れの中で、無常に生・滅する心境は、ただ、有為なる現象にしかすぎず、そして、心の本性は有為法ではない。

それは、唯一、不変なる、真実なのである。意識は、自然に、心の核心から流れ出てきて、中心から表層へと、向かう。表層の意識は、貪・瞋・痴の風に吹かれて揺れ動き、形相(形と相)と内容は、不断に変化する：しかしながら、心の本性は、活動する事はなく、何等らの状態も、顕現する事はない。ただ、純粹な覚知として、それはただ、〈知っている〉だけなのである。本性から生起した活動、たとえば、物質世界や、または

心霊世界を覚知するという事は、心の意識状態を、源としている。意識は、心理的活動であり、また心理的状态でもあるが、その本質は、不断に生・滅する無常なるものである。故に、意識のレベルでの覚知は、常に不安定で、頼りにならないのである。

外へ流れ出た意識と、六根の感知が集まって、交錯する時、覚知は、認知の対象と、混ざり合う。意識は、眼根と交感して、色相と接触し、認識を生じせしめるが、この認識がすなわち、眼識である；意識は、耳根と交感して、音声に接触し、認識を生じせしめるが、この認識がすなわち、耳識である；その他もまた同様に、類推できる。

このようであるから、感官の意識が生起する時、心の本性は、覆い隠されて、見ることができない。これは決して、本性が消失したのではなく、能知の本性が、意識に変化したのである。通常、一般の人々は、彼らの目や耳に、色（＝物質）や声を追いかけて、感情的に、認知された対象に介入し、ただ、これらの感官の対象が消失してから後に、静かになる。彼らは、日常的な意識の中において、不断に出没する鬼神に沈潜し迷い、心の本性を見失ってしまう。

意識の流れを逆転させれば、想いは阻害されて、止まる。

想いが止れば、意識は、内部に集まり、能知の核心と合一することができる。禅者は、このように持続的に修行するが、この基礎は、どのような状況においても、動揺しない様（＝サマ）に変化する。たとえ深い定から出ても、心は依然として、安定して緊密で、それはまるで、どのようなものをもってしても、決して、心内の專注を干渉させ得ない、というようなものである。定そのものは、苦を滅する事はできないが、しかし、定は、一つの、理想的な足場・・・プラットフォームを提供する事ができ、それによって、苦に至らしめる煩悩を、全力で攻撃する事ができる。

定が有る時、観察は、あるがままに自由であり、作り物の造作はなく、念は、十分に覚醒している。この鋭敏さと、直接的な專注は、智慧が調査し、観察する時に、その支えとなり、協力する。定によって生起した、甚だ深い安らぎ、静けさと專注は、一つの殊勝なる基礎となり、存在の本質を洞察する内観を、育成する。

想いを止めるのには、二種類の、主要な目的がある：一番目は、一個の空間を作り出し、コントロールを受けない、慣性的・習慣的な想いと、主体的で、專注された想いとを、区別・識別し、想いの性質を、はっきり見極める事である；二番目は、一個の空間を明け渡し、（+心の）直観的な内観によって、（+心に）意識活動を行わせる事である；この二者は共に、智慧にとって、多少とも、欠ける事のできないものである。正確な修行を通して、定は、一時的に思想（＝思いを巡らす事）を止めることができるが、



その時、理知を歪める事はない。定は、禪者に主体的に思想する事（＝考える事）を保証するが、考えをコントロールできないまま考える、というような事は、しない。心がこのように運用される時、思想（＝考え、想い）は、一つの広い空間を広げ、執着のないまま、明晰に思考し、観察する事ができる。直接的な洞察力は、一目で、一連の念頭（＝想い、発想）が、どの方向へ向かおうとしているかを、判断する事ができる。

禪者は、執着から離れる事と、直観的な内観でもって、無用の念頭（＝想い、発想）を手放し、有用なものを、手にする事ができる。このように実践する事は、般若（＝仏法の智慧）にとって、一つの堅固な基礎を、打ち立てる事を、意味する。我々の心が、いまだ甚だ深い静けさに到達していないのであれば、しっかりと思想（＝思考）することは出来ない。というのも、意識によって駆動され、引き起こされた思想（＝想い）は、妄想であり、（＋己にとって）必要な思想（＝考え）では、ありえない。この概念化された思想（＝思考）から得られた知識は、浅薄なものであり、頼りにならないものであり、真の智慧による、根本的な内観に欠けるものである。

（訳者注：この段落には＜思想＞＜念頭＞という言葉が幾つも出てきますが、それぞれ、文脈によって、動詞であったり、名詞であったり、その内包する意味が違ってきますので、翻訳する時に注意が必要でした。後日、誤訳・誤字・脱字を指摘されて、校閲する必要が生じた時に混乱しないよう、＜思想＞＜念頭＞の訳文の形式を「思想（＝○○）」「念頭（＝○○）」としました。読みにくいかと思いますが、ご理解の程、よろしくお願いいたします。）

心が、周縁の取り巻きの思想（＝考え）と感情に干渉されないでいれば、完全に、心の知覚の領域に専注する事ができ、憶測や想像の影響を受けず、知覚の領域の中で生じた現象を、真実に基づいて、観察する事ができる。これは、観の修習における、重要な原則である。このように、善くて巧みに観を修習するならば、修行は順調に進み、憶測の干渉を受けたり、または憶測に誤って導かれる事がなくなり、真の智慧によって深く、探索、思惟と理解が、進むのである。メーチ・ケーウが、意識によって生起する境界に相応じて後、非常に長い時間が経っている為、心の本性に対しては、日ごとに、益々、疎遠になっていた。故に、この本性を、直接体験する必要があったのである。しかしながら、心性を体験する事は、一種の方便にしかすぎず、それは究極ではなく、心をして、大きくて粗い障礙から離れさせる為であり、さらなる、次の修行にとっての、よき基礎を打ち立てるものであった。

アチャン・マハブーフは、警告した。心性の体験をしたせいで、あなたは、意識的な知覚によって生起した知識に対して、誤った自信、錯覚的な自信を持ちやすくなる。故

に、心から流露する、一切の事柄を、子細に検査する必要がある。毎回、定から出て来ると、あなたは、意識の活動を点検し、妄想が残して行った汚染を、点検しなければならない。これらの妄想は、色相（＝形）、イメージと造作と関連する執着によって造られるものである、と。アチャン・マハブーワは、メーチ・ケーウに、心にしっかりと絡み付いている煩悩を、徹底的に、根ごと取り除けるように、このような、己の心を深く探索する方法を教えた。

彼は、何度も繰り返した。これは仏法の最も重要な要である——仏法の要は、世間の色々な現象を知る事には、ない。人の心は、自然・当然に、色身に執着する。故に、彼は、彼女に、先に、全幅の心力をもって、色身への迷いを解決するように、と促した。彼は、慧の修行は、身体から始めるべきであると注意を喚起した。その目的は、直接、色身の本質を、見通す事にあった。彼は、彼女に、観身の法門を修行する時、自在な観察力を運用して、慣性・習慣による解釈、憶測や推測による意識の分別・判断に、墮ちこまないようにするべきだ、と教えた。

意識と心の核心が合一した後には、清明で汚染のない覚知が生起するが、観の修習は、必ず、この覚知を用いて、観察するのでなければならない。自在な運用による内観を顕現させる為には、先に、日常的な思惟と想像を、調伏しておかなければならない。言い換えれば、心の中に生起するイメージに対して、如実に観察するべきで、概念を加えて分別、判断してはならない。もし、彼女が意識でもって分別し、これらのイメージに命名するならば、通常 of 世俗的な心理的な条件反射の作用によって、妄想が生起し、その為、各種の混乱が起き、真正なる内観とは、180度異なってしまう。清らかで明晰な覚知は、あるがままに、自在に現象を観察し、観察の対象からの束縛を受けず、智慧のまったき、あの自然な、無礙なる清明（＝清らかで明晰な事）を、証する事ができるのである。

心專注仏法、

（心が仏法に專注する時）

初歩的内観是看到執着色身体引起的苦。

（その初歩的な内観は、身体に執着する事によって引き起こされる苦を、見る事である。）

那些看清楚色身的人、

（身体の本質によく気が付く人は）

通常很快証悟仏法。

（通常、非常に速く仏法を悟る。）

## 内にある死体

---

夕方、メーチ・ケーウは、歩いて女性専門道場に帰った。彼女の心は軽く、元気で、生き生きとしていた。茅葺小屋に戻ると、彼女は以前と同じように、座禅をし、己の修行について、全面的な探索をした。メーチ・ケーウから言えば、サマーディに証入するのは、難しい事ではない。というのも、彼女の心は、生まれながらに、容易に、一境に凝集することができたから。凝集して散らない心だけが、近行定を証得する事ができ、その近行定が、彼女をして容易に、多種多様な心霊のエネルギーの領域に出入りする事を可能にさせた。この過程において、意識を、自然に、中心点に凝集するならば、心の本性に接触する事ができる。しかし、それは一時的な短い時間の接触であって、そこからすぐさま退出すると、それは、それ自身の、正常な動態に戻った。この心性における、短い時間の体験は、その後に、意識が認知する所の知識に対して、一種の間違った自信を齎すことがある。

メーチ・ケーウは、安定した静かな心を、変化する心境を点検することに使わず、却って、心の活動的な画面を受動的に見て、思考と想像の機能をもって、これらの画面の意義について推測した。その為、彼女は、心性の汚染のない覚知との触れ合いを失ってしまった。これら概念化された思考から得られた結論は、浅くまた、自我を持ち（＝己のものだと思いなし）、意識の中の汚染は、彼女の認知に対して、感情的な固執を擁し、彼女を誤った方向へ導き、彼女をして、真正の理解から離れさせた。彼女の意識心は、己がいつも作り出している幻像に、過度に介入するようになり、心性において、独立的に存在するかの様相を見せた。

今、アチャン・マハブーワが、いきなり介入して来て、その一切を変えた。彼女の意識は中心に集まり、心性と合一し、完全に、純潔な覚知の微妙な本性と一体化し、その全体が、甚だ深い寂静の中に、息づいた。この時、身体の意識は消失し、唯一残されたものは、微細で描写のできない覚知だけであり、動静がなく、最も微細な意識波さえも、なかった。彼女の心は、定の境に何時間も浸り続けた後、ようやく揺れ動いて、この中心から出ようとした。一つの短い意識のさざ波が生起し、次には、即刻消失した。このさざ波は自然に発生するもので、わざと発生せしめた訳ではなかった。一つの微細な波動が生起して、またすぐに静まった。意識の波動は、何度も何度も、現れては、また消え、そうする内に頻度が増え、意識流は、最終的には、通常の状態に戻った。彼女は、外部の環境を覚知する意識を回復したが、しかし、心の概念思惟の機能は、未だ、静止の状態にあった。能知（＝知るもの）の核心は依然として、心の通常的思考様式を制圧しており、意識は、自在に運用される知覚流の中に、浮いていた。

自在に運用できる状態にあるため、無礙なる覚知と、明確な洞察力は、同時に運行され、彼女をして、深い直観からの内観によって、己自身の心身の何であるかを、理解せしめた。彼女は本能的に、観の修習において、徹底的な内観による般若を証得する為には、このレベルの注意力を、保持しなければならない事を、知っていた。この時、更に微細な知覚の作用によって、慣性的・習慣的な思惟様式の障礙を受けることなく、直観を通して、深くて微細で、作り物でない知識を、獲得することができる。このようであるから、この正常な意識流の中において初めて、智慧は効果的に運行する事ができるのである。

その日の深夜、メーチ・ケーウは、サマーディの深い定から出て、意識流がゆっくりと、身体の各部分に際限なく散らばるのを感じ、それと同時に、最後には、身体全体を感知するのを、体験した。この時の彼女の覚知は、身体の、偏見的な傾向の影響を受けず、ただ、如実に、色身の座っている姿勢のまま、執着を離れた覚知は、直接的な直観に依って、色身の内部が、まさに敗壞（＝壊滅する）しつつある事を知った。これはもとより、生（＝生まれる事）と共に備わった過程であり、最後には、身体を死亡させ、分解させるものである。彼女の清らか、かつ明晰で、また、澄み切った心は、身体の腐敗して行く様、それが自然の成り行きにまかせて、最終的に避けられない結果へと、向かうのを見た。腐敗の過程は、体腔の深い場所から始まり、ゆっくりと、その他の部位に、広がって行った。彼女は、ただ観察するだけで、思考も想像もせず、覚知の範疇において、身体の分解する過程が顕現するのに、任せた。過程の全体は、当然のように、非常に速く、勢いを持って、展開した。

メーチ・ケーウは、頭部から観察を始め、注意力が、それ自身に任せるままに、ゆっくりと、死体全体に浸透して行くようにし、そのことによって、腐乱した映像が、更に明晰になった。この時すでに、死亡と分解に対しての考えについて、智慧が全神経を傾注している事を、直接知れたために、全体の活動は、画面となって、自然に顕現した。彼女は色身の中の死体が、膨張し始め、色がゆっくりと変化し、皮膚が黄色くなり、その後突然、どす黒くなるのを感じた。皮膚は、身体の膨張に伴って、パンパンになり、最後には裂開して剥落し、腐乱した筋肉が露出し、膿が溢れ、大群の蠅がやってきた。死体は益々臭くなり、これを嗅げば嘔吐したくなり、彼女は、受け入れがたいほど、気分が悪くなった。

この時、蠅がその上で卵を産み、次に蛆虫が出現し、裂けた皮膚と膿の上を所構わず這いまわり、暫くすると、死体全体が、一塊づつの蛆虫で、一杯になった。蛆虫がお腹いっぱい食べ終わると、五臓六腑と筋肉は、すべて食べ尽くされてしまっていた。骨を連結する組織が無くなったので、骸骨は、支えを失って、崩れ落ちた。汚い骨、残りの

腐肉、交錯する腱と軟骨が、ごちゃごちゃと一塊になった。これらの残骸は、引き続き分解され、その結果、骨は地面に散らばり、骨格は、完全にバラバラになった。

一日また一日と経って、太陽に晒され、雨に打たれ、骨の上についていた組織の残渣もまた、剥落し、冷たく白い骨だけが、残された。次に、骨もまた分解されて、粉々になり、最後には、頭蓋骨はこちら、骨盤はあちらという風に、いくつかの大きな骨が、バラバラと残った。最後には、この大きな骨さえも粉々になり、彼らの根源——地大に戻って行った。突然、地大も消失し、一切切切が消失して見えなくなり、ただ、四方に光芒を発射する、透明な覚知だけが残った。存在感が、ゆっくりと、光明なる覚知の中で消えてなくなり、自我（＝我ありという感覚）と、周りの感覚も、一緒に消えてしまった。

メーチ・ケーウは、毎日、かくの如くに、禪の修行をした。一回また一回と、何度も重複して、内部の死体に専注した。その結果、死亡の相と敗壞（＝壊滅する事）の相が、慣性的・習慣的思惟になるまで薰陶され、一たび、己自身の身体に注意を向けると、彼女の身体の影像是、腐敗し始めるのであった。毎回の禪の修行の時、心眼でもって、分解の過程を見た。修習の期間が長くなると、身体組織が不断に粉碎される現象を見る事を通して、彼女は、色身における、諸々の縁による和合の本質に対する興味が引き起こされ、故に彼女は、身体の成分——一切の物質を構成する地水火風——の研究を始めた。

筋肉、骨、歯、爪、毛髪は、地大の硬い性質を有する；血液、尿、粘液とその他の分泌物は、水大の流動性の性質を有する；身体の体温、エネルギー、活力は、火大の現れである；呼吸、各種の循環系統と身体的動作は、すなわち、風大の存在を証明している。メーチ・ケーウは、身体の敗壞の過程を見る事を通して、敗壞の作用が、どのようにして、一つに聚合した所の、元素の物質的関連を分解するのか、なぜ、これらの元素を捨てて、それらを元の形態に戻らせようとするのか、を観察した。

意識が、最後にこの色身を捨て去る時、死亡が、生命エネルギーを提供している火大と風大を捨て去り、それらをして、各々の（＋本来の）状態に戻らせしめる。自在に運用する覚知の透視力をもって、引き続き、深く分け入って観察すると、彼女は、ある種の体液は、地面に滲み込み、ある種の体液は、空中に蒸発することを発見した。体液は、地面に浸透するか、または蒸発するかした後、身体は脱水して干からびて、硬い組織と骨が残った。これら残余の物も、徐々に粉碎され、塵土になり、最後には、徹底的に、元の地大に戻って行くのであった。

メーチ・ケーウは、真迫の画面を見た：骨と地大は融合し、両者は合併して一つとなり、同じ一つの元素となった。最後の残余の骨が、それ本来の元素の状態に戻った時、彼女は、深々と、身体には実質が無いという本質、及び、それらが幻・虚妄であるという本質を領悟して、以下のような知見が生じた：身体のすべての成分は、皆、地水火風によって構成されており、それらはすべて、元の状態に戻るのだと。突然、地大は己自ら、覚知より消失し、彼女の覚知は、光り輝き、かつ、ゆったりとし、光が四方に照射した。その後、一瞬の瞬きの間に、覚知は、彼女が今まで経験した事のない、ある種のレベルにおける、凝集の状態になり、光明は消え失せ、その後に、唯一、形容しがたい

<空(クウ)>——一つの絶対的一体的な境界——が残ったが、それは完全に、二元的対立を超えていた。そこには、ただ、純粋な覚知——超越した所の、微妙なる円満と安らぎの静かな境界、全く、何等の特相(＝特別な相、特徴)もない境界が、あるだけであった。これが、心の本性に充満する所の活力、<空(クウ)>であった。

メーチ・ケーウは、毎回、身体を観ずる度に、形象が、地水火風に分解される真迫の様子を見た。彼女は、死なないものは無い事を、はっきりと知った。頭髮、爪、皮膚、肉、骨は、夫々、彼らの元の元素に戻り、ただの地大になった。地大は一体、過去において、死んだ事があるだろうか？身体の各部分が分解される時、それは、何になるのか？それらは、皆、己本来の元素に戻る。地大と水大は、彼ら本来の元素に戻り、風大と火大もまた同じであり、その中の何者も、決して壊滅する事はない。

四大が聚合して、一つの軀体となり、心識はここに、安住する。心は、この物質が、組成されて、その結果、己に命を与えてくれた事に執着し、その後に、それを自我(＝己自身)だと見做し、どこへ行くにも、それを背負って歩いた。心が、色身を自我(＝己自身)だと執着する為に、無尽蔵の憂いと悲しみと苦悩が、やって来ることになった。同様に、心もまた死んだ事は、ない。その一番の特徴は、立ち止まらずに変化するもので、一刹那毎に生まれては死に、生まれては滅し、尽きない意識流の中で、一つまた一つと接続しながら、生じては、滅し去るのであった。メーチ・ケーウは、四大が、己自身の本質へ帰って行くのを徹底的に見れば見るほど、心に益々の納得を得た。

どこに、死等というものが、あろうか？死とは、何であるか？四大——地水火風——は死なない；心に至っては、どのようにすれば死ねると言うのか？メーチ・ケーウは、この点を領悟(＝納得して悟ること)すると、心は更に顕著に、覚知は更に強く、内観は、深く徹底したものになった。甚だ深い禅定から出て来ると、メーチ・ケーウは、この、深遠なる影響力を持つ、微細な形を有する色身を、観察した。

彼女は、身体感覚とは、実は、一種の自我意識であり、生まれてからこの方、人は、己の身体による感知を尊んで生活を組み立て、本能的に身体を保護し、その他の物質的需要を賄ってきたのだと、知った。彼女は、身体を基礎として生じる所の、数々の想いは、結局は、輪廻生死の業因である事を、明確に知った。身体に内在する不浄は、その外貌と比べて、非常に深刻であった。身体を根源とする心態（＝心の様子）と行動は、人に反感を感じさせるだけでなく、害がある。虚栄心、淫欲への耽溺、性暴力、肢体による暴力等は、その内の、比較的嚴重な醜い行為であるといえる。これほど多くの、ネガティブな思想・思考と感情の根源としての身体は、心を道連れにして、輪廻の根源に結び付けようとする。彼女は、もし、身体が執着する所の根源を追求するのならば、汚染された思想、思考と感情、及びそれらを誘発する意識を、直接調査しなければならない、と思った。

池水完全停止、

（水の流れが、完全に停止する時）

清澈見底的池塘、

（池塘の底が、徹底的に澄んで見える）

我們可以清楚看見所有的東西。

（その時、我々は、すべてのものを、はっきりと、見て取る事ができる）

心徹底休息時静止不動、

（心が徹底的に休息する時、心は静止して動かず）

心静止不動智慧容易生起、

（心が静止して動かない時、智慧は容易に生起して）

順暢運作。

（順調、速やかに、運用される）

智慧運作時、心洞然明白。

（智慧が運用される時、心は何事をも、明白に知る。）



## 自在なる覚知

---

その後、何か月か、メーチ・ケーウの生活は、安寧で静かで落ち着いたものになり、一心に専心して、勇猛果敢に、禅の修行に取り組んだ。毎朝、朝食が済んで暫くすると、彼女は辺鄙な茅葺小屋に戻り、午前中一杯は、経行道にいて、その端から端までを、何度も往復した。経行道は、彼女にとって、全力を尽くして、生死輪廻を打ち壊す所の、修道の道場と化した。彼女は経行する時、身体の位置に注意する事もないし、足裏が地面に接するのに、注意を払うこともなかった。覚知は、それほど内部への観察に打ち込み、たまたま、経行道を踏み外して、灌木の生えている場所に足を踏み込んで、專注の対象を変える事はなく、本能にしたがって、経行道に戻って、引き続き経行した。知力は、その全精神をもって、意識流に集中した。

経行道の傍には、天を突く大木と、湾曲して垂れ下がった竹によって陰が作られていた。道の端には、細長いトウトチノキがあり、メーチ・ケーウはこの木の下に、簡素な竹のプラットフォーム（＝縁台）を置き、午後の炎天下、ここで休んだり、座禅したりした。

ここは、彼女の一番好きな場所だった。このトウトチノキは、マホガニーの一種で、幹は硬質で、鮮やかな黄色の花は、人々を魅惑した。花の季節には、木全体が黄色くなり、落花は、禅修行の為に設えた縁台が、見えなくなる程、散り敷いた。トウトチノキは、硬さと美しさを兼ね備え、強さと輝きの象徴でもあり、それは、メーチ・ケーウの心模様でもあった。

ある日の夜、メーチ・ケーウは、一つの禅相を得た：一面の湖の、広々とした風景が、彼女の心眼の中に浮かび上がった。湖には、金蓮花（＝キンバイソウ）が満開で、水面に浮いている花は、牛車の車輪くらいの大きさ、薄い花弁は、柔らかいスポークのように、光を放った；また、別の金蓮花は、蕾のまま、花弁を空に向かわせ、藍色の湖面から高々と天を突き、それは、まるで、金色の半円の屋根を持った、廟のようであった；また別の金蓮花は、清らかで涼しげな湖水の下すれすれに浸り、それらの光彩が湖面に揺れて、まるで、金色の風が、吹いている様であった。湖水は澄んで清らかで透明で、湖底に堆積して波形になった泥が、はっきりと見えた。

別の金蓮花は、花びらを湖に散らし、花弁は水中に落ちて光を放ち、香は、空中一杯に、満ちた。メーチ・ケーウは、畏敬の念をもって、心静かに見ていたが、この時、一羽の小さなホオジロ鴨が空から飛んできて、静かな湖面を掠めて水中に降り立ち、金蓮花の叢の中で、戯れ始めた。鴨は、水面に浮かんだ花びらを啄み、それを優雅に回転さ



せながら、飲み込んだ。四ひら食べた後、鴨は満足し、そこに浮いたまま動かなくなった。

メーチ・ケーウは岸边にいて、その光景に見入っていたが、突然、身体が一片の雲のようになって、空中に舞い上がり、湖面を漂い、あの鴨の上方まで、漂いついた。彼女は、足を広げて、鴨の背中に跨った。彼女が跨るや否や、彼女と鴨は一体となり、その刹那、彼女は自分が鴨であると意識した。その後、彼女は定から出て来て、通常意識に戻った。メーチ・ケーウは、この神秘的な禅相を、何日間も思い出して、その中に含まれる、重要な意味を思惟した：ホオジロ鴨は、金蓮花を啄んだ。金蓮花は、法華一仏教の聖道の要——の布施・供養の象徴である。金は、光、心光を意味している；花は、心の光が、豊穰の盛りとなって、放出される事を、意味する。彼女は、四つの花びらは、四聖道を意味しており、それは、阿羅漢果に向かう道の上の、四つのキーポイントとなる位階である、と領悟した。

あのホオジロ鴨のように、メーチ・ケーウは、智慧と光明を顕した：彼女は、この一生で、聖道を完成させて、涅槃を証得するであろう事を、知ったのである。メーチ・ケーウは、心を内に収めようが、外に向かって意を向けようが、意識は常に、覚知の一刹那毎に及んでいる事を、知っていた。彼女が体験した一切、そのどれもが、意識の外にあるものは、一つもなかった。すべての、己が捉えたもの、想像したもの、及び経験によって得た現象は、意識があつてこそそのものであり、言い換えれば、心識の外に、独立して存在する現象は、ないという事である。

故に、身体への覚知は、意識の固有の機能だ、と言える。根本的に言うならば、彼女の観身は、内在化した身体を見ており、この内在化した身体は、身根が取得した所の、心理的映像に過ぎない。意識は、自然・当然に、身体全体に遍満しており、身根と交錯して、覚知の作用を引き起こす。身体感覚——身体を自我、己自身だと見做して執着する事——は、主に、身根によって引き起こされる心理現象であり、その上に、深くて微細な執着（色相と自我の執着）による偏見によって、構成されているのである。

メーチ・ケーウは、自在に運用される心態（＝心の状態）と、執着を離れた心態でもって、專注する時には、身体をば、内心に顕現する、意識の産物である、と見做した。しかしもし、色身がただ四大の聚合したもの、暫定的に組成されたものに過ぎないのであれば、身体感覚というものは、一体どこから来るのであろうか？また、身体が腐乱して、分解される自然・当然な過程を見て、それを不浄であると思ひなす発想は、どこから来ているのであろうか？あの、極度な嫌悪感、どこから生起しているのであろうか？

メーチ・ケーウは、内在化した身体の腐敗に専注したが、彼女は特に、それらと同時に生起する所の、現象に対しての、好ましいとか、好ましくないとかの念頭（＝考え、発想）と感情に、注意を払った。この時、彼女は偏見のない、執着から離れた心態で観察をして、分別心をして、この最初概念（＝最初に生起する概念）に対して、自由に扱うようにさせ、その後、概念の解釈に対して、反応した。彼女は、六根からの見返りと、心内の思量と識別によって、己のこの身体を、認識することができた。しかし、彼女は、その次に、これらの概念は、好いか悪いか、善であるか、悪であるかに関わらず、己が感受するという事・・・また、心はなぜ、これらの影像を創造するのか・・・また、心はどのようにして、これらに意義を付与するのかという事を、理解する必要があると思った。

修行がこの段階まで来ると、メーチ・ケーウは全神経を集中して、観身によって引き起こされる、感情的な反応に、傾注するようになった。彼女は、この時すでに、意識に介入する勢い（+のある力）、意識の進展に逆行する根源に、精通していた。故に、彼女は同様の技巧を用いて、念頭（＝考え、発想）と感情の流れの逆行に向かい、それらの進展の根源を、追跡し始めた。彼女は、身体の深い所での、腐敗の影像に専注し、直接影像を摂取し（＝受け取り）、概念・思考を、生起させなかった。自在に運用する覚知と、明確な洞察力を統合して、一つの作業に専念した所、彼女は、嫌悪感の本能的衝動が、心内の深い所から弾き出て来て、映像の中に浸透するのを見た。彼女は、この映像が、覚知の中で、能知（＝知るもの）と影像が、合一するまで待った；

その時同時に、映像と感情は徐々に、内部に向かって収縮し、両者共に、そのすべてが意識心の中において溶融し、その後、徹底的に跡形もなく、消失した。彼女は即刻、もう一度改めて、映像と、それに伴って齎される嫌悪感に専注し、再度、過程全体を観察した；認知は形成され、感情の衝動と影像は融合し、それは、その根源と意識の中心に戻って合一すると、その後、消失した。彼女は、このように観察すればするほど、映像と感情は、益々自然・当然に顕現すると同時に、それは、縮小して行った。最後に、作意する必要もないまま、映像と感情は、己自身で心の中に戻ってきて、それらの根源に戻り、かつ、即刻、その場所で消滅した。

メーチ・ケーウの観身の修行は、非常に重要な段階に、差し掛かった。この折り返し点において、心が色身に執着する、その根本的原因は、非常にはっきりとしていた。嫌悪の本能の感受が、それとの根源において合一すると、一つの深い覚醒が、突如として、生起した：心は、己自身で、嫌悪と好ましきという感受を、製造する。心は、己自身で、醜いか、美しいかの見方を、製造する。これらの属性は、真実に、認識の対象の中に存在している訳ではなく、心が、映像の上に、これらの属性を投影し、その後、己自身

を騙して、己自身に、それらの美醜、好ましいか、好ましくないかを、信じさせているのであった。実際、意識流は、恒常、映像と、それによって生起された、感情的な妄想の上に、沈潜している。人の心は、四六時中、図像を描写している——己自身の図像と、外部世界の図像とを——そして、その後、己の幻想の中に落ち込み、それらを真実であると思いつくのであった。

修行がこの段階まで来ると、心の本性の、あの無量で、虚空のような覚知と精緻な洞察力は、同時に運用された。映像が凝集された所の幻像は、徐々に、粉碎され始めた。意識流の内部の、各種各様の、乱雑な形象と断片は、浮上してきて、映像として凝集し、次に、即刻、粉碎された。その後、また、凝集し、粉碎され、かくの如くに、循環し、それを繰り返した。

身体の影響は、浮かび上がるや否や、すぐに滅し去った。どのような欲望であっても、または見方であっても、完全に形成される前に、覚知の根源は、すでに、映像を覆い、それをして、虚空に返し、その後、消滅せしめた。心身は、陸続として、己の好みであるように思える各種の方式で、己自身を顕現したが、しかし、そのすべては、一つまた一つ、空（＝からっぽの場所）の中に溶融して、消えて行った。身体の影響・習慣的概念は、形象として顕現する。それは、それら各々の特徴を顕示する為であるが、しかし、それらは、心内において、明確に形成される前に、能知の核心は、それらすべてを、溶解させた。

影響の生起と消滅は非常に速く、故に、外部の、または内部の概念とは、相関する事がなかった。最後には、形相（＝姿かたち）は、意識の中において、閃きながら生・滅したが、その速さは、映像の意味を識別する事が、出来ない程であった。一つずつが、滅し去るに従って、覚知は、更に深い＜空（クウ）＞——映像においての＜空＞、対象への執着への＜空＞を、体験した。一つの極端に微細な、純粹的知覚の核心が、この時、心中に突出し、顕現した。一つずつの新しい映像は、閃いては滅し去り、心は更に深い所で、それが齎す＜空（クウ）＞を、感受した。

これ以降、メーチ・ケーウの心は、微妙な空（クウ）と清らかさと明晰さの中にあり、色身は存在していても、彼女の覚知は、空（クウ）そのものであり、いかなる映像も、心の中に留める事はなかった。この内観は、メーチ・ケーウをして、翻天覆地（＝天地がひっくり返る）の、全体的脱皮を、促せしめた。彼女は、疑いもなく、以下のような真相に関する、覚醒を得た：意識流によって生起する映像に対する無知、その結果は、嫌悪または好ましきという、感受を引き起こす。

彼女は、好悪（+という心の働き）は、身体と色相に対して、本能から出てくる所の、微細で察知する事が困難な、歪曲された認知の上に、植え付けられたものである事を知った。彼女が、認知の真正なる根拠を明らかにし、その正当性を徹底的に覆した時、表象される外部世界全体は崩れ去り、これら認知への執着もまた、滅し去った。心内で創造された一切の影像が滅し去った後、心の相に対する執着もまた、同時に滅し去った。心が、ひとたび、一切の感官の紛糾から退出した後、彼女の存在全体が、深くて微細で清浄な感覚に覆われた。

最後には、身体の影像、またそれがただの色相（=姿かたち）に過ぎなくても、メーチ・ケーウの意識の範疇に、存在する事はなかった。心中に、執着するべき形相がないため、メーチ・ケーウは、己が永遠に、色界に生まれる事はないと、知った。この時、心内において、常日頃感じていた生理的限界と幻想化した色身は、すべて消え去って見えなくなり、外に向かって伸展し、一切と融合し合ったが、それはちょうど宇宙と一体化したようなものであった。依存していた一切のものから抜け出して、内において安らいだが、それは無上の<空（クウ）>——清らかで澄み渡り、光り輝く、不動なるものであった。

心正常的状態是清浄的、

（心が正常である時、それは清らかである）

心受外塵汚染才不浄、

（心が外部の塵埃に染まる時、それは不浄となり）

引起傷悲快樂等情緒波動、

（悲しみや楽しみ等の感情の波動が生じ）

不断渲染、

（それが不断に広がって）

直到完全看不到自己的本性。

（最後には完全に、己の本性を見失ってしまう。）

## 光明の核心

---

一年が経ち、メーチ・ケーウと共にあるのは、茅葺小屋、経行の道、トウトチノキの下の、小さな縁台などであった。朝食の時以外、彼女はほとんど、禅修行の実践の場である、この範疇を、離れることはなかった。尼僧たちは、一周ごとの斎戒日には、依然として、アチャン・マハブーワに会いに行ったが、メーチ・ケーウは、彼女たちと同行する事はめったになく、全精神を禅修行に、集中させた。

そのようではあっても、メーチ・ケーウは、アチャン・マハブーワに対する感謝と敬慕を忘れた事はなく、毎朝、小さな鍋でもち米を炊き、ビンロウを一籠用意して、彼に渡した。普段、彼女は、一人のメーチに頼んで、己の代わりに彼に供養してもらい、己は、たまには出かけて行くものの、彼に会っても、少し話をするだけで、すぐに、自分の道場に帰った。アチャン・マハブーワの寺院は、村の東北にあり、メーチ・ケーウの女性専門道場は、村の西南2マイルの所にあつて、その間に、弁晒村があつた。この二か所には、それほど距離があつたし、アチャン・マハブーワも、あらかじめ外出の計画を宣告することはなかつたが、メーチ・ケーウは、毎回直感でもって、彼が寺院を離れて、付近を行脚しながら、静かな隠れ場所を、探している事を知っていた。

彼が寺院の門を出るや否や、メーチ・ケーウには分かつたし、彼が寺院に戻つて来ても、メーチ・ケーウには分かつた。彼女が言うには、アチャン・マハブーワが外出する時、彼女は突然、彼女の周りに寒々とした空気を感じ取る、とのことだつた。通常、彼は、何か月も遊行したが、ひとたび戻つて来る場合にも、メーチ・ケーウは、すぐに分かつた。というのも、彼がいまだ寺院に到着する前から、彼女は、暖かい空気を感じ取る事ができたが故に。寒気と暖気はすべて、外部世界の現象の形跡を、根門が感じ取つたものであるが、この形跡を知るのは、彼女の心であつた。

形相と概念は、意識的活動の制限を受ける。衆生の心中には、極めて微細な無明が浸透しており、形相と概念を知る所の知覚は、これらの意識が作り出す産物に、執着する。それを自我と同じと思ひなして執着する心は、受、想と行を自我と見做し、この執着は、心をば、一人の人間として、存在させてしまう。しかし、思想（＝考え）と感受は、実際には、心の有為なる作用にすぎず、本性ではない。本性は、意識に変成し、概念上の、相対的真実を作り出すが、それは究極的な真実では、ありえない。自我（＝自己）というこの相対的な真実は、深くて微細な執着の対象なのである。

メーチ・ケーウは、心には形相（＝姿かたち）がない事、また、概念を構築することもない事に、覚醒した。清らかで明晰な覚知を自在に運用して、現象を観察する事を通して、彼女は、概念や思惟から解脱——抜け出す事が出来た。概念が、いまだ明確に意識流の中で形成される以前、能知（＝知るもの）の核心が、それを捨棄する。このようにすれば、ある念頭（＝考え、発想）または意念（＝思い）が形成される前に、能知の核心は、それを直接放下（＝手放す）し、心行がいまだ萌え出さない内に、溶解して無形となす。

徐々に、執着を離れるという、その心性の性質が、どこまでも至り、不動で、強大で、どこにでもあるようになった時、その面前では、各種の意念は維持することが出来ず、

跡形もなく溶けて、無くなってしまう。修行がこの段階まで来ると、メーチ・ケーウの心は、まるで戦場のように、意識的存在は、一切を含み、一切を包み込みながら、一切を保留しない所の、能知の核心と、闘争するようになった。深い空（クウ）が、持続的かつ不断に、生起する無数の形相を消し去ってしまう為に、心の能知の核心が優勢を保ち、それは益々光り輝き、純潔になった。

内観が、心理的現象における、虚妄の本質に全面的に浸透した時、能知の核心は、一切の概念を捨棄し、それらは、ただ心理の内部のさざ波にしかすぎず、実体はない、ということが、徹底的に知れるのである。それらが如何様に心の中に顕現しようとも、すべて有為なる形相（＝姿かたち）であり、一つの例外もなく、それは心の施設（＝設定したもの）であり、皆、空（クウ）の中に溶けて、無くなってしまふものなのであった。

メーチ・ケーウの禅修行は、無量劫より生死輪廻を支配して来た、心理上のパターンを打ち壊した。この時、何ら一つの念頭（＝想い、発想）さえも飛び出して来る事はなく、またそれが、形成される事もなかった。このことは、自在に運用できる覚知が、真正に、生起した事を意味した。心が、造作する事のないまま観察するという事、それは、純粹で清らかな、汚染のない覚照であり、自然に、清らかで明晰な洞察を伴う、内観を誘発した。心が、直接知覚による智慧によって、心理的現象の中には自我（＝エゴ）がない、という事をはっきりと理解した時、執着を離れる所の解脱が、自然に発生した。心の專注する範囲が、一点に集中すればするほど、外に向かう心の流れは、益々短くなり、局部的な制限を受けた。メーチ・ケーウは、概念的な現象に関して、これほど徹底的に観察したが故に、光明の核心は、もはや、これらの現象を覚知しようとはせず、心内の念頭（＝思い）と想像は、完全に停止して、心の能知（＝知るもの）の本性だけが、突出して顕現した。

この時、一つの極めて精緻な覚知——宇宙全体を覆い尽くす覚知——以外に、その他のものは、決して、顕現する事は、なかった。心は、時間と空間の限界を超越し、発光する存在の核心は、まるで際限がないが如くに、微妙で空無（＝何一つない事）で、宇宙のすべてに満ち満ちていた。一切は、覚知の微細な特質に満たされ、これ以外のものは、まったく存在しないかの如くであった。彼女は、万象を網羅する核心の障礙と、遮蔽物を綺麗に取り除いたため、心の真正な力が、顕現したのであった。無明の枝葉が、すべて切り落とされたその後、メーチ・ケーウの心は、一つの微細な光明の核心となって一点に集中した——それは、かくも壮大で、彼女を魅了し、これこそが、己が身を惜しまずに追求してきた、一切の苦の果てる所だ、と思った。

自我（＝己のもの）と認定する所の、すべての執着の要素を捨てて、微細な光明が、心の中心で光を放ったが、それは、彼女が専注する所の、唯一の対象となった。この覚知の専注する一点は、それほど微妙で精緻であり、形容しがたく、それは、今まで経験した事のない、微妙な楽しさを発散し、まるで有為の現象全体を、超越するかの如くであった。この一粒の光明心は、一種の、堅固で壊す事の出来ない感覚を発し、まるで、どのようなものをもってしても、それに影響を与える事は出来ないかのようであった。メーチ・ケーウは、今、確信した。彼女は、最終の目標——涅槃にやってきたのだと。

一瞬間的内観清晰地洞見無明、

（一瞬の内観は、明晰に無明を洞察する）

令我們對這一純大苦聚集的執着厭倦、

（それは、我々をして、この一つの、大いなる苦が

聚する所の執着を厭い、倦むようにせしめる）

不再緊抓。

（かく肯えば、我々は、二度と再び、強く握りしめるのを止める。）

在這清涼的片刻、

（心の清涼なこの一時）

内心的火熄滅了、

（心内の火は滅し去る故）

自然從苦中解脫。

（自ずと、苦から解脫される）

## 満開の花

---

1952年10月、トウトチノキの花が満開になった。ある日の午後、メーチ・ケーウは、木の下に座っていたが、心は燦然と輝いていた。彼女は、そろそろアチャン・マハブーワに会いに行くべき時が来た、と思った。この、己の道心を励まし、壮大で、光り輝く心内の深い場所での悟りを導いてくれた導師に、己の最高の果証を報告して、彼の、己への信頼に、報いなければならない、と考えた。それは、齋戒日の夕方であったが、彼女は、何人かの尼僧と共に、アチャン・マハブーワに会う為に、村の端にある稲田を通り、村のもう一つの端に出て、山の洞まで登って行った。アチャン・マハブーワが洞の入口に座っていたので、メーチ・ケーウは前に進んで三拝し、お互いに挨拶を交わした。次に、メーチ・ケーウは、合掌しながら頭を下げて、話をさせて欲しいと願い出た。

彼女は、これまでの一年間、己が精進した所の過程の次第と体験を、細かく述べて、最後に ” 師子吼 ” でもって、修行の最終的な果証の帰結とした：心の光芒が四方へ放射する所の空（クウ）が、宇宙全体に浸透し、一切の有為を超越した、と。話し終わると、アチャン・マハブーフは、彼女を見ながら、淡々と訊ねた：” それで終わり？”  
メーチ・ケーウは頷いた。

アチャン・マハブーフは、一瞬間を置くと、以下のように語った：” あなたは、心理現象を、それらを徹底的に超越する程に、観察した。残余の意識の汚染は、光を放つ所の、覚知の核心に戻り、心が自然に放光する所の、本性と合流する。この光明は、かくも壯観で、かくも人を魅了するが、非凡で自在な覚知と、直観的な智慧でさえも、その中に迷い込むのを、避ける事ができない。心の光明と、清らかさと明晰さは、かくの如くに凡俗を超え、かくの如くに、人をして畏敬させ、何ものとも、比べる事の出来ないものである。この光明の核心は、功德の円満、心霊の究極的な楽しさの化身であり、それはあなたの真正なる、本来の自我（=自己）——あなたの存在の核心なのである。しかしながら、この真我はまた、‘生’ と ‘有’ への執着の、すべての根源であり、この光明の根本的な光明の誘惑は、最終的には、衆生を尽きる事のない生と滅に導きいれ、恒常的に、生に執着せしめ、死に遭遇せしめるものである。

” 執着の根源とはすなわち、真正なる己への無知であり、無明が、意識の各種の汚染を引き起こし、意識的活動の持続力は、無明が逃避する通路である。この領域において、無明は最高の統治者となる。ひとたび、念と慧が、技巧を掌握して、意識的活動を消滅させて、この出口を閉じたならば、心理現象の流れが作り出した、有露の汚染は、停止する。外部にある、すべての出口を締め切ったならば、無明は心の内にあって、外部を操縦することはできなくなり、圧迫されて、能知（=知るもの）の根源の、光を放つ中心に、集まって来る。能知の中心は、光明の空（クウ）として顕現し、人はこれに対して、摂り込まれ、また驚かされる。

” この光明空と、涅槃の清浄空を、同じものだと、誤解してはならない。両者は、天と地ほどに、異なっている。光明心とは、不断に輪廻する元来の心を含み、それは、純一で清浄に満ちているという事はなく、生死輪廻から解脱している所の心性ではない。光明心は、非常に繊細で、自然な状態にあり、始終如一で、その光明と清らかさと明晰さは、その見かけ上、空（クウ）であると思わせてしまうものである。これは、名相（=精神、意識の相）を超越する所の本性ではあるものの、しかし、涅槃ではない。それはすでに、非常に清浄なる核心ではあるが、しかし、人をして魅了せしめる所の、壯観なる能知として顕現する。



”心が最終的に、形相（＝姿かたち）と概念に対するすべての執着を放下する時、能知の核心は、極めて精緻な性質を顕すが、それはすでに、一切を放下しているものである——己自身を除いては。その真正なる本性は、依然として、根本無明の浸透を受ける。故に、あなたが、意識していない状況の下で、光明の核心は、微細な形態の自我（＝エゴ）に変化して、あなたをして、この微細な快楽感、楽しさの感じと光明をば、無為なる心性であると、信じさせる事になってしまう。あなたは、これを無明とは意識できないままに、この壮観な心は、円満なる果証ではあるが、次の段階において、あなたはそれを涅槃、清浄心の究極空だと思い込んでしまう。

”空、光明、清らかさと明晰さ、楽しさは、皆、光明心における、微細な有為法である。もし、あなたが、子細に空を観察し、持続的に注意したならば、あなたは、それが、実は、真正には、始終一如ではない事に、気が付くはずである。根本無明が造り出した空は、精妙なる有為法で、それは時折、ささやかに変化する事がある——非常に微細に——しかし、あなたに、それが無常であると、分からせるには、十分なくらいに。あなたは、微細な変化を見て取ることが出来る。というのも、一切の有為の現象は——見かけ上、如何に奥深く、光明で、壮観であろうとも——多少とも、ちぐはぐした形跡を顕現するものである。”もし、これが真正なる涅槃であるならば、なぜ、それほど精緻な境界において、細かい変化を齎すことがあるのか？それは恒常でもなく、真実でもない。

光明の核心に専注するならば、あなたは、その光明もまた、同じ性質を擁していることを、はっきりと知ることができる——あなたが、以前超越した所の、すべての、その他の現象と同じように。唯一異なるのは、相対的な比較の下では、この光明は、非常に深く細密である、ということである。

”試しに想像してみて欲しいのだが、あなたが、空っぽの部屋の中にいるとして、あなたは、周囲を見まわして、空っぽで、なにも無い・・・絶対に、何等のものも、空間を占拠していない、と言う——その部屋の真ん中に立っている、あなたを除いては。あなたは、この部屋が空っぽである事を讃嘆するが、己自身を忘れてる。あなたは、己自身が、部屋の空間の中央を占拠している事を忘れてるのだが、それでどうして、部屋が空っぽだと言える？人が中にいるかぎり、部屋は、真正なる空（くう）である、とは言えない。最終的に、あなたがこの部屋から離れなければ、部屋は決して、真正なる空には、ならないという事に目覚めた時、その時、真我無明は崩壊して、汚染の無い、清浄心が生起する。

”ひとたび、心が一切の現象を手放す時、それは最高度の空に変化するが、しかし、あの、空を讃嘆する人、空を畏敬する人は、依然として存在する。この時、根拠地とし

での自我(=エゴ、己自身)——一切の誤った知見の根本——は、依然として、心の能知の核心の中に、融合している。我見は根本無明であり、その存在は、光明心の微細空と、汚染の無い清浄心の真空の、両者の間の違いを、表している。自我は、真の障礙であり、ひとたび、自我が崩壊して消失したならば、全く、障礙は余す所なく無くなり、その時、真空が出現する。

それはちょうど、あの空っぽの部屋にいた人間が、唯一、己自身が、そこから永遠に離れた時のように、そのような時に初めて、我々は、心が徹底的に空になった、と言えるのである。真正なる空は、徹底的に、また永遠に、束縛から離れているものであって、何らかの努力をして、維持するものではない。”無明とは、本質的に、盲目的な知覚であって、それは、光明、透明性と楽しさを偽装する。故に、無明は、自我にとっての、最後の避難港である。これら愛惜される心行は、依然として、微細な因縁によって生じるものであって、唯一、一切の有為法の痕跡が消え去った時、初めて、真空が出現する。”あなたがよく考えて、ひとたび、その真正なる様相を知る時、誤った覚知は、その時、分解される。この光明の幻像は、光芒でもって、あなたの知見を覆い隠し、心の真正なる、本来の不可思議を瞞着するのである。”

その夜、女性専門道場に戻って来ると、メーチ・ケーウは、光明心がなぜ、彼女の唯一の、恋々とした執着になるのか、その事を考えた。彼女は、この一粒の心を非常に愛惜し、それが干渉を受けないように、保護した。心身全体において、いかなるものをもってしても、この光明ほど、突出して顕現するものはなく、それは、人をして、迷わせ、夢中にさせるほどの驚嘆を激発し——そのことによって、一種の保護欲的な執着を生じせしめた——どのようなものをもってしても、それをかき乱すことを、望まなかった。メーチ・ケーウは、あの、一切を知っている核心に惑った為、その核心の本質を調査し、判断する事を忘れた。

心の範疇が内部に向かって退縮する時、それは発光する、喜悅と勇敢なる所の、光明点に集まった。心行のひとつづつは、みな、この核心から生起した；意識は、ここから、流露した；念頭(=想い)は、ここで形成された；一切の楽しさは、ここに集まった；故に、彼女は、この存在の中心、この恒常なる光明の透明性が、涅槃だ、と信じた。

しかし、彼女は、それが苦の集の核心なのだという事を、今、知った。メーチ・ケーウは、このことに関しては、動揺しなかったし、恐れもしないで、謹厳に、内心における、非凡な光明を、子細に審査し、何ほどこか、不円満な跡形がないかどうか、観察した。最初、光明心には、瑕疵がないし、干渉も受けないし、純潔で、汚染もないように、メーチ・ケーウには、思えた。しかし、彼女が更に深く細かく観察してみると、一つの、

同じように微細な、暗さの濃淡が、時たま浮かび上がり、あの光明・・・水晶のような清らかさをもった能知の核心を、暗く変化させるのに気が付いた。

この波動は、同じレベルの微細な苦と変化を、こっそりと潜入させた。この微細な波動は、明らかな不一致性を顕現し、それは、彼女に疑いを齎すには、十分であったが、その事によって、彼女は、引き続き、観察を続けるようにと、己を鼓舞した。その結果、彼女は、波動を観察する事に沈潜し、一刻も気を許すことなく、毎日継続して観察した。その為、時間の感覚も無くなり、日にちも忘れ、睡眠も忘れ、辛苦も疲労さえも、忘れた。

最も微細な波動が生じるや否や、彼女はそれに注意を向け、それは、光明なる覚知に  
おける、すべての邪執を、徹底的に打ち壊すまで、続いた。1952年11月1日、明け方、  
メーチ・ケーウは、円満なる念住を保持して、裸足で、経行道において、歩く瞑想を、  
何時間も実践していた。この時、彼女は身体の疲労を覚え、少しばかり休憩してから、  
台所へ行って、僧侶に供養する為の、朝食の準備をしようと思った。最初の曙光が、ト  
ウトチノキの頂を照らし、黄色い花が、柔らかい金色の太陽光の中に照らされた時、ま  
さに今到達せんとする、覚醒を迎えた。メーチ・ケーウは、ゆっくりと歩いて、木の下  
の縁台に行き、長い時間、静かに座って、心をして、深くて微細で、不動なる、焦点の  
ない、平静さの中に、あらしめた。

次に、非常に長い静けさが維持された時、心は前進する事もなく、後退する事もなく、  
停止する事もなかった。その後、空中に凝聚した所の、覚知の状態にありながら、しか  
し、特定の何かを知るということもない、彼女が長い間、愛惜してきた所の、水晶のよ  
うに透明な光明心は、突然、身を翻し、その後、消え去ってしまった——一つの、純潔  
で、心内に充満し、宇宙全体に浸透している、遍知の存在が、出現した。能知は、至る  
所に存在するが、しかし、法を一つも知らない。能知は、広大な宇宙の自然なる運用に  
しかすぎず、何か特定の場所から発散されるものではなく、特相（＝特徴、特別な相）  
がなく、根源を持たなかった。光明による覚知は、あの瞬間において、消え去り、残さ  
れたのは、清浄と清浄なる法の根本的解脱——一つの、一切の形式、概念を、徹底的に  
超越した所の、絶対無為の能知であった。

” 身体、心と本性は、  
明確な実相でもあり、  
また分離された、  
別々の実相でもある。  
あらゆるもの一切は、

必ずや所知（＝知られるもの）  
である——  
地水火風；  
色受想行識；  
声色香味触と感情；  
貪瞋と痴——  
一切は所知である。  
私は、あるがままに本然として、  
それらの存在を知る。  
しかし、私が如何にして、  
それらを探求しようとも、  
どの一刹那においても、  
それらが私の心を  
コントロールする能力を  
持っているという事を、  
見出す事ができない。  
それらは、生じては滅し、  
永遠に変化している；  
しかし、  
それらを知っている所の  
＜それ＞は、  
永遠に不変であり、  
永遠に生まれる事もなく、  
死ぬこともない。  
これが、  
諸々の苦の熄滅である。”  
（モノローグ）

#### 第四章 清浄——円満果証

---

有人説要証涅槃、  
（涅槃を証したいと思い）  
于是伸長頸項望向天上広闊的虚空。  
（首を伸ばして、空の上の、広い虚空を望む）  
他們没有意識到不管多麼用功望多麼遠、

(彼らは、どのように努力しても、どのように遠くを望んでも)

也望不到涅槃。

(涅槃は見えないことを知らない)

因為涅槃并不在有為的世間里。

(涅槃は、有為の世間の中には存在しないが故に)

## 河の流れと大海

---

川の流れは、地勢に従って、大海に向かって流れる。一条の河は、それぞれ名前を持ち、流れの状況もそれぞれに、異なる。しかしひとたび、大海に流れ込んだならば、河の水は、海水と混じりあって、唯一、一つの味になり、河の流れは、己の特徴を失う。河の水は、依然として存在するが、しかし、今は、海水と同じ特徴を、持つに至った。河の流れは、大海と同じではないが、しかし、大海と、異なるのでもない。同様に、メーチ・ケーウの清浄なる存在は、すでに、果てしのない涅槃の大海に、溶け込んだ。

しかし、彼女の本性は、今も、変化する事はない。とは言え、涅槃の清浄なる法の本性から、それを区別することはできない。それはちょうど、海に流れ込んだ河の水が、元の河に向かって、戻って行けないのと同じように、涅槃に溶け込んだ心性は、もはや、過去において生じた所の、自我の幻像的意識と、結合することはない。過去も、未来もないままに生きて、時間を超越した<今・ここ>において、本性は、過去の業の果を受ける事なく、また、新しい業の種を蒔く事もなく、二度と再び、毛筋一本ほどの、存在の痕跡さえも残すことはない。

続けて何日間も、メーチ・ケーウは、証悟した所の本性に、沈潜していた。彼女が、以前非常に愛惜していた光明心は、相対的に、今となっては、粗野で狭量なもので、両者の違いは、黄金と牛糞のように、思えた。最後には、元々の意識流を通して、心の本性は、改めて、彼女の色身及び六根——彼女の、あの、いまだ生死輪廻の生活の中にあつて、世間的自我を構成する所の和合体——と結合した。彼女の意識心と色身は、過去の無量劫における、宿業の残余であり、寿命が尽きて、色身が壊滅するまで、引き続き、過去の業報を引き継ぎ、受け取らねば、ならなかった。

メーチ・ケーウはすでに、涅槃の大海において、徹底的に心身の執着を消し去ったとはいっても、しかし、それらは、依然として、各々の範囲内において、己自身の機能に従って、運行された。とはいえ、心の核心は、すでに清浄となったので、彼女の一つひとつの念頭(=想い)は、無明から解脱しており、一つひとつの心行は、覚醒の顕現で

あった。この時、メーチ・ケーウの心は、すでに、世俗の渴愛に粘着される事はなく、彼女は、この世間に生きながら、しかし、この世間に属さなかった。彼女の心身は、宿業の残余である為、彼女は、過去世の経歴を明確に確認して、どのようなものが見えて来るか、試してみようと思った。

彼女は、天眼でもって、無始以来の、己の宿世の生命を観察した所、大変な驚きの心で、自分自身が何度も生まれ出て、また何度も死んで、無量無辺の生命の流れの中で、一体全体、何度生きたのかもわからないほどの、様相を見た。もし、彼女が以前に、彼女の生命が残した所の死骸を、野原に積んだならば、どんな小さな土地にも、それがぎっしりと積み上げられ、満杯にならない所は、なかった。これほど長期間に生きて、どれほど多くの生命を辿ったことか！

彼女はまったくもって、すべての生死を、計算する事は、できなかった。それは、計算などという事を、遥かに超えていた。ここまで回想すると、彼女の気持ちは、全くもって、萎えてしまった。これほど長期に、苦海に生まれていながら、なぜ、己は、必死になって、また再び、生まれ出ようとするのか？次に、彼女は心念を、世間の一人一人が、過去において死んで残した所の、無量の死骸に向けると、それは四方八方、どこも同じで、一切の衆生は、男女の別なく、皆このような生死の歴史を擁して、同じく、耐え難い輪廻の中に、墮ちていた。

この見地から言えば、衆生一人一人は、皆平等で、不公平でも不平等でもなかった——一皆、ただ、業力の因と縁によって、次から次へと、転々としながら、不断に生成し、また壊滅していた。後ろへ後ろへと見ていくと、彼女には、一人一人の衆生の過去には、皆、数えきれない程の死骸が、積み重なっているのが見えた。それは、一幅の、忘れる事の出来ない光景であった。

メーチ・ケーウは、生まれつき、世を憂うタイプの人間であった——深く、同胞の、心霊的な人生の結末を憐れんだ。今、彼女の心は、無上なる法の実相を証得して、人類の一切の概念を超越したが、しかし、どのようにすれば、仏法の真諦を、他の人に、分かって貰えるように、なるのだろうか？たとえ、指導や説法を試みてみたとしても、普通の凡夫は、深く無明の中に墮ちこんでおり、あれほど殊勝な清浄を、体験し悟る事は、決して、できない。

彼女は、自分の教えを受け入れる人、己が心を砕いて教え導くに値する人を、見つける事はできないだろう、と思った。少し考えると、彼女は、己の体験を、共に分け合い、共に享受したい、という氣力を失った。これはまるで、彼女は、命拾いの道を見つけたことが出来たが、ただ、己一人が逃げ切れた事に満足し、老いて死ぬまで、自分一人で

生きて行こうというようなものであった。彼女は、この事を考え続けている内に、仏世尊に、思いを馳せた。彼がどのように獅子吼して、苦の滅に至る道に、衆生を導いたのかを、考えた。

この時、再び、彼女は、出世間法を思い返し、また、修行と証悟の為に、己が歩いてきた道を振り返り、最後に彼女は、己自身もまた、一人の衆生に過ぎない事に、思い至った：彼女は、他の人々と、何等、異なる所はない。故に、必ずや、何人かの人は、彼女と同じ様に、根器が猛利である、に違いない。彼女は、心を込めて、仏陀が衆生を度した所の数々を思い、仏法が、世間に齎すことのできる、大きな利益に思い至った・・・特に、正法を修行する者にとっての、利益を。このような覚悟を決めると、彼女によろやく、説法をして、衆生を救おうという考え、彼女の教えを受け入れてくれる人を、指導しようという、思いが生じた。メーチ・ケーウは、女性専門道場で、隠遁の生活を二年程過ごして、一心勇猛に、解脱を追求する事に、精進した。今、彼女は遁世もせず、隠居もせず、皆と一緒に、日常的な作務に参加するようになった。彼女は、同じ目標を目指す修行仲間が、菩提道の上において、すべての潜在的な能力を発揮できる機会を、持てるように、と願った。

とは言うものの、メーチ・ケーウは、教学に関して、善くて巧みな方便に、欠けていた。畢竟、彼女は一人の純朴な、教育を受けた事のない、田舎の女性であった。彼女は口下手で、自分の考えを述べる事も、上手ではなかった。これは、累世に積み重ねられた習性で、この短い一生で、直せるものではなかった。彼女は、普泰の方言しか話せなかったし、田舎の人の俚諺を使って、道理を説いた。彼女は美辞麗句が言えず、開示は常に短く、直接的で分かり易かった——ごく短い言葉の中に、必要な事柄のキーポイントを埋め込み、聞く者が、己の力量に合わせて、理解できるようにした。

メーチ・ケーウは直感で、一人ひとりの対象の心内に、どのような弱点を持ち合わせているかを知っていたし、どのように糾すべきかも知っていたが、しかし、彼女は、心の内の思いを詳しく説明して、相手を指導する事ができなかった。これは、彼女に、衆生を度する方便が、不足していた為である。彼女の、水晶のように透き通る智慧の中において、真正に道を知る人は多くを語らず、道理を必死に宣伝する人は、ほとんど何も知らない（+ということが分かった）。弁晒寺の女性専門道場は、禅の修行と、当地における教化という二つの事柄に対して、同時に注意を払った。メーチ・ケーウはこの二つの方面において、重要な役割を演じて、大衆の需要と要望に応えた。彼女は菩提道の上における、各種の障礙を取り除き、次第円満を修証したので、今では、経験者として、禅修行を指導した。一人ひとり、メーチの修道のレベルが異なる事に配慮して、彼女は一人ひとり、個別に指導した。

メーチ・ケーウの勇猛果敢、精進する精神は、一つの模範であった——彼女は尼僧たちに、道業を成就する為に、全力を尽くすよう、激励した。メーチ・ケーウは以前、農村の生活の苦しみを経験した為、彼女は格別に、農村の婦人の背負っている重荷に同情し、尊敬の念と、己との共通点に鑑み、彼女は、簡素で素朴な生活の智慧でもって、彼女たちの、各種各様の雑事と瑣事を、指導した。

彼女の、あの荘厳なる威儀と、心内から生じる喜悦は、助けを求めて道場にやって来る、凡俗な人々の心霊のレベルを高め、現実生活における苦悩を、超越せしめた。彼女は特に、心霊の領域における衆生の幸福に関心をよせ、彼女が以前掌握した所の、心霊的なコミュニケーションの方法を駆使して、彼らと交流し、通常、深夜の異なる時間帯に、異なる領域の衆生の訪問客を招待して、平等に、同じくらいの数だけの亡霊や、天道の衆生の、面倒を見た。

心の力でもって問題を話し合う時、言語的な制限を受けないので、彼女は言いたい事をはっきりと言い、無尽蔵の慈悲でもって、相手を教化した。この方面において、メーチ・ケーウは、超常の能力を持っているため、彼女にとって、心霊の領域の衆生を指導する事は、命ある限り、己の責任であると思いなし、年老いて身体が衰弱した後であっても、倦まずたゆまず、彼らを助けたのであった。

我們生下来從孩童到長大成人

(我々は、生まれてこの方、幼少の頃から成人するまで)

都依頼父母和師長。

(いつも、父母や教師を頼りとした)

我們能有今日都是由于他們的撫育、

(我々が今日あるのは、彼らの養育のおかげであり)

他們對我們恩重如山。

(我々の、彼らに対する恩は、山の如くに重い。)





## 謝恩

---

アチャン・マハブーワとその弟子たちは、引き続き、弁晒村の付近で、何年も生活し、修行した。メーチ・ケーウは、神通によって、いつも、彼らの動静を知ることが出来た。というのも、彼らが去る時も、戻って来る時も、そのことが、彼女の意念に反映するからであった。1953年、雨安居が終了した後、アチャン・マハブーワは、禪の修行中に、一つの予兆を見た。それは、彼が禪相の中で高く舞い上がり、空中に停まって、一群の信者に法を弘めている、というものであった。彼が、下の方を見ると、己の年老いた母親が、彼に対して礼拝し、その後に、遠慮がちに、彼の目を見て、彼に対して、彼女の事を忘れないで欲しいのだといたげに、”あなたはもう戻ってこないのですか？”と訊ねた。出定後、アチャン・マハブーワは、禪相の意味を思惟し、これは明らかな予兆で、戻って母親を修道せしめ、彼女を度すべき時が来たのだ、と思った。

彼女が彼になした犠牲に対して、深い恩を感じていたアチャン・マハブーワは、故郷に戻って、60歳になる母親を剃髪得度させ、出家してメーチとなし、彼女に生ある間、仏法を学び、修行してもらいたいと思った。そして、彼は即刻手紙を送り、彼女に剃髪得度の準備をするように、伝えた。アチャン・マハブーワは、メーチ・ケーウに、一緒に故郷に行って欲しいと言った。彼は、母親が修行を始めるにあたって、メーチ・ケーウが彼女を指導し、また、彼女の傍にいてくれれば、彼女にとって、メーチ・ケーウは、理想的な道友になれると思った。

アチャン・マハブーワが、メーチ・ケーウを指導して、彼女の道業を成就させてくれたので、彼女は彼に対して、信頼の心篤く、一心に、彼に報恩したいと思った。故に、彼の要求に応じて、後二人の尼僧と共に、アチャン・マハブーワの一行と連れ立って、バーンター村までの、遠い旅路に同行した。アチャン・マハブーワはウドンタニの生まれで、そこは、弁晒村から何百マイルも離れていた。彼らがバーンター村に到着した時、彼の母親は、新しい生活を待ちきれずにいて、その為、彼らは即刻、彼女の落飾得度の手配をした。彼女は年老いていて、森林の中で、共に行脚するのは無理であったので、アチャン・マハブーワは、村の近くに土地を見つけて、森林道場を建てたいと思った。彼の叔父が友人たちと相談して、村から南方へ一マイルほど離れた場所にある、70エーカーほどの土地を布施する事になり、彼は、この申し出を受理した。

彼はここに落ち着く事に決め、男女の出家者が、皆、ここで、安らいで静かに修行の出来る道場を、開山・建造したいと、思った。その為、早速、信者たちに、竹と萱で、簡単な大殿を建てる事、出家者の住居として小さな茅葺小屋を建てることを指示した。道場が出来上がるまで、アチャン・マハブーワは彼の年老いたメーチである母親、メー

チ・ケーウと一群の比丘たちを連れて、東南方面、遙か遠くのチャンタブリに出かけた。彼らが足を止めた所は海辺で、そこには多くの漁民と果樹農民がいた。彼らは、1954年の雨季を、ここで過ごそうとしたが、雨季が終わらない内に、異変が起きて、その為彼らは、急いでそこを離れた。

先に、メーチ・ケーウと老親メーチが、ここの湿気の多い気候に耐えきれず、また当地の食べ物も喉を通らなかった。ここの食事は、東北地方のように、さっぱりしたものではなかった。程なく、老親メーチが病気になり、その病名は不明で、雨季が終わる頃には、病状は悪化して慢性麻痺の様相を呈し、挙動が不便になった。アチャン・マハブーワは、故郷で病気を治すために、なるべく早く、彼女を連れて帰ることを、決意した。バーンター村に帰ってみると、森林地域の新しい道場の大殿と茅葺小屋はすでに出来上がっていて、彼らの帰りを待っていた。

メーチ・ケーウは、森の中の薬草に詳しく、また、民間療法にも精通していた。新しい道場に戻ると、彼女は即刻、付近の森に入って、根や茎などの薬草を探し、持ち帰って、老メーチの治療に用いた。彼女は細心の注意を払って、師の母親の介護を引き受け、病状の変化に合わせて、薬を変えた。メーチ・ケーウの薬草による治療と介護によって、老メーチの病気は徐々に好転し、日常生活を送れるほどに回復した。

三年に及ぶ介護を経て、老メーチの手足は、ようやく完治をみた。開山した最初の年、バーンター寺の生活は困窮を極め、各種の必需品は、何一つもなかった。メーチ・ケーウたちは、死体を覆った後に捨てられた布を拾って来て、衣服を縫い、村民が寺院に持って来た稲わらを枕にし、古いタイヤを切って、履物を作った。食べ物については、ほとんどの場合、白飯しかなく、おかずはなく、ただ、無理やりその日その日を、やり過ごすのが精一杯であった。バーンター寺の創成期の事を思い出す度に、メーチ・ケーウは毎回、溜息をつかずにはいられなかった。

1960年より、外部世界は、森林仏教に未曾有の衝撃を齎した。大規模な伐採活動によって、森林は、驚天動地の速さで消失し、僧たちの活動空間が狭められ、最後には、山野を行脚する生活方式を放棄せざるを得なくなり、これより方、森林仏教の伝統は姿を変えた。バーンター寺は、道場の形式を維持して、アチャン・マンの法脈を伝承し、男女二衆に、出離の生活を保証し、持戒は厳粛で、集中的な禅修行による梵行生活を守ったが、それは、修行環境の変化に伴って、却って時代の先端を行く事となった。

アチャン・マハブーワは、自身の受容力と、率直な性格から、森林僧侶と宗門の人々の中流砥柱——独立不撓の精神的土台となり、その事によって、アチャン・マンの宗風

が、後世に伝わることとなった。彼は、円満なる智慧と精彩を放つ文筆でもって、アチャン・マンの生涯の事績と教法を顕し、多くの人々に、アチャン・マンその人を知らしめた。時を経ず、四方の修行者は、真正の明師に指導して貰いたいという希望を胸に、アチャン・マハブーワの膝下に参集した。バーンター寺の名声は、徐々に広がって行き、禅修行の重要な拠点となった。この過程において、メーチ・ケーウは、師の名声の陰に隠れて、今まで通りの、簡潔で素朴な言葉使いで、参学に来る女性たちを、黙々と指導した。老メーチの病いが好転したので、メーチ・ケーウは、彼女に、心を落ち着かせて、禅の修行をするように勧め、彼女に対して、〈細い水は長く流れる〉の譬えのように、そのような態度で努力して、順序正しく精進し、安定した基礎を打ち固める様に指導した。

彼女は老メーチに言った：修行の進捗は、主に、過去に積み重ねた福德の資糧によるもので、また、今ここで、どれほどか座禅と歩く瞑想を工夫して、努力するかによる。絶え間なく持戒して、悪念を起さずにいさえすれば、心は徐々に澄んで来るので、そうなれば、物事への理解は益々はっきりとしてくる。

修行が深くなるに従って、行者には、一切は唯心によって造られることが、知れてくる。我々は、目で色相を見、耳で音を聞き、鼻で香りを嗅ぎ、舌で味を味わい、身体で接触を感じ、意識で以て感情を感受しているが、しかし、心の覚知が、その一切を知っているのである。心はそれらを知っていて、それらを思考し、それらを堅固な真実なものである、と見做す。自在に運用する覚知と智慧の修習を實踐すれば、やがては、心行の本来の面目を見ることが出来る：止まることなく変遷し、実体がなく、苦と緊密に連携している所の、それを。もし、しっかりと專注していないならば、心は煩惱に鼻を掴まれて引っ張られ、その強大な衝動に屈服し、行者が問題を意識する前に、欲望、貪・瞋・痴は、瞬く間に大局を掌握し、正念を破壊する。

メーチ・ケーウは、老メーチに、己の心の子細に観察するよう指導し、煩惱の動静を識別する事を学び、心を保護して、正念を失わないようにしなければならない、と教えた。メーチ・ケーウの叡智の伴った談話と激励は、老メーチの道心を激発し、同時に彼女を、正しい道に導いた。何年か禅修行をして後、老メーチは、堅固な基礎を打ち立てた。メーチ・ケーウは、1967年にバーンター寺を離れたが、その時、老メーチはすでに、彼女の指導の下、仏陀の聖道において、安住する事ができていた。

提出問題之前、

(人に問題を問う前に)

先在内心尋找答案。

(まずは、己の心の内に向けて、答えを探すべし)

你找的話、

(あなたが探せば)

通常都能找到答案。

(大抵の答えは、心の内に、見つかるに違いない)

## 終生不変の信頼

---

1967年の頃になると、メーチ・ケーウの指導の下、老メーチとその他の尼僧たちは、皆正道に入り、禅修行の秘訣を掌握した。メーチ・ケーウはここにおいて、アチャン・マハブーワと別れて、弁晒女性専門道場に帰ることにした。バーンター寺にいたこの長い期間、メーチ・ケーウは、故郷の道友たちの事が心配で、毎年何度か、弁晒村に戻って皆に会い、またついでに何某かの必需品を持って帰った。今、アチャン・マハブーワの随喜賛同を得て、彼女は、己が創建した所の道場に戻る事にした。彼女は、逝去するまでの間、更に24年間、ここに住んだのであった。弁晒村に帰ると、メーチ・ケーウは、改めて道場の指導を担当した。この修道生活は、以前と同じく、安らかで静かで、簡素で素朴であり、日常生活において覚知を育成する事に重点を置き、一人ひとりに、メーチ・ケーウが以前に決めておいた清規を、厳格に守るように求め、一糸乱れることなく、八戒を守った。

メーチ・ケーウは、尼僧たちに出家の功德を開示した。彼女が話す時、その声は軽くて柔らかく、しかし力強くもあり、人々に深い印象を与えた：“あなたがここに来て出家して、他の女性たちと共に暮らす時、最も清浄なる想いで以て考え、話をし、行動しなければなりません。修心したいという思いを抱いて、世俗を出離したからには、すでに捨て去った世間のあれこれを、偲ぶ事のないように。今こそ、俗世間、眷属への懸念を、捨てる時なのです。”

彼女は、彼女たちに、以下のように訓戒した。話しをする時は、根拠のある事柄を話し、適切でない事柄は話さない。一切の苦難を耐え忍び、禅修行に励み、己の、本来の面目を探し求める事に奮闘し、修行者の模範とならなければならない。間違った因縁、失った因縁に懊悩してはならず、未来の果報を期待してもならない。これらの想いは、己を欺瞞しているに過ぎないが故に。彼女は、彼女たちに警告もした。怠惰な習慣と闘争する事に奮闘し、安易に、枕に負け去ってはいけない。一人ひとり、己の心念を、仔細に観察しなければならない。実相は、心の中にあり、あなた方はそれを探し出す為に、尽力しなければならない。彼女は、これらの弟子に、仏世尊の教えを、誠心誠意、信受

するように要求すると同時に、彼女たちに、己の歩むべき道を追求しているその時、その一步一步は、小心翼翼でなければならない、と勧め励ました。

道は各々の心の中にあるが故に、一人ひとりは、皆、己の心の中に、離苦の道を、探さねばならない。修行は怠けてはならず、精進しなければならない。道心は堅固で、揺れてはならず、道果を証悟するまで、諦めてはならない、と檄を飛ばした。毎回、誰かが怠けているのに気が付くと、彼女は彼女たちに、己の修行を点検するように、要求した。”あなた方の中の多くの方は、すでに、私と非常に長い時間、共に過ごしています。しかし、何を成就しましたか？あなた方の、目の前の事柄に対する執着は、成就されたものより、比べる事が出来ない程、多い。私の言う事を信じないのであれば、己に問うてごらんなさい：自分は、どれほどの執着を、取り払ったか？天人であっても、生まれてはまた死に、死んではまた生まれますが、それは、あなた方も同じです。天人は、己の変動不居の生命に、執着しているのです。

まさに、この生への追求が、生きていたいという願望への追求が、一切の衆生をして、長い夜における、苦海輪廻に引きずり込ませるものでなのです。”我々の修道は、決して、毛一筋程の気の緩みを許しません。あなた方は、今、道徳を育成し、真正なる楽しみを追求しています。我々の内の大部分の方は、老幼に関わらず、共に住まいして、共に修行します。各人は、出家の、簡素で素朴な生活の辛苦を、耐え俤ばなければなりません。だらだらと怠けてはならないし、人を恨んでもなりません。いつどんな時も、慈悲の心で対応するべきです。己の修行仲間には、優しく謙虚であるべきで、先輩・指導者の教えには、感謝の念をもって、受け入れなければなりません。

私が、あなた方の言論や、行いを批判するのは、あなた方の成長の為であり、あなた方の事を思っているのです。”あなた方は、指導者と、すべての修行仲間を敬わなければなりません。新参のメーチは、古参のメーチに礼拝し、それは、たとえ、あなたより、一日早く出家したメーチに対しても、そうするべきです。一人ひとりがサンガにおいて、先輩を敬い、後輩は謙虚で、という約束事に喜んで従う事ができさえすれば、皆は、縁に従って、共に暮らすことができます。このようであれば、慈と悲と喜が、心内に育成されて、彼此お互いに影響され、そして、それが、すべての衆生へと伝わって行きます。”

アチャン・マハブーワは、よく道場を訪ねて来た。彼は、多くの場面で、メーチ・ケーウを讃嘆し、彼女の事を、尼僧衆と在家者の、全き模範である、と言った。実際、すべての仏教徒は、メーチ・ケーウの修行に、追随するべきである。アチャン・マハブーワは、メーチ・ケーウの弟子たちに、己の指導者の徳行、彼女のあの無畏なる勇気と祈

願の力、また、彼女の無上の智慧と悲心、それらが、彼女をして、精進努力に向かわせ、修行に打ち込ませ、最後には、死界の無い、絶対に二度と再び、墜落することのない功德をば、証得することに成功した事に、しっかりと思いを致さなければならない、と激励した。メーチ・ケーウは、正等正覚仏世尊の教えを守り、苦と楽を乗り越えて、世間からの出離を、究竟成就したのである。

作為仏弟子、

(仏弟子たるもの)

我們絶対不可以て對自身的實相一無所知、

(決して、己の實相について、無知のままに)

任由生命腐朽。

(生命を虚しく、朽ち果てさせてはならない。)

死亡時、要做到對心身沒有絲毫牽挂、

(死ぬ時は、心身に、毛一筋程の思い入れも残さず)

放下自在地離去。

(自在に放下して、去るのがよい。)

## 心清淨

---

次の10年、メーチ・ケーウは大衆の慧命(=智慧ある命)を守るために、彼女が創設したサンガの運営に、命ある限り、全力を尽くした。1977年6月、彼女は突然の病に襲われた。実際には、彼女の身体は、病に蝕まれて相当の時間経っていたが、他人を煩わせたくなかったため、彼女はそれを、誰にも伝えずにいた。病状が悪化して誰の目にも隠せなくなった今、彼女たちは、否応なく、彼女を病院に連れて行った。医師の診断によると、彼女の半分の肺は、肺結核を患っていて、更に検査を進めると、糖尿病であることも分かった。この時、彼女の身体は、すでに相当に弱くなっていて、激痛も伴い、病状は、危険な段階にあると思われた。医師は、最悪の状況を予想して、彼女の病気は、すでに末期にあり、最も理想的な予後は、薬を飲みながら、一、二年生き延びる事だと、判断した。そうこうしている内に、メーチ・ケーウは喘息を併発し、喀血もしたので、医師が再度検査した所、もう一方の肺に、悪性腫瘍が見つかった。

ここにおいて、三種類の疾病が確認された。すなわち：肺結核、糖尿病と癌であった。予後は悲観された。一か月程入院したが、メーチ・ケーウは病状がどうであろうとも、退院して道場に帰りたい、と言いはった。たとえ何時かは死ぬとしても、彼女は、己が慈しんだ森林の中の静かな環境の下、道友の看護と心配りの中で、死にたいと思った。疾

病は彼女の身体を損なったが、しかし、彼女の心模様は、非常に良好であった。病気には淡々と対応し、いかなる心理的なストレスもなく、彼女は全くもって、己の安危を気に掛けておらず、死ぬ事に対して、平然としていた。彼女の心の中には、修行仲間、信者と友人の幸福だけが重要であって、己の身体などは、どうでもよかった。彼女の本性から発せられる光は、彼らの行く道を照らし、彼らの心を照らした。彼女の清浄なる慈心の下、一切の問題は、軽々と、一刀両断に解決した。

彼女が利益する事の出来る衆生が最も多くいる所、そこに彼女は、必ずいた・・・命の最後の一息の時まで。一人の、バンコクで医師になった人がいて、名をペンスリと言った。この人が、自ら志願して、メーチ・ケーウを看護する為に、并晒村にやって来た。ペンスリは医師になって20年経っていたが、メーチ・ケーウの身体を検査した後、専門的知識と最先端の薬を使って、肺結核と糖尿病を治療した。彼女は、抗生物質で肺結核を治し、定期的にインシュリンを注射して、糖尿病をコントロールした。癌に関しては、彼女にもよい治療法がなく、様子を見るしかなかった。

ペンスリ医師は、当時の体験を振り返って、メーチ・ケーウを治療したことは、医師としての己にとって、一番大変な時であった、と述べている。彼女自身が修行中の身であったので、阿羅漢であるメーチ・ケーウを治療するのに気後れがしたし、彼女の気持ちをくみ取るのも、難しかった。ペンスリ医師は、病人の、ある種の病を治してあげたとしても、その人は、別の何かの疾病で死ぬのであるから、彼女の治療の重点は、病人を治す事にあり、病気を治す事には置かなかった。

メーチ・ケーウが病膏肓であったことから、ペンスリ医師の看護の重点は、彼女に気持ちよく過ごして貰うことに置いた。故に、毎回、処方箋を作る時には、彼女は、メーチ・ケーウに診断の結果と、治療方針を説明した。メーチ・ケーウが受け入れればよし、もし受け入れないならば、ペンスリ医師は、彼女の意志を尊重した。メーチ・ケーウは、この時より、14年経って、逝去した。長年床に伏したが、彼女は依然として、出家の本分を守り、禅の修行も続けた。彼女は、毎日の日課をちよくちよく調整して、衰弱して行く己の身体の状態に合わせた・・・死に急ぐ必要も、なかったが故に。

彼女は、特別謙虚で、礼節のある態度を顕した。誰かが彼女の手伝いをすると、彼女はいつも相手の功德を讃嘆し、医師が薬を処方すると、薬を両手で高く額の上に捧げ持って、感謝を表した。彼女は同様の方式で、道場にやって来る訪問客に対応し、励ましと智慧の満ちた言葉で、彼らの疑問に答えた。

彼女の心は、常に清らかで光り輝いていたが、彼女はまた、不断に指導もした。彼女は若い時すでに、肉身が不断に死亡へと向かっている事実を看破したので、己の状況を淡々と受け入れ、毛一筋ほどの後悔もなかった。命の残りの時間と精力を、無私の心で、祝福を求めてやって来る人々に、捧げ尽くした。長年の病気によって、メーチ・ケーウの嚥下力と消化力は、ますます困難な様相を呈し、その結果、彼女の食事の量は、非常に少なくなり、一回にほんの少し食するだけになった。

彼女は年を取って、歯が抜け落ちたので、食べ物を咀嚼するのもゆっくりで、また気力がついて行かなかった。多くの場合、少しの食べ物を飲み込むだけで、一時間もかかったりした。時には、身体が余りに疲れているのか、または興味を感じないのか、食べながら眠ってしまうこともあった。彼女はすでに、人体は、永恆不変の本質を持たない事を、洞察して知っていたが、この一副の臭い皮袋を引きずって生きるのは、重い負担であり、しかも、身体は年老いてますます虚弱になるが故に、背負う重荷もますます重くなるのであった。

メーチ・ケーウの古い有形の肉体は、ゆっくりと朽ちて行った。各種の器官の機能は、日ごと衰弱した。この事に関して、彼女は既に、変化する色身の様相を見通していたので、このような局面に対面することは、遠い昔に、予知していた。暫くして後、彼女は、片方の目が緑内障になり、その為、血圧が危険な程に上がった。しかし、彼女は決して医師にかかりたいとは言わず、自然の成り行きに任せた。何か月の後、ようやく検査に連れて行くと、医師は、緑内障の方の目は、失明している事を発見した。また、もう一つの目は、白内障を患っていたが、ただ、あまり重症ではなく、物を見る事はできた。

この期間、彼女は腰痛で、虚弱になり無力であって、腰を屈めて歩いた為、彼女の行動は制限を受けた。その後、彼女は、両足に力が入らなくなり、歩く時は、人が支えなければならなくなった。ある日の朝起きてみると、メーチ・ケーウは、もはや歩くことが出来ない事を発見した。この時以来、どこへ行くにも、沐浴も、厠に行くのも、人を頼った。メーチ・ケーウは、慈愛と友好の精神でもって、仏法の為に、己の命を捧げた。残された日々は多くはなかったが、彼女は疲れを知らないかのように人々を助け、人々に模範を示し、近しい弟子と、彼女の看護に心を砕いている医師に、消える事のない印象を、残した。

病気は苦痛であり、試練ではあったが、しかし、彼女は病に影響されず、苦しみを訴えたことはなかった。メーチ・ケーウは苦悩から解脱しており、有情の世界の、あれやこれやを知っており、己の過去世を知っており、今世における証悟を知っており、神通



の顕し方を知っており、他人の心の想いを知っている為、色身の壊れて行く苦境に対して、決して動揺することはなかった。

メーチ・ケーウの下あごが垂れ、頬は凹み、皮膚は青白くなって、皺だらけになった。身体は、ベッドに横になったまま、身体の一部が、老いと病という二つの明確な象徴を顕し、大声でそれを、知らせているようであった。彼女の身体における、生命を繋ぎとめる機能は、ますます壊れて行き、弱くなり、減衰していき、生命的エネルギーは、時と共に、消費し尽くされて行くようであった。彼女の心身は、今では、過去の業力がそのコントロールを放棄して、それらを崩壊させるのを待っているだけのようであった。

そのような状態の中で、この心身において、空である所の、壊滅することのない清浄なる本性は、一切に浸透して、それが無い所はない、という状況であった。アチャン・マハブーワは、重病の我が弟子を見舞う為に道場に来て、看護師たちに、彼女の病状への対応は、因縁に従うように、と忠告した。彼は、メーチ・ケーウはこれまで、衆生の為に生きて来たが、今は、彼女を静かにこの世から離れさせる時であり、あなた方は、この阿羅漢尼の、最後の逝去に、干渉してはならない、と言った。

その時、彼女の肺は、体液と膿と痰が溜まり、ほとんど呼吸する事ができなかった。彼女の衰弱した身体は、ピクリとも動かずに、硬くなって横たわっていたが、唇は垂れ下がり、目は半開きであった。彼女の看護師は、生命の痕跡を検査して、呼吸音が聞こえない、と言った。明らかに、その時が来たのである。皆は目をそらさずに、彼女を見ていた。彼女の呼吸は、益々浅くなり、徐々に細くなって、完全に停止した。それが停止する時、非常に微細で、非常に静かで、メーチ・ケーウの逝去の確実な時間を、誰も知る事ができなかった。彼女の色身は、静かに横たわり、何等の異常も見えなかった。

メーチ・ケーウは、1991年6月18日早朝、円寂した。彼女の自性は、小川の水のように自由に流れ、河川に混じり、海に向かい、最後には、永恆で、寂靜で、果てしのない大海——空——の中に、徹底的に、溶け込んで行った。6月22日の夕方、アチャン・マハブーワは、当代の最も重要な阿羅漢尼——メーチ・ケーウ——に表敬するためにやって来た、僧侶と在家の人々に対して、以下の様に、仏法を開示した：“死を通して、メーチ・ケーウは我々をして、この世間の本質に注意を向ける様、促した：一つの例外もなく、我々の一人ひとは、遅かれ早かれ、必ず死ぬ。人として生まれたからには、我々は、この吉祥なる生命を、よりよく利用しなければならない。というのも、この生命は、我々が、内心の円満なる証悟を追求するには、最も佳い因縁なのであるから。

我々は、仏世尊の教えを懐疑する理由がなく、四聖諦は、すでに仏法の真実性を証明した。我々は、誠心誠意、仏法に従って修行するならば、必ずや、円満なる成就に向かうことのできる道果を、育成することができる。”しっかりと仏法を修習する人がいれば、この世界には、必ず阿羅漢が存在する。メーチ・ケーウは、その生き証人であり、彼女は殊勝な功德を擁した阿羅漢尼であった。我々がいつかは死ぬのと同じように、彼女も世を去った。しかし、真正なる意義は、彼女の心内の深い所にあった修習の功德——彼女の本性——であり、彼女の死では、決して、ない。心は根本であり、心が我々の一切の善悪の行為を主宰しており、故に、いまだ機会がある内、我々の責任は、この一粒の心を、清浄になすよう、尽力することである。”

メーチ・ケーウの荼毘は、翌日の午後、弁晒女性専門道場で挙行された。200人を超える比丘と、数千人を超える信徒が出席し、最後の敬礼を捧げた。敬意と敬虔なる誠意を表す為、男女の出家衆と在家信徒は、一列の長い列を作ってメーチ・ケーウの棺の周りを歩いた。香木を削って作った花を、棺の周りに飾ったが、それは、火葬用の薪が見えなくなる程、積み重ねられた。その後、人々は恭しく座り、アチャン・マハブーワが棺の下のほくちに火をつけると、炎は瞬く間に燃え上がり、黒い煙が、薪の間から昇って来て、炎熱の空に、ゆらゆらと消えて行った。この時、突然、清涼なこぬか雨が、法会の会場全体に降り注いだ。その日の深夜、火が消えた後、余燼は冷めて崩れ落ち、ただ小さな火だけが、チロチロと燃えた。猛烈な大火は、骨を灰白色の断片にし、その上にたくさんの小さな穴を作った。男女の出家衆は、静かにその周りにいて、長老の比丘たちが、恭しくその遺骨を灰燼とコークスの中から拾い出し、小心翼翼と、白い布で覆ったお盆の上に乗せた。

彼らは、これらの舍利を注意深く仕舞い、畏敬をこめて、安置した。次の日の朝、メーチ・ケーウのこれらの舍利は、彼女の敬虔なる信徒に、神聖な記念品として、頒けられた。これは阿羅漢尼の舍利であり、信徒たちの間では、純潔な功德の希代なる宝であり、超凡の力があり、持っている人を幸福にする——奇跡に近いのだが——所有してる人の信心と善行の多寡によって、得られる幸福の量も変わる、と信じられたいた。

多くの信徒が収集した遺骨は、何か月後か、または何年後かに、不思議な変質を生じさせた。これら遺骨の成分は、凝集して結晶体となり、更に堅固な宝石となった——あるものは水晶のように透明で、稜角のあるものになり、あるものは鷲鳥の卵のように、表面がつややかで、彩り豊かなものになった。これらの骨舍利は、阿羅漢の清浄の本質が残した物質で、心の清浄なる本性による、不可思議な奇跡であった：生命のない、砕かれた骨が、金剛または真珠に変化した。これは、阿羅漢の清浄心が浄化作用を起し、肉身の物質を、浄化したのだと思われた。

日常生活の中で、阿羅漢に内在するサマーディの力は、身体の基本的成分を絶え間なく浄化する為、これらの成分もまた、清らかになった。彼らが逝去した後、この浄化の作用が、普通の骨をば、舍利として、結晶させるのであった。メーチ・ケーウの、彩り豊かで、燦然と輝く骨舍利は、それを十分に証明した——もし、本当に証明する必要があるのであれば——彼女は真正なる聖なる声聞弟子であり、仏陀の真正なる娘であった。

### <メーチ・ケーウ法話集>

---

この世間に生まれ出たあなたは必ず、己自身に生まれながらに伴った智慧を頼りに生きなければならない。

あなたは快樂・・・楽しさを追求してもよいし、珍しいものを探し求めてもよい；時に苦しみ、時に困難に出会いながら、価値のないものを追求するのだろうか；それはあなたの選択の方向性による。

あなたは天国を見つけることも、地獄を見つけることもできるし、また涅槃へ向かう道果を見つけることもできる。

あなたは何でも、見つけることができる：すべては、あなた次第である。

人の幸福は人のもの；彼らが善を行っても、我々が善果を受け取る訳ではない。

故に、必ず、己自身で善を行じなければならない。

業力の効用・応報を疑ってはならない、あなたの行為の果報を小さく見積もってはならない。

人として、我々は、一切の衆生の苦難を憐憫するべきであって、畢竟、我々は皆、過去になした業によって、苦を受けている。

この見地から言えば、一人ひとりの人間は、皆平等である。

我々をよいか悪いか、太いか細いかか区別するのは、我々が過去に何をなしたかによる。

### <メーチ・ケーウ法話集>

---

あなたは、村全体の茅葺の家の屋根に使う萱を、すべて用意する事はできない。

布施は、自分の出来る範囲で、実践すべし。

もしあなたが、何か恥ずかしい事をしてしまったならば、なるべく隠れていましょう。

ちょうど蛙が、人間が来るのに気が付いたら、池の中に飛び込むのと同じように。

村のあちらこちらに行って、法螺を吹いてはいけない。  
もし、あなたが馬鹿ならば、己を、賢いなどと言ってはならない。

口をふさがずに遠慮なくしゃべる人は、話している内容が、正しいかどうか、怪しい事多い。

本当に知っている人は、口を開かずに黙っている。

必死に道理を説明する人は、分かっていない事が多い。

どれほど親しい人であっても、話をする時は慎重に；

どれほど心が傷ついていても、癩癩を起こしてはならない。

あなたが善良な人間でないのならば、はったりをかまして、己を飾ってはならない。  
己を、賢く善良であるように見せかける人は、実は馬鹿なのであり、道徳に欠ける愚人なのである。

この世界に生まれて、我々は過ぎていく一日、一月、一年を惜しみ、  
己の生命と他人の生命を、愛惜する。

故に、いつも憂慮と苦しみと悲痛の中にいる。

我々は生れ落ちるや否や、この脆弱な命に執着し、その後、不安になり、  
あれが怖い、これが恐ろしい、と言う。

我々の心は、貪・瞋・痴と恐怖に刺激された無明という名の習性に占拠され、  
世間の色々な影響を受ける。

我々は、生まれながらにこのようであり、もし、今、それを改めないのであれば、  
死ぬまで、これらの習性に支配される。

なんと惜しい事よ！

我々は、生れ落ちるや否や、苦のみがあつて、他のものは何もない。

我々は、要る、要らない；

満足、満足できない；

座る、横になる、食べる、廁に行く

.....

解脱していないが故に、苦が常に、傍にある。

故に、禪の修行の時、この苦について、中から外から、徹底的に点検するべきである。

我々は、小鳥の歌声が好き。

でも、余りに賑やかに歌うと、うるさいと言う。

我々は、これまで一度も、満足するという事を知らない。

## <メーチ・ケーウ法話集>

---

人の心は、苦痛で満たされていて、何ものをも、はっきりと知る事が、できない。  
間抜けな人は、肩で風を切って、苦悩を迎え入れ、己の欲望に捕らわれ、  
その中に陶醉し、苦痛を快樂だと、誤解する。  
聡明な人は、反省する事を知っていて、己を点検し、  
本当の快樂とは何か、本当の苦とは何かを、見極めることができる。  
彼らの心は、それほど簡単に騙される事はなく、己の頑迷を見た時、  
己が頑迷である事を認め；己の心の闇を見た時、己の心の闇を認め；  
己の愚かさと無知を見た時、彼らは、同じ様にそれを認める。  
彼らは、己の過誤を認め、他人の過誤を見ない。

戒は、出離の中で育成されるものであり；  
真正なる善は、心の中にある。

己の心意識を、子細に観察し、それらを注意深く点検する。  
ただ、この場所においてのみ、あなたは天国と地獄、覚醒へ向かう聖道、  
一切の憂鬱、悲しみ、苦悩を乗り越える帰依処を見つけることができる。

人に批判されても、不満を抱いてはならない。  
人に称賛されても、傲慢になってはならない。  
己の過誤を受け入れ、その後に改める。  
己を欺瞞してはならない。  
最も重要な事は、己を欺瞞しない事。  
己を欺瞞するという事は破戒と同じ。  
もし、あなたが希望するならば、世界中の人々を騙すことができるが、  
決して、己自身を騙してはいけない。

あなたが練習しないのであれば、禅の修行を学び取る事はできない。  
あなたが自らの目で真相を見た事がないのであれば、  
真相がなんであるかを、確実・正確に知る事はできない。

のんびりしてはいけない。  
朝は寒いと言い、昼は暑いと言い、夜は眠いと言い、  
そして、修行をする時間がないと言う。  
怠惰の指図を受けてはならず、智者の教えを、推量してはならない。

幼稚な人は、己の気持ちばかりを優先し、寝る事ばかりを考えて、枕が手放せない。  
このような人は、菩提道にあっても、永遠に進歩しない。

### <メーチ・ケーウ法話集>

---

決意して、禅の修行に精進し、あなたの心を鍛錬しなさい。  
心身のすべてを、仏法の追求に投げ入れ、松明のように、  
あなたの心でもって、道を照らしなさい。  
真心でもって修行したいと祈願するならば、あなたは苦を超越することができる。  
人として生まれたからには、行善に努力すべし。  
千々万々、仏法を役立たずの何かだと思ってはならない。

修行にお金は必要ない。  
よく戒を保ち、禅の修行をする。  
怠けないこと！  
止観の修行が円満成就したならば、心は煩惱から遠く離れる事ができる。  
一切の執着を捨てて、世間の苦を乗り越えたならば、涅槃を証得する事ができる。

急いで、心の中に、帰依処を育成しなさい。  
そうでなければ、死ぬ時、心が安心して頼みにできるものがない。  
一人ひとりの衆生は皆、生と死に遭遇するのであり、誰も避ける事はできない。  
人は生まれてくれば、必ず死ぬ。  
生まれては死に、死んでは生まれ、苦海の中で輪廻して止まない。  
老いて、先輩格になろうとも、社会的地位が高くなろうとも、  
人は、皆、等しく平等である。

我々は早死するかも知れないし、長生きするかも知れないが、それは誰にもわからない。  
ただはっきりしているのは、時が来れば、人は必ず死ぬということである。

### <メーチ・ケーウ法話集>

---

我々は、生まれてはまた死に、死んでは、また生まれ、  
生、老、死が、輪転して止まない。  
我々仏弟子たるもの、決して、己自身の真実に関して、

何一つ知らないまま、命朽ち果てるなどということがあってはならない。  
死がやって来たとき、よりよく死ぬこと、清らかに死ぬこと。  
心身に対して、毛一筋程の気がかりも残さないこと。  
全き放下をして、自在に死ぬこと、法の本性を証悟して後に死ぬこと、  
仏陀の足跡を追うこと、如々に死ぬこと、”不死”の界に入ること、  
これらができなければならない。

ある人がアチャン・マンに聞きました：

”森林の禅僧は、どんな本を読むのですか？”

彼は答える：

”まず、目を閉じて、精神を奮い立たせて、それから読み始める。”

”私は、朝早く目が覚めたなら、目は、色相の爆撃を受けるので、

私は、目と色相の接触を観察する。

私の耳は、音と接触し、私の鼻は、匂いと接触し、私の舌は、味と接触し、  
身体は、冷熱・硬軟と接触し、心は、念頭（＝想い）と感情に接触する；

すべての根門は、外塵に触れて、爆撃されるので、

私は、これらのものを、観察し続ける。

このようであるから、私の根門の一つ一つは、皆、私の教師と化す。

私は毎日、一刻も休まず仏法を学んでいるが、

ただ、己が、どの根門を選んで專注するかによって（＋内容が変わる）。

私は專注する時、その内にある実相を徹底的に知るよう、努力する。”

これが、アチャン・マンが私に教えた、禅の修行方法である。

### <メーチ・ケーウ法話集>

---

我々の、この世間で得られる知識は、非常に有用かも知れない。

しかし、どのような知識をもってしても、

真実に己を理解する事とは比べものにならない。

肉眼で得た理解と、心霊で得た理解は、完全に異なる。

思惟や反省で得た浅い理解と、

己の本性を徹底的に内観する事によって生起された深い知見は、

二つの別々の事柄なのである。

色身は、渴愛の主要な対象で、これによる汚染は、  
膠のような漆のような煩惱であって、苦は、その結果である。  
この問題を克服したいのであれば、注意力を用いて、  
肉身の腐乱した状態や分解の状態を観想して、  
心をして、人の存在に対して、悪心を生じせしめ、  
徹底的に、この幻想なる人身の本質を嫌悪することである。  
この臭い皮袋は、60 c m幅、180 c m高さ、  
瞬間瞬間に変化している一塊の血肉に過ぎない。  
心が仏法に専注する時、初歩的な内観は、  
色身に執着する事によってもたらされる苦を見る事ができる。  
それらの色身を完全に見通した人は、通常、非常に速く仏法を領悟する。

真正なる聖者だけが、仏法僧という、  
この三本の菩提樹の木陰に皈依することができる。

### ＜アチャン・カンパンがメーチ・ケーウに語った戒と律＞

---

” 仏法僧の三宝に皈依する事は、一人の仏教徒が仏法を追求する所の、第一歩となる。  
また、最も根本的な、第一歩でもある。仏陀は円満なる覚醒者の模範であり、修道者の  
導師である。仏に皈依すると言う事は、仏陀を導師とする事を認め、同時に、その他の、  
間違った対象に皈依しない、という事を意味する；法は、円満なる覚醒を追求する為の  
道で、また円満なる真理でもある。法に皈依すると言う事は、真理を目標として生きて  
行くという事で、同時に、今後は、間違った教えや、邪道に従わない、という誓いでも  
ある；

僧（原文ママ）（＝サンガまたは僧）とは、円満なる覚醒を追求する所の現実の現れ  
であり、僧（同左）（＝サンガまたは僧）に皈依する事は、僧伽（原文ママ）の庇護の  
下に入ると言う事で、それは同時に、愚かで無知な人、正法と乖離する人と、隊を組ま  
ない事を意味する；このように、仏法僧の三宝に皈依すると言う事は、円満なる覚醒者  
と約束を交わす事でもあり、同時に、最も基本的な、克己・忍耐を遵守する事に、同意  
することでもある。

” 三宝に皈依する事は、究極解脱の基礎である。戒は、我々が修道する上においての  
規範であり、悟り・覚醒の助縁である。敬虔に持戒すれば、我々の心は罪を犯す事がな



くなるし、懊悩する事もなくなる。また、戒は、我々自身が傷つかないようにと、守ってもくれる。戒の第一条は不殺生で、有情なる衆生は、どのような小さなものであっても、殺してはならないし、また、他人をして、殺すように唆してもいけないし、彼らを虐めてもいけない。有情はそれぞれ、己の生命を愛惜しており、故にあなたが彼を殺す事によって、彼が最も愛惜している所の、生命を終わらせるような事を、してはならない。

あなたは、憐憫の心で、一切の衆生に対応しなければならない。”人の物を盗んではいけないし、他人が盗むのを鼓舞してもいけない。有情はそれぞれ、己の所有物を愛惜しており、たとえその物が、あまり貴重な物には思えなくても、持ち主は非常に気に掛けているもので、そうであるから、偷盗する事によって、持ち主に損害を与えてはならない。

偷盗の行為は、持ち主から物を奪うだけでなく、彼の心を傷つける。あなたは、気概と率直の態度を、行為の基準としなければならない。

”これから以後、必ず梵行生活を送るように。如何なる男女関係も持つてはならない。淫行と情欲は、心身の清浄を破壊し、修道の目標とは180度異なる。故に、慈心と敬虔で誠実な心をもって、淫欲のエネルギーの、代わりとしなければならない。”嘘を言つてはならない。必ず真実を語るように。言動は誠実に、嘘を言ったり、人を騙したりしてはならない。

妄語はお互いの信頼を破壊し、皆が、お互いに、尊敬し合わない事態を生じせしめる。真実の力によって、あなたの心を自由にさせなさい。”残りの四か条は、我々の心身の平静を保つための修行の準則で、以下のように守って頂きたい。すなわち、お酒を飲んではならない。頭をボンヤリさせ、判断力に影響を及ぼす飲料や食品の類はどれも、手を出してはいけない；午後を過ぎれば、固形の食物を食べてはならない；歌舞音曲は禁止、娯楽を楽しんではならない；宝石、花卉で身を飾ってはならないし、香水、化粧品を使用してもならない；高くて大きなベッドに寝てはならないし、柔らかい敷物を敷いてはならない。豪華な装飾のある、柔らかいクッションの椅子に座ってもならない。

”よく気を付けて、慎重に八斎戒を守るように。あなたまず、世俗の門を閉めて、解脱へ向かう窓を開けなさい。よく覚えておくように；持戒の真正な目的は、戒の精神を、あなたの思想、言葉と行動の上に、体現する事であることを。このように持戒すれば、あなたの心を鍛錬することができ、あなたを生死輪廻に結び付ける結び目を、切断する事ができる。”持戒とは、単に、悪をなさないというだけでなく、あらゆる善法を実践することでもある。持戒は、我々の心を拘束し、苦悩を齎す悪行をさせないようにする

が、その他にも、我々の心と行為を浄化して、解脱へと向かわせてくれる。この八戒は、一切の仏法の修行の内でも、最も重要な基礎であり、出家の根本律でもある。しっかりと覚えておいて欲しいのだが、戒の修行は、解脱道の一部であり、故に、精進努力して、浄戒を尊び、荘重に持するように——。”（翻訳完了）

